
とある市民の自己防衛

桜くん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある市民の自己防衛

【Nコード】

N0113U

【作者名】

桜くん

【あらすじ】

電車の中で睡ったら、気がつけば意味の分らない状態になっていた。

こうして、新たな人生のスタート！・・・のハズが・・・

憑依じゃねえか！しかも一般人！！！！

よし！こうなったら・・・原作キャラとは関わらない様にしよう。

一応、自己防衛出来る力もあるしな！！

作者の書いた駄文の上、無茶苦茶ですが、お時間のある方はどうぞ。

プロローグ（前書き）

お見苦しい内容ですが・・・はじまります。

プロローグ

「次は、○●駅。○●駅。」

いつもの電車でいつものアナウンスを聴きながら、ガタゴト揺れる電車に俺は揺られていた。

外の風景もいつものまんま。乗客の顔も変化に乏しく余り変わらない。

そんな日常風景が今日もある。

いや、きつと明日も明後日も。

「ああ。寝み。」

テスト勉強のせいで大して寝てない。

「まあ、後少しだからな……。」

ああ、眠い……。

目を覚ますと、暗い場所にいた。何処だ此処？

「トンネルにでも入ったのか？ いや、それにしては。」

暗すぎる。まさか……。

「申し訳有りません！」

突然背後からそんな声が聞こえた。振り返ると、実に苦勞していそうなおジサンがいた。

テンプレと言う奴か。

「俺は、死んだんですか？」

「ええ。ワタクシこのような者です。」

おジサンは、名刺をそつと差出してきた。

（あの世課・ヤマダハヤト）

ふむ、実に分かりやすい。

「死んだといつても、肉体はまだ生きてますがね。」

どういう事だろうか？

「簡単です。精神が既に死亡しているのです。そして、ここに来た。」

ワタクシは、なんとか戻そうとしたのですが・・・。」

ダメだったと・・・。」

「で、俺はこれからどうなるんですか？まさか、このままここに？」

「いいえ、取り合いずアナタには、別の世界に行ってもらいます。」
「なんで？」

「この世界は、いわゆる神とそれに準ずる者しか存在が出来ないからです。」

「そんな・・・もう親にも会えないんですか？」

まだ、肉体が生きているのなら、可能性はある。そう思っていたが。

「・・・たとえ目覚めたとしても、その時のアナタは既に別人です。家族のことも友達のこと解からない。既に”アナタ”と言う存在は死亡していますから。」

「・・・。」

俺は、無言でうなづいた。

「それでは、転生して頂きます。これから行ってもらう世界は、いわゆるアニメの世界です。」

「アニメ？」

テンプレだ。

「知りませんか？最近よくー。」

「わあああああ！」

メタ発言は禁止だ。

「安心してください。アナタがある程度知っている世界ですから。」

「わかりました。・・・でもひとつお願いがあります。」

「なんででしょうか？」

「もし、俺の体が目覚めたら、少しでも昔を思い出せる様にしてください。」

「・・・善処します。」

ヤマダさんは、そう言つと白い紙を差出してきた。見るとそこには5つの欄があった。

「その中に自分の力を書いて下さい。なんでも良いですよ。」

「また、テンプレートな事が・・・。」

「いいえ、結構真面目なんです。今から行く世界には、別の神が転生させた方々が数人いらつしゃいます。いつ彼等の戦いに巻き込まれるか分かりませんから。」

「どうやら、結構デンジャラスな所らしい。」

「はあーわかりました。俺は、戦いなんてしたくないし、平和に一生を終えたい。」

「だから、目立つ力や強い力はパスっと。」

「こんなもんですかね。」

「えっと・・・」超電磁砲”と”一方通行の反射”と”幻想殺し”。確かに目立ちにくいですが、もう少し強い方が。」

「それでも自分の身ぐらい守れると思うのだが・・・」

「じゃあ、”球磨川君の力”と”不慮の事故”で。」

「あくまで自分優先で防御思考ですか。わかりました。では、”反射”と”不慮の事故”には、オン・オフ機能を付けときますね。」

「あ！待って下さい！どれか消して、コルルのライフジオの方が・・・。」

「最悪、海にでも逃げるつもりですか！？それなら最初はから”知られざる英雄”の方が良いのでは？」

それは・・・ちよっと・・・誰にも気付かれない人生は嫌だし・・・。

「分かりました。それも追加しておきましょう。元はワタクシの力不足なんですし。」

ヤマダさんはそう言うと言紙を受け取った。

「では、楽しい来世を。時々ですが、アナタの家族の写真でも送りますよ。」

「はい。」

すると、俺の意識は暗く濃い霧の中に沈んで行った。

プロローグ（後書き）

どうでしょうか？

第1話 予想外の転生（前書き）

始まります。

第1話 予想外の転生

目覚めると、目の前には、裸になった木々があった。どうやら冬の森の中のようなのだ。

イヤイヤ、待つてよ！なんで転生なのにこんなところにいるんだ？俺はそう思い立ち上がろうとするが。

「あり？」

いくら足を動かしてもスカスカと空をきってしまう・・・空？

俺は、恐る恐る下を見た。足が浮いていた。そして・・・首にはロープ。

「まさか・・・首吊り？」

イヤイヤ、なんで行き成り人生が終焉してるんだよ？一応さっき転生するってヤマダさんも・・・というか、なんで俺は平気なんだよ？すると答えが近くに転がっていた。近くで鳥がもがき苦しんでいる。ああ。”不慮の事故”か。俺は取り合えず電気をロープに流し焼き切った。

「やばかった。もし”不慮の事故”を覚えて無かったら死んでたぞ。

第1話から行き成り死亡って・・・ある意味斬新だが。

「はあ、まあいいか。・・・ん？」

すると、頭の中にヤマダさんの姿が浮かんできた。

『すいません。どうやら少々失敗したようです。』

「どういう事ですか？」

『やはり、精神だけじゃ不安定みたいです。そのせいで精神が死んでいた、その子に宿ったみたいです。』

「じゃあ、この体の元の持ち主は！どうなったんですか？」

『・・・恐らく既に死亡しています。今頃地獄か、天国か。・・・』

その時俺は、ヤマダさんの言葉を思い出した。

『目覚めたときは別人。』

リアルに実感した。確かにそうだ。

「俺・・・どうすれば・・・。」

『その方の体でなんとかしていただくしか・・・。』

「そんな・・・力は使えるけど・・・。」

先ほどから、元の持ち主の記憶が入ってくるのだが、ロクなものじゃねえぞ！イジメられて、死にたくなるのも分かる様な目に合って
そして・・・。

『申し訳有りません。どうか・・・。』

ヤマダさんの言葉には本気の申し訳なさが滲んでいた。

「はあ・・・わかりました。力の代償として受けますよ。」

・・・俺も甘いよな。

一応の記憶を頼りにこの身体の持ち主の家に行くとえらく小さなアパートだった。

「ただいま。」

そう言つて中に入るが誰もいない。留守なのだろうか？俺は、目をつむり思い出す。・・・そうか。

「これで、5回目の転校先だったのか。」

どんだけ暗い人生を送つて来んだよ。この人。俺は、頭を抱えて親の帰りを待った。すると

「電話か。」

突然電話が鳴り始めた。受話器を取ると、この身体のお母さんからだった。

『もしもし・・・一夜？母さんだけど。』

「うん。」

『ごめんね。やっぱり一緒には行けないみたいなの。お父さんも。』

「へ？」

どういう事だろうか？

『毎日、家政婦さんに来てもらってから安心して。』

一体何に安心すればいいんですか？訳が解からない。

『じゃあ、元気でね。』

そう言つと母さんからの電話は一方的に切られた。

「・・・・・・・・。」

これって、見捨てられたって事？

「なんだ！この新生活は！」

俺は悲鳴を上げた。

こうして俺の新しい人生がスタートしたのだった。

第1話 予想外の転生（後書き）

作者：ついに・・・投下してしまった・・・。

？：まあ・・・頑張れ。

作者：更新は、遅いですが、頑張ります。

第2話 リリカル・マジカル関わりません。(前書き)

短いです。

第2話 リリカル・マジカル関わりません。

突然の一人暮らしと言う小学生低学年がやっては行けない様な状況に混乱したが、しばらくして落ち着いた。

「まあ、ある意味ラッキーと考えるしか無いか。」

この身体の元の主である、南一夜と言う精神は既にこの世界にはいないのだ。

親と暮らしていたら、妖しがるだろうから。それこそ居心地が悪い。

「取り敢えず、ここが何の世界だか調べるか。」

ヤマダさんは、俺が知っているアニメの世界だと言った。しかも他の転生者達の戦いとまで言っていた。

少なくとも平和な世界とは思えない。となると、候補としては・・・

1. ” 超能力と魔法がある世界 ”
2. ” 近未来の能力者バトルの世界 ”
3. ” 小学生の先生がいる世界 ”
4. ” ファンタジーな魔法の世界 ”

・・・って所か。

「取り敢えず2と4は違うな。」

新聞を見るとちゃんと俺の知っている年より低いが少なくとも近未来では無い。

そして、ここは日本だ。帰り道に空飛ぶ人には合っていない。

「となると、可能性は1・3か。どちらも嫌だな。」

その時ふっと、新聞の文字が気になった。

「海鳴？」

そう書かれてあった。海鳴・・・魔法・・・いや待て！

「”リリカルなのは”だと！待て待て！確かにあらすじは知ってるけど細かくはしらんぞ！」

えっと・・・確か小学生の女の子が、魔法少女になって・・・ええっと・・・なんか黒い女の子と戦って・・・。

ダ、ダメだ・・・主人公の顔すら怪しい。まあ、そんな世界だ。

「ヤバイ・・・原作知識が無いと余計な事に巻き込まれるかも・・・」

そう思ったが・・・すぐに諦めた。なぜならば

「その”なのは”及びその周りに近づかなければ良いじゃん！よし、これで行こう！」

こうしてしばしの方針も決まり俺は眠ることにした。

#とーりゃんせ。とうりゃんせー。#

眠りにつくとこれまでの人生がフィードバックしてきた。もちろんこの身体の人生だ。

けして、格好良くもなくスペックも低いが、俺は生きようと誓った。

第3話 なんとか回避だよー夜くん（前書き）

続けて投下します。

第3話　なんとか回避だよー夜くん

さて、あれからしばらくたった。恐れていた通り俺の通う学校。"聖杯小学校"には、"なのは"と言う女の子がいた。

しかも、転校した先が彼女のクラス。テンプレだ。しかし、俺は持ち前のステルススキルで転校生と言う存在感を打ち消した。その結果、余りにされない存在になることが出来たのだった。イエー。

「ふ・・・しかもそれらしい事件は6月と12月に合ったからな。恐らく原作も回避成功だぜ。」

今は、年の瀬であり、次から4年生だ。

「ウンウン。順調順調。しかも転生者らしい奴らも見つけたし、これで俺の人生は大丈夫だぜ！」

転生者らしいのは、全員で3人いた。

1人は、赤神寿也。なのはの幼なじみであり彼氏らしい。

2人は、八神翼。転校生であるフェイトと仲がいい。他称・彼氏

3人は、遠藤晴樹。八神妹の彼氏らしい。

と、こんな感じである。そんなことから、"なのは"の他に"フェイト"と"はやて"と言う子にも注意して行きたい。

「さてと、親にでも手紙を出しますかね。」

あの電話以来マジで、親は来なかった。来るのは家政婦さんばかり

で、実際に顔を見たことがない。

しかし、それでもこの身体の親なのだ。手紙ぐらいは書いている。

「ヤベ・・・失敗か。」

インクが滲んでしまい字が消えてしまった。俺は時計を見るともうすぐ8時を刺す所だった。

どうしようか？うむ・・・。

「コンビニで買うか。ちょうど腹も空いたしな。」

俺は、財布を持って、家を出た。コンビニまでは歩いて10分もかからない。そんな軽い気持ちだった。

『ありがとうございます。』

と言う店員さんの言葉を聞き流し、買った肉まんをほっばりながら家路を急いでいると

「黙ってないで、なんか言ったらどうだ！このガキ！」

「全く・・・自分から絡んで来た癖にどうしてそう都合よく強気に出れるのか。理解に苦しみます。」

「んだと！」

女の子が酔っ払いに絡まれている現場を発見した。それにしても凄いな。顔は、暗くて見えないけど大人相手にそこまで言うか。もしかしたら、転生者？

「失礼。私には、やることがあるので。」

「待てや!」

酔っ払いは、女の子の肩にてをかけると力いっぱい壁に押し付けた。

「キャ・・・!」

小さな悲鳴が女の子の口から上がった。

「糞ガキが!こっちが下手にでてりゃ調子に乗りやがって!大人の怖さ、タツプリと体に教えてやる!」

そう言つて・・・って!ええ!ヤバイ!具体的には言えないけどなんかヤバイ!

「い・・・嫌・・・止めて下さい!」

女の子も先ほどまでのクールな声ではなくどこか弱々しい声で言つた。

だが、酔っ払いの手は止まらない。俺は傍観を一旦止めてポケットを探った。

「あつた。」

そして・・・。

「超電磁砲」かなりのご威力で。」

まさか、コイン一枚で酔っ払いを貫通して建物半壊とはな。

「アハハ・・・。」

俺は、ながば呆然としている女の子を無視して、9割方死んでいる酔っ払いに手をかけた。

「大嘘憑き」やっぱ、チートですね。」

すると、酔っ払いも建物も先程までの惨劇が嘘の様に治っていた。

「・・・。」

今思えば、酔っ払った事を無かった事にすればよかった。と言う罪悪感が湧かなくもない。

「なんですか？アナタは。」

そう聞かれたので俺は振り返りざまに言った。

「南一夜。ただの超能力者です。」

そして、失敗した。何故ならば。

「私は、”理”のマテリアル。星光の殲滅者です。」

そこには、俺が最も警戒すべき相手がいたからだった。

第3話 なんとか回避だよ一夜くん（後書き）

作者：普通使うのか？”超電磁砲”。

南：誰が書いたのかな？

星光：全くですね。

作者：……やりすぎました。

星光：あ、作者が逃亡しましたね。全く……まあいいでしょう。

南：え、次回もよろしく願います！っと。

星光：では、また。

第4話 別人だったよ・・・なにことだ！（前書き）

始めます。

第4話 別人だったよ・・・なにことだ！

「マテリアル？」

「ハイ。ですから私は高町なのはとは別人と考えて頂いて結構です。」

「場所は変わって近所の公園。テンパル俺になのは？が落ち着ける場所を示してくれた。」

「それにしてもソックリだな。危うく心臓が止まるかと思っただぞ。」

「私は、闇の書のメモリーを元に生まれましたから、90%同じと考えて頂いて結構です。」

「あり？さっきと言ってる事違くね。」

「なのは？は、袋から勝手に肉まんを取り出すと二つに割った。なんだろうか。」

「つまり、私は、この具の様なものなんですよ。言うなれば、ストリートな感情をもつ高町なのと言った所です。」

「???。」

「どう言う事なのだろうか？原作にこんなのがあったっけ？って言うよりなんで当然の如く肉まんを食ってたの？」

「まあ、こんなことをアナタに言っても分らないでしょうけどね。」

なのは？はそう言つと軽く笑つた。

「まあね。」

俺は、肉まんの半分を取り返し言つた。

「では、私はそろそろ行きますね。肉まんありがとうございました。」

「

「ああ。気をつけてな。もうあんな酔っ払いに絡まれるなよ。」

「ええ。最後にちょっとだけ嬉しかったです。人になれたみたいで。」

「

そう言い残すとなのは？は空へと飛び上がった。

「さよなら。」

何故か、その言葉は、寂しそうに聞こえた。

家に帰りハガキを制作する事1時間。時計の針はもうすぐ9時となるうとしていた。

「あゝ寝み。」

俺は、大きく欠伸をすると、布団の中に潜り込んだ。風呂には入っていないが問題無いだろう。

俺は、ゆっくりと近づいてくる睡魔に身をまかせ目をつむる。

「……。」

眠れなかった。どうにも先程のなのはモドキが気になるのだ。

「外でも散歩するか。」

そう誰にともなく呟くと、俺は家を出た。

別に気配を辿るとか、魔力を感じるとか出来る訳では無いのだが、
適当にぶらついていっていると、奇妙な感じがした。
何と言うか、誤魔化されている様な……そんな感じだ。

「???」

俺は、自分の右手を突出した。すると、空間に穴が空いた。
これは……結界とか言う奴か。

「……何かあるな？」

取り合えず深入りする気は無いので、”大嘘憑き”で自分の気配を
無かった事にする。

因みに、俺の”大嘘憑き”は元に戻せる使用になっている。

「おじゃましてーす。」

そう言って入り込む。

「アレ？何かが、当たったみたいだ。」

あたりを見ると、墜落していく人間が見えた。・・・墜落？

「バカな、ルンガは、ちゃんとよけたハズだぞ！」

「・・・偶然？のですか。」

見ると、なのは？と変な服を着た男が対峙していた。その近くには、プスプスと煙を上げる男が倒れていた。

「・・・俺のせいかな？」

そういえば”不慮の事故”って反射的に出てくるんだったな。気を付けねえと。

ルンガと言う男に手を合わせ、なのは？と男を見る。

「ち、闇の書の残りカスの分際で・・・とつとくたばりやがれ！」

「たとえば、残りカスであろうと、私は闇に帰ります。」

「そのまま、死んじゃえよ！」

結果は、見なくても分かる。あの男の勝ちだ。そもそもから、あのなのはモドキは既にボロボロだ。

きつと、別れてすぐから戦ってたんだらう。

「——ブレイカー！」

「遅せいよ！スフィアー！」

「あう！！！」

なのはモドキは、光弾に叩き落とされ、地面に打ち付けられた。

「止めだ。——！！！」

よく聞こえなかったが、恐らく最大技か。・・・どうする？このまま帰るか？

「原作には関わる気は無いしな。」

そう言うと、俺は、なのはモドキに背を向けた。

第4話 別人だったよ・・・なにことだ！（後書き）

作者：戻せる使用の”大嘘憑き”

南：自分で言うのもなんだが・・・チートじゃね？

作者：”不慮の事故”と良い勝負だと思うよ。

星光：それは、良いですけど・・・私は、どうなるのですか？

作者：それは、次回で！

第5話 ただの不幸な不慮の事故ですよ。 (前書き)

短いですが、どうぞ。

第5話 ただの不幸な不慮の事故ですよ。

この世に必然等無い。あるのは全て偶然である。

「ぎゃあああ!!」

だから、今日の前で男が絶叫して地面に叩きつけられるのも、全て偶然なのだ。

「え？」

なのはモドキは、体を起こしながら、不思議そうにこちらを見ている。俺は、直ぐにそいつを抱えて近くに建物に入った。その際、なのはモドキの気配を無かった事にした。

「どうも。良い夜だな。」

「え?・・・どうして、アナタが?まさかさっきのは。」

「いいや、あんなのは、ただの”不幸な不慮の事故”ですよ。」

俺は、某超能力者風に言ってみた。因みに加負荷の方では無い。

「ちょっと、散歩をしててな。やばそうだったから、顔を見せただけだ。因みにもう帰る。」

いくら気配を消しているとは言え、何時までもここにいる勇氣など無い。平和に来年を迎えたいのだ。

「ありがとうございました。では。」

「ちょい待ち。」

俺は、なのはモドキに手をかざす。

「はい。終わり。」

取り合えず怪我を無かったことにした。そして聞く。

「なんで、戦ってたの？」

「・・・アナタなら良いですね。闇のためです。」

「闇？」

なんか、中二病ポイ単語出た！

「私の始まりであり、親の様なモノなんです。ですから、私達は戦うんです。」

「戦えば、取り戻せるのか？」

「・・・。。。」

なのはモドキは、黙って下を向いた。

「・・・それでも仲間は戦っています。」

「仲間？」

「闇から生まれた仲間達です。閃光や闇それに他のマテリアル達。もうほとんど消えてしまいましたが。」

「……………」

よく分からないが、きっと、他のキャラモドキの事だろう。そうか、仲間はもういないのか。

「お世話になりました。」

なのはモドキはそう言つと、俺に何も言わせないように飛んで行つてしまった。

「……………」

なんで、ここまで彼女の事を考えたのだろうか？まだ、出会つて1日も経つてなかったのに…………

「…………”不慮の事故”か…………」

アハハ…………本当に事故だったな…………本当に。

「帰るか。家に。」

原作や関係者には関わらない。それが俺のスタイルだ。たとえ…………彼女が死んだとしても。

「眠いな……………」

こうして、俺は気付なかった事故は終わった。
遥か遠くで、綺麗な光が輝いていた。

第5話 ただの不幸な不慮の事故ですよ。（後書き）

作者：合掌。

南：合掌。

星光：・・・死にましたね・・・私。

作者：はい。消えましたね。完全に。

星光：そうですか・・・集え明星・・・

作者：バツ！

南：・・・相変わらず逃げ足だけはって！なんで、こちらに向かつて

杖を？

星光：・・・八つ当たりです。

南：理不尽だアア！！ぎゃあ——

星光：スッキリしました。まあ、何かしらの救済措置がある信じますか。

では、この辺で。サヨウナラ。

閑話 とある闇の創造物（前書き）

番外編。 始まります。

閑話 とある闇の創造物

闇 それは、恐怖の象徴。
闇 それは、安息の証し。

「どうやら、失敗のようですね。」

暗闇の中誰かが言った。

「だが、我らのやることは変わらん。」

「そうそう!」

闇の中からは、別の声が聞こえる。そして言う。

「我らは、闇を復活させる。闇より生まれし者達よ闘いだ。」

「——!——!」

闇の中より大勢の声が響く。彼らの気持ちは1つのようだ。作られた気持ちであるのだが。

「では、皆さん。ご健闘をお祈りします。」

誰かがそう言うと、闇の中には、3つの気配しか残らなかった。

「健闘か・・・そうあつて欲しいものだ。」

「闇”。そこまで、調子が悪いの?”

「雷刃”。あなたもコアの一部ならば分かるのでは?あの時、闇のほとんどが、あの子達から掻き消されました。」

「星光”の言う通りだ。もはや我らに勝ち目など微塵もない。」

「うわー偉そうな”闇”が言うとりアルに怖いね。」

「ですが、仕方ありません。このまま何もしなければ、私達はあの女と同じ末路ですから。」

「星光”はそう言う空へと飛び上がった。

「では、皆さん再び闇の世界でお会いしましょう。」

そう言うのと、”星光”は闇の中から出て行った。そんな姿を見て”雷刃”は溜め息をついた。

「”星光”の奴かなり無理してたね。もう殆ど消えても良い状態だよアレ。」

「奴は、我らの様に1度もオリジナルを取り込んでいないからな。力の流失も早いのだろう。」

「そうか・・・ボク等に来る事は無いかな?」

「ない。だが、奴の分も戦う事は出来る。・・・さて、逝こうか。さらばだ”雷刃”また、闇で。」

「うん。闇で。」

二人の手前強がっていましたが、流石に力が持たず私は、一旦地面に降りた。

「やはり、もう長くは無いですよね。気を抜いた瞬間消える自信まで湧いてきますよ。」

そう言つて、軽く笑うと私は、一旦休める場所を探し腰掛けた。どうやら何処かの住宅の裏の様だ。

「少し休んで行きましょうか。」

遠くの方で結界が形成されるのを見ながらそう決めると、家の中から楽しそうな家族の声が聞こえてきた。

「家族ですか・・・。」

高町なのはの MATERIAL である自分は、ある意味で彼女のトラウマを背負っている。自分の記憶の中の家族は自分にとっての苦しみの対象でしか無かった。高町なのはは、子供のころ父親の入院により家族から疎外されている様に感じていた。そのことが彼女のトラウマとなっていた。それでも彼女は、仲間たちのおかげで、そんなトラウマを克服したのだ。

「……」

そして、そのトラウマは今自分の中にある。何故なら自分は彼女の闇なのだから。マイナスの感情があるのは当たり前なのだ。

”星光”にとつての思い出とは苦しみしかないのだ。

「全く。笑えませんよ。」

”星光”はそう言つとゆつくりと立ち上がった。彼女にとってここは、居て良い世界ではない。そう確信したからだ。

どのくらい歩いたのだろうか？空でも飛べれば確認出来たのだろうか、そうするのは戦いの時位しか出来ない。

『マスター？』

自分の一部であり愛機である”ルシフェリオン”が私に声をかけてくる。

そういえば、なんでこの子だけ名前があるのだろうか？

『マスター』

謎である。

「なんでも有りませんよ。それよりも”闇”や”雷刃”や他の人達の魔力はどうですか？」

『あまり、減っていません。ご心配なく。』

「・・・そうですか。」

嘘をつくことが下手な子だ。私を心配させまいとして・・・ですが、貴方は私の一部なんですよ。嫌でも分かっています。

「（有り得ないスピードで減っていますね。”闇”と”雷刃”は今の所大丈夫みたいですが、長くは無さそうですね。）」

私はそう悟り歩くスピードを速めると、前方からやって来た酔っ払いとぶつかってしまった。

「すみません。」

私は、丁寧に謝ると先を急ぐため歩き出した。しかし

「待てや！ゴラ！」

と酔っ払いが私の肩を掴んできた。

「人にぶつかって置いてそれだけかあ？あ？」

どうやらタチの悪い人に絡まれた様だ。

「・・・。」

「黙ってないで、なんか言ったらどうだ！このガキ！」

「全く・・・自分から絡んで来た癖にどうしてそう都合よく強気に出れるのか。理解に苦しみます。」

「んだと！」

酔っ払いは怒鳴ったが今の私は急いでいるのだ。こんな所で、時間を喰っている暇は無い。

「失礼。私には、やることがあるので。」

「待てや！」

酔っ払いは、突然私の肩にてをかけると力いっぱい壁に押し付けた。

「キヤ・・・！」

弱っている私はあっさりと押さえつけられ、小さく声を上げた。

「糞ガキが！こつちが下手にでてりゃ調子に乗りやがって！大人の怖さ、タツプリと体に教えてやる！」

「い・・・嫌・・・止めて下さい！」

抵抗したくても力が出ない。本調子だったなら、こんな奴など相手にもならないのに。

お酒の匂いにする息を吐いてくる酔っ払いに私は生まれて始めて恐怖を言うものを感じた。

その時だった。突然爆音が鳴り響き酔っ払いが吹き飛んだ。そして聞こえる破壊音。

私は、気配を察して向くとそこには、眠そうな男の子がいた。

男の子は、何事かを言っていると、酔っ払いに手をかけた。

「!!!」

すると、どういう訳か、酔っ払いのケガがなくなり壊れたビルも元に戻っていた。

一瞬男の子は、何かを後悔したような顔になったが、直ぐに気を持ち直したようで、スッキリした顔になった。

「なんですか？アナタは。」

私がそう聞くと、男の子は待ってましたとばかりに振り返りざまに言った。

「南一夜。ただの超能力者です。」

その後何故か絶望的な表情になったが。

閑話 とある闇の創造物（後書き）

星光：私視点の話ですか。

作者：はい。駄文ですけど・・・。

南：・・・（只今、蘇生中）

作者：もう少しだけ続きます。

星光：では、次回でお会いしましょう。

閑話 とある闇の創造物2（前書き）

番外編。続きです。

閑話 とある闇の創造物2

南一夜と言う超能力者に助けられた後、精神的に危なくなつた超能力者を助けた。

どうやら、高町なのはに何らかのアレルギー的なものがあつたらしい。

「マテリアル？」

「ハイ。ですから私は高町なのはとは別人と考えて頂いて結構です。」

私は、南一夜にマテリアルの事を掻い摘んで話した。別に無視しても良かったのだが、この南一夜は、魔力は感じないがそれ以上の力を持っている可能性があるため話した方が無駄に興味をもたれるより良いと判断したからだ。ついでお腹も空いたからである。

「???」

南一夜は、話を理解しようとしているようだったが、所詮子供の様だ。

表情から、4割も理解出来ていないのが分かる。

「まあ、こんなことをアナタに言っても分らないでしょうけどね。」

「まあね。」

南一夜は、八つ当たりとばかりに私の食べかけの肉まんを奪い取りほうばつた。

「.....」

私の記憶（知識）が確かなら、これは関節キスと言うのではないのか？

そう思ったが、私は優しくスルーすることにした。

「では、私はそろそろ行きますね。肉まんありがとうございました。」

「ああ。気をつけてな。もうあんな酔っ払いに絡まれるなよ。」

「ええ。最後にちよつとだけ嬉しかったです。人になれたみたいで。」

そう。本当ならこんな事などせずに戦いで死んでいただろうから。

最後の最期で、人の様に会話が出来た。食べ物を楽しめた。助けられる事の嬉しさを知った。

もう十分だ。私は、涙を隠せる様に空へと飛び上がった。

「さよなら。」

私はもう一度手を振っている南一夜を見た後、自分の死地へと向かった。

「こいつは運がいいぞ。5匹目だ。」

「焦るなよルンガ。ゆつくりと痛ぶってやろうぜ。どうせ、もう殆どあのガキ共が殺っちまってんだがらよ。」

「ちげえねえ。」

私が戦場に入り最初に遭遇したのたそんな2人組だった。見ると、彼らの背後には碎けて闇に戻っているマテリアルがいた。

「”ユーノ・スクライア”のマテリアル……。安らかに眠って下さい。」

自身の本体である、”高町なのは”の師匠である”ユーノ・スクライア”のマテリアルがボロボロになりながら消えていく。

「ごめん。なのは。先に行くよ。」

「ええ。私もすぐに行きますよ。この2人を倒したらね。」

私は、彼が消えたのを確認すると、”ルシフェリオン”を構えた。

「ヒュー威勢が良いねえ。」

「見た感じボロボロじゃねえか。」

「すみません。アナタ達より良い方がモデルなので、問題有りませんよ。」

「……上等じゃねえか！俺らもガキ共からナメられるのにつんざりしてたんだよ！」

「ああ。どうせマテリアルだ。八つ裂きにして晒してやろうぜ！」

こうして戦いは始まった。私は、残りの力からどれだけ戦えるのかを計算し魔力弾を放つ。

2人はプロテクションを張りそれを防ぐが、残念ながらそれはフェイクだ。

「な！」

魔力弾を直前で破裂させ簡易煙幕を張る。そして、その間に設置型バインドをいくつかセットしておく。

「テメエ！！！」

案の定1人が飛び出して来た。バカめ。

「かかった。」

「なっ！！！」

バインドにはまり脱出出来ない男に魔力弾を撃ち込む。本来なら、”ブラストファイアー”か”ルシフェリオン・ブレイカー”を撃ち込みたい所なのだが、魔力の残量の関係で諦めた。

「スファイア！」

「あぶねえ！ガルン！」

と此処で、もう1人の男が出てきて魔力弾を防いだ。

「助かったぜ。ルンガ。」

「全く簡単な罠にハマりやがって！」

「へへ。」

そんな友情を繰り広げる2人に更に魔力弾×19をプレゼントして差上げた。

「「うお!!」」

それを避ける2人。外しましたか、かなり無茶をして仕留めにかかったのですが。

「デメエ！行き成り卑怯だぞ！」

「戦場で同じ言い訳が通るとでも？」

「ち、やっぱ、残りカスには友情が理解出来ねえか。」

ルンガと言う男が、そう言って舌打ちする。友情？そんなものは要りませんよ。必要なのは、闇の復活です。

そう思ったその時。"雷刃"の魔力が消失した。

「・・・！」

"雷刃"逝きましたか。私は、先程"ユーノ・スクライア"のマテリアルが消えた時と同じ感情を感じた。

"雷刃"は本体である"高町なのは"の友である"フェイト・テス

サロツサ”のマテリアルだったからだろうか。
まるで、自分の半身が引き裂かれる様な痛い様な切ない様な気持ち
がした。

「グッ・・・あっ」

その時、体中に衝撃が走った。何事かを確認するとどうやら相手の
魔力の一撃を受けてしまったらしい。

「戦い中に考え事とは余裕じゃないの？」

「誰か死んだか？ヒハハ。」

そうでした。今は、この人達と戦っていたのでしたね。私は、自分
の状態を確認する。よし、まだ行けそうです。

「すみません。ちょっと本気でいきますね。」

そう言うと、私は魔力を中程度消費し”ルシフェリオン”の先端に
魔力を収縮させる。そして相手に狙いを定め

「”プラストファイアー”！」

を発射する。まともに受ければ、あの程度の相手ならダウン間違い
無しの攻撃である。・・・だが、運命は私に厳しい様である。
2人は、意外と高った機動力で除けきる。

「く・・・。」

力の半分を使い切った私は、そう呻くと

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルンガと呼ばれていた男がプスプスと煙を出しながら落下していた。

「バカな、ルンガは、ちゃんとよけたハズだぞ！」

「・・・偶然？のですか。」

私は、今起きた現象に混乱していると、半分理性を失ったガルンと言う男が突っ込んで来た。

「ち、闇の書の残りカスの分際で・・・とつとくたばりやがれ！」

そう言うて来るガルン。しかし元からそのつもりです。

「たとえば、残りカスであろうと、私は闇に帰ります。」

「そのまま、死んじまえよ！」

でも、今は死ぬわけには行きません。せめて、マテリアルがいたと言っ事だけでも。私達だって生きている事でも分かってもらえない限り死ぬ訳には行けないんです。

「——ブレイカー！」

「遅せいよ！スフィアー！」

「あう！！」

私の最後の力を込めた一撃もかわされ私は地面に打ち付けられた。

「止めた。――！！！」

光の塊が直ぐ目の前まで迫っている。

「終わりですか。」

すると、生まれてからこれまでの事が蘇ってきた。俗に言う走馬燈という奴だろうか？

大半は、“高町なのは”としての記憶だった。当然だ元は彼女の闇なのだから。そして、直ぐ前の事件から記憶が黒く染まり次に見えたのは影だった。どうやら、ここからが私の記憶の様だ。

「うわー暗いですね。」

凄まじく暗い色しか見えない記憶だった。まあ、生まれてから太陽と呼べるモノも見えないから当然だが。すると、突然画面が切り替わり、先程あつた男の子の姿が浮かんできた。

「……。」

たいして格好良くなければ、魅力的とも言えない男の子。そんな彼の笑顔が、浮かんだ。

「肉まん……。」

そう呟いた時不思議な暖かさが体を包み込んだ。

「ぎゃあああ!!」

「え？」

すると次の瞬間には、ガルンと言う男が悲鳴を上げながら落ちていった。そして突然の浮遊感が私を襲った。

しかし抵抗はしなかった。何故か分からないが、とっても暖かかったからだ。そう思っていると

「どうも。良い夜だな。」

と言つて、あの男の子が立っていた。その顔には心配そうな感じが浮かんでいた。

「え?・・・どうして、アナタが?まさかさっきのは。」

さっきの事態は・・・いや、その前の事もまさか彼が助けてくれたのだろうか?

「いいや、あんなのは、ただの”不幸な不慮の事故”ですよ。」

しかし、彼はそう言つと笑つて言つた。

「ちょっと、散歩をしててな。やばそうだったから、顔を見せただけだ。因みにもう帰る。」

そんな、ふざけける様に言う彼に私はとっても泣きたい気持ちになった。何故か分からなかったけれど私はもう一度だけ彼に会いたかったのだ。でも今私を助けたと言う事は、下手をしたら管理局に目をつけられてしまうのかもしれない。

私は、そう思いこの場を立ち去ることに決めた。

「ありがとうございます。では。」

「ちょい待ち。」

立ち去ろうとする私に彼は手をかざす。何を・・・そう聞こうとしたとき、体から痛みが引いた。いや、なくなった？

「はい。終わり。」

彼が、そう言うと、痛み所か、キズすらなくなっていた。まるで最初から無かった様に。服までも元に戻っていた。

恐らくこれは、彼の能力なのだろう。すると、彼は真剣な眼差しで聞いてきた。

「なんで、戦ってんの？」

その目には興味とかそんなお遊びの心など無くただ一心に心配が浮かんでいた。・・・言ってもいいかな・・・。

私は、全てを話す。

「・・・アナタなら良いですね。闇のためです。」

彼に全てを話し、私の心は少しだけ軽くなった。そして私は、彼から逃げた。これ以上彼といれば、私は戦えなくなると思ったからだ。何故そう思ったのか分らな・・・いや、私は、彼に好意を持

ってしまったのだ。全く我ながら単純な性格だと思う。

「・・・一夜・・・。」

私は、自分が”高町なのは”ではなく、”星光の破壊者”として”私”として初めての初恋の相手の名前を呟いた。

「・・・全く・・・不幸な不慮の事故ですよ。」

もうすぐ私は消える。

この物語はバットエンド。

でも、私は・・・。。。

「幸せでしたよ？一夜。」

その夜は一日中赤い光が満ちていたと言う。その光はとても力強くとても美しく、そして、とても儚い光だったと言う。

その光は、とある少女の初恋の残滓。

その光は、闇をも照らし、とある人物に・・・。。。

閑話 とある闇の創造物2（後書き）

雷刃：どうでも良いけどさ、ルンガって無事なの？

作者：まあ、死者は出なかったそうなので、無事なのでしょう。

・・・所で、何故アナタがここに？星光さんは？

雷刃：うーん、恥ずかしくなったみたいで、逃げて行ったよ。ボクは、出番が、

”死亡”位しか無かったから出て良いつて。”闇”も一応いるよ。

闇：・・・（我・・・結局1行も出番が無かった・・・。）

作者：すみません。下書きには、登場していたのですが・・・転生者に瞬殺

される役だったので・・・不憫で・・・。

雷刃：ボクは？

作者：変更無しです。

雷刃：へえ〜。

闇：――――

雷刃：ん？ちょ！”闇”何してんの！

闇：散れ！作者！”エクスカリバー”！！

作者：ギヤアアアアアア！！

雷刃：ああ！作者がゴミの様に！

闇：フハハハ！出番が無いならば作るまで！ここは、我が頂いた！

雷刃：おお！流石は、”闇”！伊達に”王”とは、名乗っていないね！

・・・瞬殺されたけど。

闇：アハハ！もつと褒めるが良い！

雷刃：と、言う訳で、これからもよろしくお願いします！

作者：よろしくお願いします。・・・ガク・・・

第6話 新しい朝の1ページ。(前書き)

投下します。

第6話 新しい朝の1ページ。

あれから、少したち、俺は無事に原作に巻き込まれる事無く新年を迎えた。

とは言え、家は俺一人であるため適当にデパートからオセチの小売を買って祝った。

その後、残っていた宿題を片付けテレビの特番をゴロゴロしながら見ていた。

御神籤も引いて見たが、結果は”大凶”と言うこの時期では逆に運の良い部類に入るものが出た。

なんでも、待ち人がこない上に他人がいるそう。なんじゃこりや？そんなこんなしていてもうすぐ新学期が始まるので、新しい鉛筆と消しゴムを新調した帰り道俺は、アイツと最後に会った場所に自然と足が向かっていた。

「ったく。あの日はお前のせいで眠れなかったんだぞ？」

そう言っつて、空き缶に花をさしてお菓子を近くに置く。

「お前の為じゃねえからな。」

俺がそう言っつて、外に出ると銀髪の女性がいた。

「・・・・・・・・。」

間違いない。あの髪色は100%原作キャラだ。何故こんな所に？

「私はどうするべきだったのか・・・どうすれば・・・。」

チャンスだ！原作キャラは只今、よくある苦悩シーンの真っ最中のようだ。

「今だ！」

俺は、風のように走る。そして、原作キャラの脇を・・・

「アベシ！！！」

「ん？」

抜けようとした瞬間突然動いた右腕により世界が一回転した。

「わ！すまん！大丈夫か？」

「ダイビヨウブデフ（大丈夫です）。」

抜かった。正月だったので”不慮の事故”も”反射”も切ってたんだった。随分しさしぶりなダメージだったりする。

「いや、そうは見えんぞ？顔面から凄まじい量の失血が・・・。」

え？そうなってるの？・・・本当だ！地面に血だまりが出来てる！ヤバくね？

「ちょっと待ってる。」

原作キャラの前でまさか”大嘘憑き”を発動するわけにもいかないし地味に痛いし。どうしよう？

「アレ？」

「目覚めたか。」

いつの間にか気を失っていたようだ。と言うよりなんで、膝枕？

「ギャアア！！」

原作キャラに膝枕をされているううう！！ヤバイっつかなんで？
見知らぬ子に膝枕？

「すまない。驚かしてしまったか。」

「あ、いいえ。」

よし。クールになれ俺。この状況はまだ回避出来るレベルのはずだ。
取り合えず離れてあたりを見渡すとそこは、俺がさっきまでいた場所だった。

「お前が、そこらか出てきたのは分かっていたからな。」

どうやら、原作キャラのスキルを甘く見すぎていた様だ。原作キャラは花を見て言った。

「お前は、どうしてこんな所にいたのだ？」

「見ての通り友達の供養のためですよ。アンタこそなんでこんな所

に？」

「私は、・・・何故なのだろうな？例えるなら、自分が死んだからか？いや、姉弟が死んだからと言うべきか？」

これが、原作キャラではなければ俺は不審人物として即座に通報していただろう。

「すまない。言葉が見つからないのだ。」

「そうですか。じゃあ、俺はここで。」

もうこんな所には、長居は無用だ。俺はそう言いつつ、外に出るために歩き出した。

サラバ原作キャラ。フォーエバー♪

「ああ、全く。お前は何か言いたかったのだ・・・」星光「よ。」

”星光” その言葉に俺は足を止めた。

「”生きて下さい”だと。全く・・・笑える。闇をまき散らし主にその友にまで迷惑をかけた私が・・・呪われた私が・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

俺は次の言葉を待った。そうしなければ、どうする事も出来ない。そして、原作キャラは言う。

「・・・私など早く消えてしまえば良い。あのマテリアルの様に幸せな記憶を抱えたままで。」

「・・・。」

そうかい。じゃあ・・・。

「俺が消してやるよ。」

そう言つて、ポケットからゲームコインを取り出した。

「えっ？」

原作キャラは、俺に気付いたが。

もう遅い。高圧電流の塊が、原作キャラの腹部を貫いた。

第6話 新しい朝の1ページ。（後書き）

闇 : キサマはアホか。

南 : スミマセン。だが、後悔はしていない！

雷刃 : それにしても、管理プログラム。が言っていた、” 星光 ” の事って、一体

なんなの？

星光 : 次回で、分かりますよ。

雷刃 : うわゝさりげなく次回予告だ・・・。

星光 : では、次回で。

第7話 力無き強者と星の輝（前書き）

投下。

します。

ぶっぶ。

第7話 力無き強者と星の輝

最後に彼女の相手をしたのは、私だった。

「お前で最後だ。」

「分かっていますよ。”闇”も先程消えた様ですね。」

彼女は、追い詰められているのに何故か満たされている顔をしていました。

闇の力のマテリアルに有るまじき表情だった。

「”闇”のいや”夜天”の管理人格。」

「今は、リーンフォースと言う名がある。」

私が、主から頂いた名を名乗ると彼女”高町なのは”のマテリアルは深々と頭を下げた。

「失礼。リーンフォース。一つ良いですか？」

「なんだ？」

「貴方は今幸せですか？因みに私はとっても幸福な気分です。キラを忘れて小躍りが出来ますよ。」

「私は、・・・幸せだ。主と騎士達と過ごす時間は何者には代え難い。私の宝だ。」

「そうですか。良かったです。」

「何だと?」

私がクビをひねると、”高町なのは”のマテリアルはクスクスと笑った。

「私は、”高町なのは”の”闇”であると同時に貴方の一部でもあるのですよ。少なくとも私の中の”貴方”は、幸せとは無縁でした。私は”過去”の”貴方”として、祝福致します。」

「・・・・・・・・。」

一体このマテリアルは何を言っているのだろうか。理解出来ない。だが、今はやることをやるだけだ。

「済まない。そろそろ終わりにさせてもらうぞ。」

「そうですね。私がいると、また罪の”有る”マテリアルが生まれますから。」

「自分がどう言う存在かを理解している様だな。」

「ええ。大体は理解出来ています。」

そう言うと、デバイスを構えてきた。

「大人しく闇には帰ってくれないか。」

「済みません。これが、私と言う存在なので。」

そう言うとも何も言わずに突っ込んできた。本当に突っ込んできただけだった。そして一撃で勝負が着いた。

「どういふつもりだ？あれでは、無駄死にはないか。」

「そうですね。別に気にしないで下さい。こんなただの”不慮の事故”ですから。」

彼女は、そう言って笑った。幸福そうに笑った。

「一つだけ良いですか？」

「何だ？」

「”生きて下さい” 私達の分も”生きて”下さい。」

「・・・・・・・・。」

「どうしても無理だと思ったら、”あの人”を頼って下さい。きっと何とかしてくれますら・・・・。」

「あの”人”？」

「・・・・アハハ・・・・。」

そう言うともマテリアルはゆっくりと粒子になり闇の中へ帰って行った。だが、私にはそれが、光の中に吸い込まれる様に見えた。

「・・・・・・・・。」

私は、何時までも彼女が消えて行った、空間を見つめていた。

時が経ち今私の腹部には大きな穴が開き赤い液体が漏れ出し肉は焦げていた。

「ゴブツ……。」

口の中が鉄の味に染まり、赤い液体が流れ出てくる。
力が入らない。

「苦しいか？ そうだろうな。俺がそうしたんだから。」

私の体が突然浮き上がり壁に叩きつけられる。そしてそのまま手足を太い螺子で固定されてしまった。

「なんで……お前が……。」

死ぬほど痛い。だが、死ねない。苦しみの連鎖が続く。そんな私を先程の少年が恨めしそうに見てた。

一体どうやったのだ？ 私は常に主の為に辺りは警戒していたハズである。魔力の反応があれば直ぐに対応出来たはずなのだ。
しかし、少年からは魔力など感じられない。

「……一体……なん……。」

すると少年は、ニッコリとワラウ。

「俺は、”星光”の友達じゃない超能力者ですよ。」

そう言って、更に微笑んだ。

第7話 力無き強者と星の輝（後書き）

闇：私の存在忘れられて無かった！！！！

雷刃：良かったね！”闇”！（でも、”星光”。ボクの時程取り乱して無かったよね？やっぱり出会って日が浅かったから？）

星光：それにしても気になりますね。

雷刃：うん。”星光”のキャラを忘れたダンスってどんなのなのかな？

星光：いいえ、それではなく・・・。

ルシ：”雷刃”様。音楽プレイヤーなら内蔵しておりますが？

雷刃：新事実！良し！踊ろう！

星光：あ、ちょ・・・！！

闇：・・・また、我だけ取り残された！！・・・グス・・・では、次回で。

第8話 これは罰ですか？いいえ嘘つきです。(前書き)

プロローグ 編終了。

第8話 これは罰ですか？いいえ嘘つきです。

一体何をしてるんだろうね俺。原作キャラを磔って。バカじゃねえの？

「”星光”の・・・友達？」

「ああ。一目惚れしたよ。」

アー恥ずかしい！でも、本当だ。

一目惚れだった。前の世界でもそんな事は無かった。

「・・・でも、出会って2時間位しか経って無かった。」

俺は、砂鉄を集め剣にする。漆黒の剣が俺の手に納まる。

「正直お前がなんなのか知らんが。」

俺は、剣で原作キャラの腕を切り落とす。原作キャラは、少し苦しそうな表情になる。

しかし、声は上げなかった。

「友達の事を馬鹿にしたら。」

次は、足を切り落とす。腕も足も失い原作キャラは、不様にも地面に落下する。

「俺でも切れるさ。」

そして最後に胴体へ突き刺し電流を流す。手加減無しの高圧電流だ。

「ガッ
ツアアアアアアアア！！！！！！！！」

「苦しいか？苦しいよな？そうだよな？これが」生きる」事だ。死にたい？良いぞじゃあ死ね！」

「ア
”
ア
”
ア
”
ア
”
ア
”
ア
”
ア
”
！！！！！！！！！！」

最早、元の姿も分からなくなるまで丸焦げにされても生きている彼女。

「このまま死ね！ 気付かれず死ね！ 惨めに死ね！ 家族や友人にも知られずに死ね！」

「あああ・・・。」

原作キャラはもう何も考える事は出来ていないだろう。

7
 •
 •
 •
 ○
 8

俺は、止めを刺すべく螺子を取り出した。

手足をもがれ、体を焼かれた。

これは、罰なのだろう。

やはり、私は生きていて良いハズ無かったのだ。

あの時。闇と共に消え逝くのが私の定めだったのだ。
だが、私は幸せだった。たった一時にでも幸せな夢が見れた。
赤神寿也の力によって、消滅までの時間が遅れたのだ。
闇の化物には、過ぎた幸せだった。

私は、”星光”を手につけて、その友に殺される。
良い最後じゃないか。

本当に。

ああ。

・

・

・

『何をしているのですか』

そんな時だった。”彼女”が目の前に立っていた。

「どうして、お前がここに？」

『どうしてって？分かりませんか？私は、貴方なのですよ？』

”彼女”はそう言つと手を差出してきた。

『さあ、立って下さい。そして”生きて”下さい。』

「もう、無理だ。私はお前の友に殺められた。」

『そうですか。』

「ああ。今更起き上がってもどうにもならない。」

すると、”星光”はクスクスと笑った。

『大丈夫ですよ。彼は嘘つきですから。』

「嘘つき？」

『ええ。貴方が考えを改めて”生きる”選択をすれば、きっと。』

私は訳が分からずクビをかしげる。

『まあ、やりすぎた事には、いつか、O・H・A・N・A・S・H・Iとさせて頂きましょう。』

”彼女”は黒い笑みを浮かべていた。

いつの間にか私は、ソファーに横たわっていた。

「”大嘘憑き”！」

と、突然そんな声が耳元で聞こえた。私は”手”で耳を塞ぐ。

「えっ・・・？」

私は、自分の体を見た。”手”所か、”足”も”体”も傷一つ無く

”元”に戻っていた。

「さて、俺はもう帰る。じゃあな。」

少年はそう言うと私に背を向けて帰っていった。

本当に何してたんだろうな俺は。”星光”の頼みを聞くとは、全くアイツも厄介な頼みをしてくれたもんだよ。

「”生きて下さい”って、他人に言う事を聞かせるのは、一苦勞なんだぞ?」

俺は、そう言いながら、家路についた。

その後、家に帰ると同時に口止めを忘れた事に気付き慌てたのは、また別の話。

第8話 これは罰ですか？いいえ嘘つきです。（後書き）

南：おい。作者、上のプロローグ編って何なんだ？

作者：はい、これまでが、プロローグです。次回より新章がスタートします。

闇：新章？

星光：オリジナルの展開ですか。原作キャラとは、関わるんですか？

作者：・・・それは、秘密で。

雷刃：うわー不安要素多い！

作者：それでは、これからもうよろしくお願いします。

南：よろしくな！

30000PV & amp; ユニーク5000 突破記念 とある”雷刃”の

30000PV & amp; ユニーク5000

突破しました！

皆様！ありがとうございます！！

青い髪をなびかせ、彼女は飛ぶ。

「光翼斬！つと。」

「うわあああ！！！」

取り敢えず襲ってきた、魔導師Aを仕留めてみる。

「よくも！ジョーを！」

すると、また魔導師出現。

「電刃衝！」

「ギャアア！！！」

魔導師B撃墜。

「よくもゲーを！」

魔導師C出現。ああ、もう！

「面倒臭いよ！！！！！」

一体何人倒せば終わるのさ！僕の叫びが、夜空に響き渡る。

”闇”から、うって出て早1時間余り。ずっとこんな感じなのだ。
大きい魔力を感じて、そっちに向かったけど・・・。

待っていたのは、大したことない魔導師軍団だった。

「そこまでだ！」

「止まれ！」

「待て！」

うわあゝまた出たよ・・・何なの？1人いたら30人はいるの？

「ねえ、もう止めない？キミ等じゃ僕には、勝てないよ？」

取り敢えず話し合いだ。まずは、それからって、”星光”も言ってたっけ？

「班長！アイツの言う通りスよ！諦めましょうよ！」

「ウス・・・自分も同感ツス。」

あり？なんか、様子がオカシイゾ？部下と思わしき2人が隊長にそう言っていた。しかし隊長は、ゆっくりと首を振った。

「・・・それは、出来ん。」

「何故ですか！このままじゃ俺等・・・殺されますって！」

「そうですよ！アイツなんかアホそうですよ？手加減なんてしてくれませんよ！」

「コラ！今”アホ”って言ったな！僕は”アホ”じゃないぞ！皆か

らは、『“雷刃”は、馬の様に速くて、鹿の様に強いですね』とか
『“雷刃”が風邪をひく様子は想像出来んな。』って、言われる位
凄いだぞ!!」

エヘン!どうだ? 凄いだろう!

「・・・隊長。アイツ・・・。」

「・・・泣けるッス。」

「言つてやるな。」

何故か、同情の視線を向けられている様な気がする。

「とにかくだ。ここで、奴を仕留めるぞ。正直に言うと、俺等の首
が懸かつてるからな。」

「どういう意味ッスか! それ!」

「まんまだ。”PT事件”や”闇の書”の時俺達は、なにか手柄を
たてたか?」

「いいえ。」

「殆どあの子供達に持っていかれまして。」

「あーそう言えば・・・。」

”フェイト・テストロッサ”の記憶を探ると確かに殆どあの人外的
な力をもつ男の子達が解決している。

「俺・・・聞いちまった。」

「「何を？」」

「リンディ艦長が、もうすぐアースラの乗組員の選別を開始する。
その電話を・・・。」

「「「な、何だって!!!」」」

アースラの乗組員の選別だって！それって殆ど左遷じゃないか！皆
いい人なのに！

「だから、俺等は、手柄をたてなければならぬ・・・。俺は、病
気の妻の為に・・・お前らだって、守りたいモノがあるだろう？」

「「「!!!」」」

その言葉に皆の目が開かれた。・・・そうだ。

「・・・お、俺は、生まれたばかりの子供の為に・・・。」

「俺は、・・・貧しい家族の為に・・・。」

「僕は・・・闇の為に・・・。」

「そうだ！俺等には、守りたい家族や生活があるんだ！ここで、手
柄をたてなくていつたてる！」

「「「おお!!!」」」

そうだ！僕等には守るべきモノがあるんだ！

「行くぞ！あのマテリアルを殲滅せよ！」

「ハイツス！」

「任せてよ！」

「了解ッス！」

さあ！勝負だ！マテリアル！そう思い振り返るが、そこには誰もいなかった。・・・どういう事だ・・・？

その時、僕の相棒である”バルニフィカス”が反応した。

『えっと・・・マテリアルは、マスターですが・・・。』

「へ？」

・・・・・・そうだった！！！！！！！！！！

でも、妙だ・・・なんで、まだ、攻撃が来ないんだ？僕が、隊長達を見ると・・・。

「そうだった・・・。」

「クツ・・・なんて運命なんだ。」

「だが、行くしか無い！」

どうやら、僕達の気持ちは一つだったらしい。

「『ウオオオ！』」

3人の周りに術式が展開される。これは、大きいのが来る！

『マスター。アレは危険です！一旦距離を！』

”バルニフィカス”がそう警告して来るが、僕は逃げはしない。

「”力”か……。面白い僕の”力”とどちらが上か確かめてやる。

」

僕は”力”のマテリアル。”雷刃の襲撃者”だ。”理”や”闇”とは違い戦いを求める。

「”バルニフィカス”セット……。アレ行くよ……。」

『魔力が持ちませんが？』

「構わない。僕は、僕で行く！」

”バルニフィカス”は、ため息をつく様に光ると術式を展開させた。

「『協力砲撃魔法！！アラゾーキャノン！！』」

何だか、えらく悲しみが伝わってきそうな名前は無視して、確かに強力そうだ。”星光”のオリジナルである”高町なのは”の最大砲撃魔法並かも知れない。……。隊長……。皆……。なら、僕だって行くよ！

「砕け散れ！雷刃滅殺極光斬！！！！！！！！！！」

これが、僕の最大魔法だ！

「うおおお!!」

「リヤアア!!!」

凄まじい閃光が僕らを包み込んだ。

辺りが吹き飛び、隊長達が気絶している。

「か・・・勝った・・・勝ったよ！イヤツタ！！流石僕！凄いぞ強いぞカツコイイ！」

「ですが……もうそろそろ限界ですよ？」

「うん。分かってるよ。・・・」
バルニフィカス「・・・ごめんね。」
僕のワガママで、寿命を縮めて。」

『お気になさらず。主に最後まで付き従うのが、デイベイスとしての幸せですから。』

「アハハ！！そうかな？じゃあ良いか！」

「ええ、マスターは、消えるその時まで、そのまま置いて下さい。」

「うん！」

僕が、そう言うと同時に目の前に2つの人影が現れた。

「時空管理執務官。クロノ・ハラオウンだ。君は・・・フェイトの
マテリアルか・・・。」

「・・・・・・・・フェイトちゃん。」

行き成り強大な魔力を持つ魔導師登場！ヤバイかも♪しかも2人とも間違ってるし。

「違うよ？僕は、”雷刃の襲撃者”。”力”を司るマテリアルさ。」

僕は、”バルニフィカス”を構える。

「さあ、かかってきなよ？その人達のおかげで、弱ってるから今なら倒せるかもよ？」

『スタンバイ・・・マスター・・・。』

「うん！」

2人がデイベイスをセットしたのを確認すると僕は、もう一度声高く宣言する。自分の存在を知らしめる為に。

「我が名は、”雷刃の襲撃者”。”力”を司るマテリアル！”フェイト・テストロッサ”の闇より生まれしスーパー強い最強の戦士だ！」

うん。やっぱり僕って・・・凄いぞ強いぞカッコイイ～！

”闇”の核の内最も早く彼女は退場した。
彼女と戦った局員は、口を揃えて言った。

強かった。

アホだった。

残念な子だった。

意見は、様々だったが、こんな少数の感想もあった。

彼女は、誰よりも真っ直ぐだった。

と。

南 : 嘘・・・だろう・・・。

作者 : はい、私も驚きが隠せません・・・。

南 & amp; ; 作 : 30000PV & amp; ; ユニーク5000
突破！！

星光 : まさか、ここまで、この駄文を読んで頂けていたとは。
信じられません。

雷刃 : うん。まさか、アクセス数を帰ってから見たらこんな事になるなんてね。

闇 : そうだな・・・これも読者様のお陰だな・・・所で作者・

作者 : はい？

闇 : この番外編なのだが・・・”雷刃”が主役とはどういう事だ！

また、我の出番が無かったのだが！

星光 : ”闇”私の出番も有りませんでしたよ。

闇 : あったぞ！よく見ると良い”星光”の文字があるから！

南 : いや、”闇”って文字も結構あったぞ？

闇 : それは、我を指していない！

”全” : ……！！！！

闇 : いや、そこは驚くべき所ではないと思うが・・・とにかく説明せよ！

さもなくば・・・。

作者 : はい！説明します。今回の話なのですが、”雷刃の襲撃者”にスポット

を当てたのは、実は・・・かなり初期のプロットでは、南と合ったのは、

”星光”では無く”雷刃”だった計画があったからなのです。

星・闇 : ……！！！！

雷刃：それ！どういう事？

南：あ、それ俺も聞きたい。

作者：はい。始めの段階では、南の初恋の相手は”雷刃”と言う事になって

いました。

星光：・・・何故、私に？

作者：えっと・・・ぶちやけて言う”雷刃”でシリアスは・・・無理・・・？

いつの間にか、ギャグになってしまっ・・・そんな訳で、”

雷刃”

から”星光”に変更したのです。

南：で？どうなった？

作者：シリアス展開が別人の如く浮かんできました。流石は”星光”さん。

星光：褒められているのか微妙ですが、どうも。

雷刃：あーあー残念だな

作者：この話は、そんな”雷刃”の追悼話と思って頂けたら幸いです。

雷刃：うん！分かったよ。

星光：？妙に返事が良いですね。拗ねると思ったのに・・・。

雷刃：うん・・・まあ、アレを見たらね・・・。

南：アレ・・・。。。

闇：どうせ・・・我なんて・・・我なんて・・・シリアスにもギヤグにも

・・・いらない子・・・なんや・・・ウチなんて・・・。

星光：・・・先祖（？）帰りしていますね・・・。

南：作者・・・いつか奴にも・・・何かしてやれ・・・。

作者：さて、次回からは、新展開！

南　：無視だと！

雷刃　：4年生になる南に降りかかる不幸とは？

南　　：”雷刃”まで！？

星光　：こうご期待。

南　　：”星光”まで！ムゴイ・・・”闇”が報われねえ！

闇　　：それでは、また、会おう。

南　　：復活してる！！

作者　：これからもよろしく願います。

第9話 新しいクラス（前書き）

新章開始

第9話 新しいクラス

新しい年も問題なく過ぎた。俺は、今日から4年生になる。

「イエス！」

俺は、人目も気にせず大声で叫んだ。何故って？そりゃ・・・

高町なのは・4年1組

その他 ・4年1組

南 一夜 ・4年2組

この世界の主役と思わしき連中と違うクラスになったからだ。しかも八神妹も1組らしいので俺の安全は、確保されたも同然なのだ。アッハハハ！

「グッバイ！フォーエバー。」

そう言いながら、俺は新しいクラスへと向かったのだった。

「・・・元3年1組 南一夜です。よろしく。」

新しいクラスおなじみの自己紹介。流石にここで目立つと何が隣に繋がるか分らないので今年も暗いキャラで通そうと考え挨拶をする。

友達？いませんよ？

「元3年4組 日野渚です。宜しく。」

そういえば。このクラス結構見ない奴がいるな。前と同じ組の奴が数える程しかない。

「・・・元3年3組 時田鈴音です・・・。」

ふむ。こうやって見ると、1組がなんか優遇されている感じがするよな。クラスマッチとか。

「えーありがとう。俺は、このクラスの担任 甲田哲二だ。これから一年よろしくな。」

『よろしくお願いします』

取り合えず、皆デフォルトと化した挨拶をする。

「さて、早速だが、皆にお知らせだ。実はな、このクラスに3人転校生がやってくる事になった。」

すると、周りから歓声が上がる。

3人って、多くね？他のクラスには振り分けなかったのか？

「そういえば、1組にも来るって言ってたぞ。」

とクラスの誰かが言った。そうかい。

「ファ〜。」

となんか眠くなってきた。今日は早く終わるし、はよ帰って寝よつと。

校長先生によるデススピークを乗り越え、生活指導の先生の決まり切った、セリフを聞き流し、ついに下校時間になった。

「——と言う訳で、4年生からは一時的にクラブ活動に参加しなくちゃいけないから。決めておくように。」

『はい。』

「ほーい。」

「じゃあ、解散。」

『起立・気を付け・礼』

『ありがとうございます。』

俺は、一目散に下駄箱へと駆け出した。

第9話 新しいクラス（後書き）

南 : 遂に始まったな。

作者 : はい。これから新章が始まります。

闇 : しかし、オリキャラが出てきたな。

作者 : はい。オリキャラです。どうなるのかはお楽しみに！では！

第10話 引き篭りフレンド（前書き）

続けて投下！

第10話 引き篋りフレンド

このクラスになって、1週間が過ぎようとしていた。流石に4年生にもなると、いくつかのグループが出来ており、その人たち以外とは余り会話をしない様だ。3年から転校し出来るだけ目立たた俺もそのグループに入っている訳がなく休み時間はもっぱら眠りに専念していた。

「zzzzzz・・・。」

そしてこの時期になると、学校へ来ない奴も出てきていた。”時田鈴音”と言う子は、始業式の日以外来ていない。何故かって？知らん。噂では、変人で酷いイジメを受けていたらしい。

「全く。どの世界も暗い所も合ったもんだ。」

楽しそうな、学園もののアニメでも必ずイジメの問題がある。大概はヒロインの一人なのだが、そう言う奴に限って、なんでイジメられているのか分らない程のスペックを持っているものだ。まあ、現実には、そんな都合の良い奴なんていないけどな。

「・・・ねえ。」

「zzzz・・・。」

「聞いてんの？」

とここで誰かが話かけて来ている事に気付いた。

「なに？」

「先生から、時田さんにプリントを届ける様に言われてんの。アンタとね。」

「なんで？行くなら日野さんだけで良いじゃん。」

「私が、道を知ってる訳無いでしょうが！」

「いや、知らねえよ。」

「時田さんの家アンタの家の近くなのよ。道位知ってるでしょう？」

「・・・見せて・・・。」

「はい。」

俺は、日野さんが書いた住所を見してみる。確かに家の近くだ。徒歩5分もない。

「分かった。帰りに案内する。」

「そう。じゃあ、よろしくね。」

そう言つと日野さんは、自分の机に戻って行った。そういえば、あの人もよく独りでいるよな。

「まあ、良いか。」

俺は、そう言うと再び眠りに入った。

授業も怒られながら終わり、眠さをこらえながら、帰路につく。隣には日野さんがいるが。

「全く。なんで、いつも寝てんのよ。」

「別に。眠いから眠るんだよ。」

「そんなんだから、テストの点も悪いのよ。」

「知ったことか。難しい問題が悪い。」

この世界の小学生の問題は、力を抜いて受けている為毎度点数が悪いのだ。いや、そのうちマジでヤバくなるかも知れない。

「日野さんは、常に成績が上位で羨ましいね。確か去年は学年7位だったっけ？」

「なんで、知ってんのよ。」

自然と他の転生者の成績を見てましたから。因みに1位は、”アリサ・バニングス”だったけ？恐らく転生者共はマジで手を抜いてやがるな。自重しろよ。他の頑張っている子供の事も考える。

「な、何よ。なんで、そんな哀れそうな目で私を見てるのよ!」

「いや。ガンバッテ。」

きつといつか報われるさ。

「さて、着いたぞ。ここだ。」

古い木造の家が目の前にあった。表札には時田と合った。

「ここ、人が住んでたのか。てつきり空き家とばかり思ってたぞ。」

ここにやって来てはや一年になるが、まさか人が住んでたとは。この街は不思議がいっぱいだア。

「アンタね・・・まあ。いいか。」

日野さんはそう言うと、チャイムを鳴らした。なんとも虚しくなる音が響いた。

『・・・はい。』

とインターフォン越しに女の子の声が聞こえてきた。

「あ、時田さん。同じクラスの日野だけどさ。プリントを届けに来てやったわよ?」

『・・・ありがとう・・・。ポストに入れといて。』

「嫌よ。出てきなさい。アンタもう1週間も休んでるじゃない。どうしたのよ?」

『何でもないよ。・・・ただ、行きたく無いだけ。』

「何だよ？アンタ自分がどついう学校に行っているのか分かってる訳？高いのよ？学費とか。」

それに入学試験も大変だよ？

『・・・』

「あ、ちよつと！」

時田さんはそのまま喋らなくなった。

「もう！なんなのよ！」

「いや、多分日野さんが悪いと思うぞ。引き籠り相手にその口調は逆効果以外の何者でも無いから。」

「むづづづ。」

日野さんは、軽く唸ると、ズカズカと門を潜って玄関まで行った。後はプリントをポストに入れるだけだ。やっと帰れるな。

「フアー。」

軽く欠伸をして、日野さんの帰りを待つ。日野さんはポケットから何かを取り出しドアに何かをしていた。

「???」

何を・・・”ガチャリ”ハイ？何？さっきの音は。

「さて、入るわよ！」

「ええ！！ちよつと待て！なんだそれは！」

「ん？万能鍵？」

なんだ？そのチートアイテムは？

「私の発明品よ。趣味でね。」

趣味でそんなもん作るなよ。と言うより使つなよ！

「おい、不法侵入罪だぞ？」

「そう。ホラ。」

「あ、ちょ・・・。」

「これで、アンタも同罪ね。」

「何でだよ！」

「ホラ、行くわよ。心配しなくても、友達思いの子供の可愛い罪つて所よ。」

俺は、別に友達じゃないのだが・・・。

「さて、行くわよ！引き籠りちゃんの話を聞きにね！」

日野さんの迫力に負け、俺はなし崩しについて行く事になった。
家に帰りたい。

第10話 引き篋りフレンド（後書き）

星光：また、厄介そうな方に捕まりましたね。

南：・・・本当に・・・サブを甘く見ていた・・・。

日野：誰がサブよ！人生皆主役！この世界に主人公なんていないのよ！

闇：ウム、確かにそうだ。良い事を言うなキサマ。

日野：どうも。

雷刃：あ、なんか仲良くなってるし・・・。

作者：まあ、放って置きましょう。それでは、次――。

闇・日：次回もお楽しみに！

作者：取られた！！

第11話 未来予知（前書き）

どうぞ。

第11話 未来予知

こんにちは。南一夜（仮）です。

ただいま、ワタシは、他人の家に不法侵入しております。
何故ならば。

「ほら、何ブツブツ言ってるのよ？ 静かにしなさいよね。」

この非常識キャラに無理矢理させられているからです。

「クソ。主要キャラ以外のモブを甘く見てたぜ。」

「何ですって？」

「いいや。」

己が不幸を呪いながら家の中を進んで行く。

「それにしても妙な家だな。絵ばっか貼ってあるぞ。」

「そうね。それも子供が描いた様な簡単な物ばかり。」

家の中は、そこかしこに画用紙に描かれた絵が貼ってあった。ここが、クラスメイトの家だと知らなければ軽くお化け屋敷にでも来た気分だ。そんな事を思いながら絵を見ていると。

「ん？」

「どうしたの？」

「あ、いや……。」

俺は、白い服の人間と黒い服の人間がぶつかっている絵を見つけた。そして、その隣には、子供？が4人の影に守られているような絵があった。

「なんなんだろうな。この絵って。」

「そうね。ちょっと気味が悪いわ。」

しばらく行くと俺は、足を止めた。何故ならば。

「……そんな……馬鹿な。」

階段近くに貼ってあった、画用紙に描かれていたのは、黒い服を着た女の子と男の子だった。しかも男の子の服の模様は、あの時俺が着ていた物と同じだった。

「……”星光”……。」

そして、女の子の手には、あの杖があった。

「どうしたの？」

「……い……や……。」

なんなんだこれは！偶然なのか？それとも……。見てた？あの時の事件を。

俺の頭はパンクしそうになる。そして、涙も出てきそうだ。

”星光”・・・そう考えるだけで、死にそうになる。

「捜そう。」

「え？あ、ちょ・・・。」

俺は、日野さんを置いて、一階を見て回り、時田さんの部屋が無いことを確認すると直ぐに二階に上がった。そして。

「何だコレ。」

「・・・何よ・・・何なのよ？」

二階の一番奥。その扉は、無数の画用紙によって見えないくらいになっていた。
不気味だ。コレ。

「どうやら、ここが、鈴音ちゃんの部屋みたいね。」

辺りの部屋をチェックしたらしい日野さんが恐る恐る言ってきた。

「マジかよ。」

扉を見る限り相当病んでいる人の部屋みたいだぞ？少なくとも小4の女の子の部屋とは思えない感じだ。

だが、よく考えれば、ここにいる俺だって、自殺してたし今の時代は普通なのかもしれない。

「かなり個性的な部屋の事で。」

「これは、個性じゃなくて既に異常の領域よ。」

「日野さん。人の個性を否定しちゃ駄目だよ。」

「そう。じゃあ、一人で行ってらしゃい。」

「いいや、日野さんがどうぞ。」

流石にあそこに入るのは勇氣が必要だ。俺には無い。

「か弱い女の子に行かせるつもり？」

「安心してくれ。この時期の子供は女の子の方が強いから。」

筋力的にも強いし精神的にも男の100倍は強い。

「さあ、か弱い男の子のために行ってくれ。」

「いいや、昔からいうでしょう？」

「レディファースト？」

「女の子は守るべきモノだって！」

「そんなの知らねえな。」

「アンタね……。」

「学年最低ラインギリギリを舐めるなよ！」

「威張るところ?」

そんな不毛な会話を繰り返していると。音も無く扉が開いた。

「「（ビク!?!）。」」

「……。」

時田さんが、そこから、じーっと、覗いていた。

「やあ、時田さんごきげんよう。」

「うん……。」

「鍵……空いてたよ?」

「うん……。」

不味い。ばれてる。こうなれば……俺は息を吸い込み

「「全てはこのバカが悪いんだ（のよ）!」「」

日野さんと被った。ちい……同じことを……。なんて、汚いんだ!

「……入って。」

時田さんはそう言うと再び部屋の中へと戻って行った。

「……。」

「・・・ハア。」

俺は日野さんの眼力に負け先に部屋の中に入った。

「ようこそ。私の部屋に。」

時田さんはそう言つと紅茶の入ったコップを差出して来た。

「ありがとう。」

アレ・・・なんだ？この違和感・・・。

「・・・ねえ。なんで、この紅茶・・・温度が丁度いいの？」

同じく違和感を感じていた様な日野さんがそう言った。そうだ。確かに。

台所は、一階だし、なんで人数分の紅茶が・・・。

すると、時田さんは、じーっとこちらを見て来て言った。

「アナタが、南君？」

「あ、ああそうだけど？」

何なのだろうか？時田さんは、とっても言いにくそうに

「じゃあ、アナタが私を救ってくれる超能力者なのね！」

「ああ。つて！ええ！」

こいつ今なんて？なんでこいつが俺の力を？

「初めまして私は時田鈴音。只の未来が分かる未来人です。」

第11話 未来予知（後書き）

日野：ヘタレ。

星光：未練がましい男・・・（ですが、嬉しいですよ。）

南：うう・・・仕方ねえだろう？アレは恐怖のレベルが桁違いだったんだよ。

それに・・・。

闇：イジメられているな。

雷刃：られてるね・・・。

作者：あのままで良いでしょう。

闇：そうだな。では！はたして”未来人”とは？

雷刃：次回をお楽しみに！

第12話 未来人と超能力者（前書き）

眠いです・・・投下します・・・。

第12話 未来人と超能力者

「未来が見える？」

「うん。だから日野さん達が来ることが分かってたの。」

出された紅茶を啜りながら時田さんはそんな事を言った。

「未来予知って事？」

日野さんは、怪しい物を見る様な目で時田さんの部屋を見渡しながら言う。自重しろよ。

俺は、ため息をつきながら、時田さんに聞く。

「どうして、未来人なんだ？」

「え？未来が見えるんだから未来人に決まってるよ？」

いや、どちらかと言うと超能力者のカテゴリーに入るんじゃない？。

「でも、コイツが、鈴音ちゃんを救う超能力者って、どう言う事？」

コイツ扱いだよ。と言うよりなんで、こんなに慣れ慣れしいんだ？
友達か？違うからね！

「そうそう。俺にそんな力なんて無いからね？」

「そんなこと無いよ？私の夢の中で助けてくれたもん。」

ああ。確かに変人の類だこの子。・・・人の事言えねえけど。すると、日野さんは、時田さんの前に座って目線を合わせた。その姿まるでカウンセラーだ。いや、実際そうするのだろう。

「ねえ、鈴音ちゃん。それは、どんな夢だったの？」

「うん。私ね、昔からよく正夢を見るんだ。楽しい夢もあれば、怖い夢もあったの。中には信じられない様な非常識な夢も見ただけ全部本当になったの。」

「それって、もしかして家中に貼ってる絵の事？」

日野さんの言葉で先程の絵の事を思い出す。確かにアレは、子供の絵だった。きっと忘れない様に描いていたのだろう。

「うん。日野さんが信じてないのも分かってたよ。夢でみたから。」

時田さんは、机の中から一枚の絵を取り出して俺の前にやって来た。

「お願い。これを見て私を助けて。」

それは、黒い何かに人が食い殺されている絵だった。なんだ？コレ。

「私。今日の夜にこのままだと食べられちゃうの。」

一通り話を聞き終わり、俺と日野さんは帰路に付いていた。

「・・・どう思う？」

「分かん。」

時田さんの話は、確かに滅茶苦茶だ。しかしスジは通っている。そもそもからして、憑依なんぞしている上に超能力者な俺にとって、未来予知の存在は信じざるおえない。

「時田さんの事どうするつもり？」

「日野さんは？」

「明日学校に話して見るわ。」

「じゃあ、俺も同意見で。」

時田さんの予知では、今日襲われるらしい。もし事実ならば、明日ではもう遅いだろう。行って見るかな。恐らくこれは原作とは無関係だろう。なんせ”なのは”と言っ言葉がこれまで一度も出てきていないのだから。

「じゃあ、またね。」

「ああ。」

もう二度と御免だ。さっさと真相を掴んで早く平和な日常に戻ろう。

深夜。

11時。俺は、時田さん宅玄関前付近に立っていた。因みに”大嘘憑き”により気配を無かった事にしているので、警察の方のお世話になることはない。

「確か。今日中に起きるんだったよな。」

そうつぶやき、時計を見るが、本日終了まであと49分しかない。

「まあ。嘘ならそれでも良いけどさ。」

そう言いながら、暇つぶしに持ってきた本を読んでいると、前方に人影を発見した。

どうやら、辺りを警戒しながら近づいていているらしく、えらくキョロキョロしている。怪しい。

「。。。。。」

もし、アレが時田さんの予知の犯人の場合、”食べられる”とは。。。。。

・
・
・

止めよう。理性が持たない。俺は、そう考え、地鉄の剣を作る。

「。。。。。。。」

「。。。。。。。」

そして、人影と向かい合う。それは子供だった。
女の子だった。

知り合いだった。

日野さんだった。

「・・・・・・・・。」

相変わらずキヨロキヨロとしている日野さん。俺にぶつかると、「
ヒイ!」と小さく悲鳴を上げた。
なんか、面白い。

「日野さん?」

「・・・・・・・・。」

俺を無視して日野さんは近くの壁に寄りかかった。そして再びキヨ
ロキヨロし始めて時計を見る。

「あ、そうか。」

俺は、”大嘘憑き”を解除し語りかける。

「日野さん!」

「!!!!!!!!!!!!!!」

突然現れた俺に驚愕する日野さん。

「あああああ、アンタいつの間に!」

「さつきからいたよ。ぶつかっただじゃん。」

「え？えええ！！」

「日野さんここに何用？」

今だ混乱中の日野さんが落ち着くまで5分弱だったが、どうやら彼女は時田さんが心配でやって来た様だ。
警察に見つかるリスクを侵し友達のために行動する。流石は委員長キアラだ。

「・・・だが、委員長は別にいる。」

「は？」

「いや、気にしないでくれ。」

2人になったことにより多少暇を潰す事が出来た。そうして行く内に時間は過ぎ。

「もうすぐ12時か。結局何も起こらなかったわね。」

「そうですね。後、19秒。」

10

・

9

・

8

・

・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7
3・・・ガリヤン!!

「きゃあああ!!!!」

突然のガラスの粉碎音が響きわたりそれに続いて聞こえる時田さんの悲鳴。

何事だ？

「!!」

「!」

俺と日野さんは、すぐに家の中に入った。どうやら鍵はかかって無かった様だ。

「時田さん。来るのが分かったのみたいね。」

「だろうな!」

階段を駆け上がり、部屋に入ると、そこには。

「・・・み・・・南くん・・・タスケ・・・。」

血まみれの時田さんがいた。そして。

「・・・・・・・・。」

普通なら悲鳴でも上げそうな日野さんは、固まっていた。当然だろう。なんせそこには。

「グルルルル・・・・・・・・。」

真っ黒な闇より深い毛並みの巨大な犬がいたからだ。

第12話 未来人と超能力者（後書き）

雷刃：なんか出た！！

星光：何でしょうか？アレは？

闇：ふむ。ヒントは章のタイトルにあると見た。

日野：はいはい、”闇”ちゃん。メタ発言は控える。

南：次回は、バトルっポイな。

星光：作者の技量で大丈夫でしょうか？

作者：が、頑張ります。

日野：それでは！次回で会いましょう！

第13話 突撃となりのお夜食（前書き）

投下だ！！

第13話 突撃となりのお夜食

訳が分からないわ。何よこれ？

「グルルルル・・・。」

私はただ、鈴音ちゃんが心配で見に來ただけなのに。なんで部屋に、こんなのが居るのよ。

”食べられる”言葉どおりじゃない！

「早く警察・・・保健所に！」

「そんな所で対処出来るのかコレ？」

じゃあ、どうしろってのよ！そう言おうとした時

「ガアアアア！！！」

「イヤアア！！！」

犬の大きな口が開かれ中から鋭い牙が覗いた。不味い食べられる！

「突撃！隣のお夜食！」

その時凄まじい轟音と共に眩しい閃光が迸った。

「ガガガアアアアアア！！！！！」

焦げ臭い匂いを放ちながら犬は窓を突き破り落下していった。

何なの？何が起こったの？

「・・・五百円・・・くっ！生きてるか？」

「・・・うん。・・・やっぱり・・・助けてくれた。・・・夢・・・」

「鈴音ちゃん？き、救急車！」

「無駄だ。これだけの音が出たのに誰も来ないんだぞ？何か張つてやがるな。」

南は、そう言つて、鈴音ちゃんに手をかざした。すると

「え？・・・ええ！！！！！！傷が・・・服が・・・治つてる！」

いやそれだけじゃない。部屋までもが、まるで何事も無かつたかのように元に戻っていた。

何なの？これは？夢？夢でも見てるの？

「さて、時田さん大丈夫か？」

「うん。ありがとう。やっぱり南くんは超能力者だったね。」

「出来れば、使いたくなかつたけどな。」

南は笑うと窓の外に目をやった。私もそつと、覗いて見ると先程の黒犬が未だにウロウロとこちらの様子を伺っていた。
何よあれは、それに何よさっきのは！

「……………」

「ねえ。」

「何だよ？今考えてるんだけども。」

「アンタ何者なのよ。」

「只の超能力者だ。」

そう言うと、面倒臭そうに手の上に光……いや電気を発生させた。そうか、最初にあの犬を吹き飛ばしたのはこれだったのね。

納得……

「出来るか！」

「うを！なんだよ行き成り！」

「そんなチャチイ能力で納得出来る思つての？」

「チャチイって……結構凄い力なんだけど……。」

「正直に言いなさい？痛くしないから。」

「何されんの！俺？」

もう面倒ね。……やちゃおうかしら？

[illegible]

「ぎゃ ああああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

5分後経過

「つまり、全部無かった事出来る能力って事？」

「あゝい。」

「他には？」

「ノコメント。」

「……まあいいわ。それより、アレまだ彷徨ってるわよ？
何とか出来る？」

窓の外には相変わらず黒犬がウロウロしていた。これじゃ外に出られないわ。

「俺より弱ければな。時田さんを頼むぞ。いくら」大嘘憑き」で傷を無かった事にしても精神的にかなりキツイからな。」

「わかった。気を付けてね。」

南は、頷くと窓から・・・ではなく普通にドアから出て行った。

「微妙・・・。」

「頑張つて・・・。南くん。」

「グルルル・・・。」

「ちつ、俺の今月の小遣いの25%を喰らってまだ元気なのかよ。」

先程のとつさの攻撃により俺の財布は行き成りピンチに陥った。
でも元気です。

ピンピンしております。

泣きたい！

「ガア！」

「おわ！つと。」

とつさに紫電を辺りに走らせ犬を威嚇する。これで近付けまい。

「所詮は獣！さあ、逃げ回るが良い。」

「ガアアアア！」

しかし、犬は紫電など気にした風もなく襲いかかってきた。最近の

獣は度胸があるようだ。

「何の！地鉄の盾！」

「ガアアアアア！！！」

ぶつかる、犬ととても薄い盾。

「しまった！ここは、町中だった！！！」

川原や砂場などなら砂鉄も豊富なのだが、ここは整備された町中である。悲しい事に砂鉄は少ない。
なんと言う悲劇！町の発展がもたらした悲劇の結果だった。

「グラアアア！！！」

「にぎゃああ！！！」

肩の肉が抉れ、血が吹き出る。しかも無茶苦茶痛いと来た、気分は最悪だ。

「畜生！痛い痛い痛い痛い！！！」

肩を抑え何とか血を止めようとするが流石に止まる訳もなく血が溢れる。俺は、あまりの痛みの地面をゴロゴロと転がって痛みをまぎわらすしかかった。その時。

「何やってんの！さっきの奴やればいいでしょうが！」

日野さんの声が真上から聞こえてきた。・・・さっきの奴？

「ああ！これか！」

俺は、”大嘘憑き”で傷を無かった事にした。ナイスだ！日野さん。俺より能力を分かっている。

「グルル・・・。」

「へへ・・・さっきは、よくもやりやがったな。かく——。」

「ガアアアア！！！」

「はや！でも同じ手は食うかよ！」反射”！」

俺は、”反射”を使い犬を弾いた。犬は、コンクリートの壁に激突し赤黒い血を吐き出す。動物愛護団体が見たら訴えられかねない光景だった。けれども俺に手心を加える義理はねえ。

「こいつで、終いだ！」

俺は、犬に駆け寄り頭を抑える。そして繰り出すは、ある意味殺人技の一つ。

「日野さん！目を瞑ってるよ！」ベクトル”逆流！」

犬の体内を流れるあらゆる液体を逆流させる。どうなるか？

「ボバババアア！！！！！！！！！」

正解は、犬の頭が破裂するでした。グロ！

自分でやってなんですが、無茶苦茶グロイ。しばらく肉はNGだろ
う。

「でもまあ・・・アレ？」

見ると犬の姿は薄くなっていた。なんだコレ？

「・・・。」

「犬はどうなったの！って、何よコレ！」

どうやら、これは、俺の目がおかしくなった訳じゃないらしい。そ
う考える、と同時に犬は、闇の中へと消えて行った。

気のせいか、薄らと辺りに冷気が漂っている様な気がした。

「・・・痛っ！何？」

とある所で人影がそんな事を言って自分の指を舐めていた。

「"ダークネス・ハウンド"がやられた？ウソ！」

人影はすときような声を上げ驚いていた。

「何で？なんで？(@|@。？まさか、転生者に気づかれた？」

声の主は、本当に訳の解からないと言った感じに頭を抱えた。

「・・・それは、無いか。だってアイツ等、原作キャラに付きつきりだしね。でもそうだとしたら・・・。」

人影は、一つの水晶玉を取り出した。そして・・・

「あーダミダゝ結界が邪魔だったゝこんな事なら貼るんじゃ無かったよ。」

水晶玉の中は砂嵐の様に濁っていた。殆ど自業自得である。

「・・・アリ？」

しかし、結界が解除すると2人の男女が映った。恐らくこの内の片方もしくは両方が”ダークネス・ハウンド”を片付けたんだろう。

「・・・ムウ・・・。」

人影は一つ唸ると、ポンと手を打った。

「ここは、セオリー通り女の子を当たってみるかね。」

当たり前なら上等。外れでも上等。どちらにしても・・・。

「アタシの殺人を邪魔する奴は生かしておけないしねゝそうでしょう？」 マッド・ブッチャー”。」

人影の背後にまた別の人影が現れる。それは、答える様に手に持っていた肉厚の肉切り包丁を掲げ呻き声の様な咆哮をあげた。この場所には、まるで冬の様な冷気が漂っていた。

第13話 突撃となりのお夜食（後書き）

星光：・・・日野さん。貴女は一夜に何をしたのですか？行き成り震え始めました

けれど？

南：（ブルブル・・・・・・・・。）

日野：気にしない♪気にしない♪

雷刃：うわゝ黒い・・・。

闇：うむ。闇より深いな。

日野：何か？

闇・雷：いえ。何も！

日野：そう・・・それにしても、なんか最後ヤバそうなのがいたわね。

雷刃：そうだね。敵みたいだったけど・・・。

闇：何気にナギサを狙う様な事も言っておったし・・・用心はすることだな。

日野：そうね・・・ここにしか出られないなんて嫌だもんね。

星・闇・雷：！！！！

南：ん？どうした！皆！日野さん？

日野：あ、じゃ！皆さん次回で！

南：3人共？デイベイスを下ろして！・・・って、日野さん！な
んで逃げるんだ

！責任を・・・あつ・・・・・・・・・・・・・・・・。。

第14話 夜の課外授業（前書き）

いつもより長いです。

第14話 夜の課外授業

「どうして・・・。」

彼女は、悲しそうに俺を見ている。

「違う！アレは・・・。」

俺は、必死に首を振り否定するが、彼女は

「どうして、私を使っただの？アナタの25%だったのに・・・。」

「違うんだ！聞いてくれアレは！」

「サヨウナラ。私達はもう出会えない。」

そう言うと、彼女は深い闇の中へと消えた。

「待ってくれ！！カムバック！」

「五月蠅いわ！」

「ブホ！」

俺が昨日永久に失った、五百円を追っているのと急に顔面に衝撃が走った。痛い。

「アガガ・・・何をするんだ！日野さん！」

「アンタよく、そんな大声で寝言が言えるわね！五月蠅くて集中出来ないでしょうが！」

場所は時田さんの家2階の部屋。あれから、しばらく俺と日野さんは交代で外を見張っていた。また、あの犬が襲ってくるかも知れないからだ。警戒するに越した事はない。

「それにしても何だったのかしらねアレ。」

「知らない。なんで、あんな事になったんだろうね？」

あの犬が消えてから気温が急に下がった様な寒気が走り一旦家の中へと避難した。その後再び外に出ると、俺との戦いの跡が、まるで何も無かった様に消えていたのだ。砕けたコンクリートの破片や紫電の焦げ跡すら無かった。

「まるで、アンタの力ね。アンタ以外にそんな事出来る奴なんているの？」

「う・・・とな・・・。」

確かにアレは”大嘘憑き”を使った様な感じになっていた。そういえば、ヤマダさんもこの世界の中には、他にも転生者が数人いるとか言ってたしな。案外この力は俺だけの物じゃ無いのかも知れない。

「多分、結構いるんじゃないかな？」

「は？」

「いや、俺なんて、結構弱い方だし。」

転生者の中では、恐らく最弱クラスだろう。自己防衛第一だし。

「アンタで、弱い方なの！」

日野さんの驚き声が耳に刺さる。申し訳ない。

「ああ。俺なんて、電撃を操ったり、ベクトルを逆転させたり、水の中でも生活出来る位の力しかないからな。」

「・・・十分凄いいんだけど・・・何なの？超能力者って。」

知らない。

「じゃあ、俺寝るわ。お休み。」

「待ちなさい！」

「何？もう朝まで3時間を切ったんだけど？実質俺の睡眠時間が20分に成ってるんだけど？」

「そんな話を聞かせて、私に一人で見張れと？」

「うん。大丈夫、死んでもパーツが全部あれば何とかなるから。」

”大嘘憑き”ならば、多少の欠損位軽いだろう。精神的には保証し
かねるが。

「日野さんの鋼の精神を信じる。だから日野さんも俺を信じてくれ。」

「……歯あ食い縛れ！」

本日2度目の衝撃が顔面に走った。超痛い。

「うわああ。」

「血で部屋を汚しちゃ駄目よ。」

鬼だ……鬼がいるよ。……アレ？

「ねえ、もしかして日野さん……怖い——！！！」

本日3度目の衝撃が全身を走った。その時本棚が砕け散った。

”不慮の事故”である。反射的に使わなければ俺の体はああなっ
ていただろう。恐い。

「おはよう。」

「あ、鈴音ちゃん、おはよう！どう？眠れた？」

「うん。・・・ごめんね。見張りなんかさせちゃって・・・。」

「良いのよその位。」

女性陣2人の会話を聞きながら俺は、何とか意識を保ち辺りに警戒を張り巡らせていた。恐らく大丈夫だろうが一応の警戒は必要である。

「おはよう。時田さん。」

「うん。おはよう。昨日はありがとう。」

「良いつて。アンの。」

その後もつとおっかないのに襲われたし。俺が、笑って話すと時田さんは表情を暗くした。

「どうしたの？」

日野さんが心配そうに近寄ると、時田さんは紙に何かを書き始めた。
・・・まさか。

「・・・。」

「・・・今日ね・・・こんな夢を見たの。」

絵には、恐らく学校だろうか。空には満月が昇っており、女の子が巨大な人(?)によって、ズタズタされている絵だった。
正直言って、見ていて気持ち良い絵ではない。

「この女の子って・・・時田さん？」

しかし、時田さんはフルフルと首を振った。そして、とある人物を指差した。それは・・・

「わ、私？なんで？」

「・・・分らないの。本当に分らないの。」

「この夢は、大体何日後に本当になるんだ？」

「早くて、1日遅くても3〜5日後だよ。」

「月から見て、満月の夜か・・・アレ？」

「どうしたの？」

「おかしいぞ？満月って昨日じゃないか？」

昨日の夜空の事は、結構覚えている。しかし、それに日野さんは反論した。

「何言ってるの？満月は10日前でしょうが。ちゃんとカレンダーに載ってるでしょう？」

「は？10日前？」

どうなってるんだ？と、言う事は次の満月まで20日以上もあることにならないか？いやそれ以前に確かに昨日の月は満月だったんだけだな。

「鈴音ちゃん。本当に空には満月が昇ってたの？」

「・・・うん。とっても寒くて空気が澄んでたからよく覚えてるよ。」

「と、言う事は、後20日は安全と言う訳ね。取り合いずは一安心か。」

日野さんはそう言つと時田さんを拘束し始めた。なんだ？

「さて。学校に行きましようか？時田さん？」

「え、あの・・・。」

「南！カバンに必要な物を詰め込みなさい。学校に連行するわよ。」

「ええ！」

流石は、日野さん凄まじい行動力だ。俺には真似できない。

「で、でも・・・。」

「安心しなさい。鈴音ちゃんの席は私の前だから、何かあったら助けてあげるわ。ね！南？」

「何故、俺が・・・。」

「ね？」

「サーイエッサー。」

俺の平和な日常が音を立てて崩れ逝く音がした。

取り合いず、俺達は自分のカバンを取りに一旦家へと戻る事になった。もちろん時田さんは捕獲中である。

「ふーん。ボロいアパートね。」

「失礼な！アンティークな物件と呼べ！」

築25年のアパートを呼ぶときはそう呼ぼう。因みに風呂・トイレは、別である。

「じゃあ、とつて来るな。」

「400秒以内にね。」

「はいはい。」

取り合いずそう言って部屋に入りカバンを掴む。そして、冷蔵庫の中から惣菜パンを取り出し昼飯を確保。水筒に茶を注ぎ、制服を着て鍵を閉める。その間実に

「635秒！235秒も遅いわよ！」

コイツ。カウントしてやがった。

「悪いな。じゃあ次行くか。」

クック・・・復讐してやるよ。

「ここよ。」

俺の家から徒歩30分の所にそれはあった。

「へ？」

「なに・・・ここ・・・。」

そこにあったのは、高層マンションだった。まあ、それなら別に良いのだが。

「”日野”家専用マンション？」

と自動ドアを潜りポストを見るとそう書いてあった。

「うん。だいたい20階から上が私の部屋ね。下は、その他の人達の部屋や仕事場。」

「か・・・金持ちか・・・。俺らの敵だったのか！」

「まあね！・・・じゃあ行つて来るわ。1200秒以内には帰って来るから。朝食は、もう電話で頼んでるから直ぐに来るわ。」

日野さんはそう言うと、エレベータに乗って上へと上がって行った。

「失礼致します。」

その後直ぐに朝食らしきモノが乗っているカートと椅子とテーブルが運ばれて来た。最早俺らは啞然とするしかなく大人しく椅子に座った。

「・・・凄いな。」

「予言には出なかったのか？」

「うん。私の予知はね。大きな出来事しか写さないの。」

これを小さな出来事と申されますか。時田さんは、ベーコンエッグをフォークで食べながら言った。この人結構度胸が据わっている。俺なんてドキドキして手が出せないのに。

「それにしても、まさか、日野さんが・・・でもさ、”日野”なんて言う有名な会社なんてこの町にあったか？」

少なくとも俺には、見た記憶がない。”バニングス”だったら、何回か見たことがあるが。

「きっと、別の町で有名なんじゃないかな？日野さんのためだけにここを買ってるとか。」

「なるほどな。」

まあ、”バニングス”家の令嬢や”月村”家の令嬢が普通の私立の小学校に通っている（しかもバスで）時点でこの世界は、色々おかしいからな。そのくらい何ともないか。

「まあ、良いやアイツが帰ってくる前に平らげるか。」

そう言うのと、俺はフォークを手を取った。

「お帰りなさいませ。お嬢様。」

私の部屋がある階につくと、一人の老人がうやうやしく頭を下げていた。

「相変わらず、準備が良いわね。ジイ。」

「ハイ。お嬢様の事ならば、毎日の体重の変化から下着の好みまで熟知しておりますゆえ。」

「・・・いつもながら一言多いわよ?」

私はジイが用意してくれていた、学校のカバンを手に取り中身を確認する。そうしなくては、たまにとんでもないモノが紛れ込んでいる事があるからだ。

「・・・よし。異常無し。」

「ホッホッホ。ジイが信用出来ませんか?」

「3割方ね。・・・他に何か無かった？」

「はい。昨夜遅くに、お父様から、お嬢様の保有している株式を譲ってほしいとの連絡が御座いました。」

「・・・・・・そう。またか・・・・。」

私は、そう言うと言つて制服を着るために部屋に入った。

「どうなさいます？一応お嬢様は眠っている事にしておきましたが・・・・。」

「大方、”バニングス”からの圧力でしょう。」

「そのようで。」

鏡の前で服のシワを確認しながら、顔をしかめる。

「分かっているのかしら？今渡したら、待っているのは破滅のみよ？」

「そうですね。ですが、相手は”バニングス”家そう簡単には行きますまい。」

ジイの声はいつもと同じだが、状態の危うさはヒシヒシと伝わって来る。

「何とかするわよ。後8年・・・・いや5年耐えれたら。それまで、絶対に渡しちゃダメよ？」

「分かっておりますとも。ナギサお嬢様。いや、”バニングス家”分家”日野家”の跡取り様。」

「どうしたの？えらく説明口調じゃないの。」

「いいえ、分かりやすくしたまでです。」

時々ジイの事が分らない事があるんだけど・・・まあ良いか。

「とにかく。本家になんか絶対に負けないんだから。”日野”をつぶさせるもんですか。」

その後気付けば1200秒を軽くオーバーしており、南に怒られながら学校に向かった。結果としては遅刻手前であった。

ポツカポツカの日差しの差し込む窓際。うん最高の寝る場所だ。

「ZZZZZZ。」

「南！起きるか！」

なんだろう？今頭の上で何かが音を鳴らしたけど？気になって目を開けると甲田先生が俺の頭に手を乗せていた。いや、恐らくチップでもしたのだろう。だがご生憎さま。”不慮の事故”によりダメージ0である。

「・・・なんですか？今結構いい感じで現実と言つ怪物から決別出来ていたのに・・・。」

「お前な・・・学校は寝る場所か？」

「ハイ。自由時間や自習中は大概寝てますよ！」

「・・・はあ・・・南、放課後お前の為に先生方が特別課外授業を儲けて下さった。有り難く思え。」

「そんな・・・横暴です！先生！寝る子は育つて言うじゃないですか！」

先生オールスターだと！なんて地獄だよ！それは。ていうよりなんで行き成り？

「それはな・・・今日職員会議で決まったからだ。そんな訳で、寝てても良いぞ？多分夜までかかるからな。」

「夜まで課外授業だと！冗談じゃ・・・。」

アレ・・・？なんだ？この違和感？

「今日のミニテストで8割取れなかったら・・・。」

先生の言葉も聞き流し考える。

” 大きな黒犬 ”

” 満月 ”

” 冷気 ”

”何事も無かった様な現場”

そして、”夜の課外授業”

・・・・・・・・・・・・・・・・まさか・・・・・・・・・・敵は、転生者
？しかもアノ能力を貰ってる。

だとすると・・・・・・・・まともにぶつかる訳には、行かない。

”月”はあてにならない。

”予知”は、大きな出来事しか予知しない。

だとすると・・・・。

「・・・・・・・・ヤバイ。多分今日だ。」

この日俺は、初めてテストで満点を取った。

第14話 夜の課外授業（後書き）

南：日野さんが・・・敵だった・・・。

日野：どうして、そうなるのよ！

時田：・・・でも、ビックリだよ。日野さんって、あの”バニングス”の

分家だったんだね。

日野：・・・まあね。でも本家の令嬢が同じ学校にいるからあんまり知られて

いないけど・・・。

闇：何か、色々大変そうだな。相談なら乗るぞ？

日野：ありがとね。でも、まだ良いわ。

星光：さて、標的も時間も分かった訳ですし、次回は、またバトルですか？

作者：いいえ、少し短めの話を入れたいと思います。・・・本当に短いです。

雷刃：うわゝ不安ゝ。

時田：・・・それでは、また次回で。

第15話 一夜のイジメ撃退法（前書き）

短い話です。

第15話 一夜のイジメ撃退法

い、今俺の目の前で起こっている事を説明するぜ。

俺は、いつも通り、ミニテストの採点をしていたんだ。そして気がついた。

これは、6年生用の問題だと言っ事に。

当然、誰も答えられる訳が無い。なんたって、受験生用のミニテストだからだ。

恐らく、1組のアリサ・バーニングスでも不可能だろう。で、だ。

俺は、あの優しい篠山先生でもサジを投げた、出来の悪い生徒と噂をされ。

何故、聖杯小学校の編入試験をパス出来たのか、最近7不思議にも追加されつつある、南一夜の答案を採点したんだ。

結果は、

・

・

・

満点だった。

最初は、夢だと思った。そうだろう？成績は常に低空飛行。授業態度是最悪のあの南が、満点だと？

取り合えず顔を洗ってやり直すか、そこには全問正解の丸だらけ。クソ、これで、37回顔を洗ったんだぞ？夢なら覚める！覚めてくれ！

「あ”あ”あ”ゝ！！！！！」

「どうしたのかしら？甲田先生。もう30回以上も顔を洗ってるけど？」

「きつと、色々ストレスが溜まってるのよ。そつと、しときましょ
う?。」

俺が、この事実を認めるまで、後5時間。

何か、俺の知らない所で、未知の戦いが繰り広げられている用な気がするが、無視しとこうか。時は昼頃。

俺は、”高町なのは”出現ポイントである屋上を避け体育館裏で朝の惣菜パンをほうばっていた。
最近タマゴサンドにはまってます。

「このマヨネーズがまた・・・。」

体育館裏と言えば、学校の不良の3大溜まり場の一つに数えられるが、幸いこの学校で、不良と言う存在は、余り見たことがない。
なので、ここはジメジメするだけの場所であり、光の道を歩む主人公勢は勿論の事、一般生徒も滅多に訪れない俺のいこいの場と化しているのである。

「アムアム。あー美味かった。さて、昼はどう時間を潰すかね。」

1・教室に帰り寝る

まれるからパス。

うん、良い案だが、確実に日野さんに絡

2・”高町なのは”及び転生者の調査

俺は、自爆するほど、アホじゃない。

3・学校の施設を見学する

4段前を参照してくれ。

4・ここで、時間を潰す

これしか無いか。

そんな訳で、俺は余り湿ってないコンクリートの上に横になった。もし濡れても”大嘘憑き”があるから大丈夫だ。小鳥の囀りや微かに届く太陽の光が眠気を誘う。このまま寝るのも悪く無いのかも知れない。

「フアアアつと。」

一つ大欠伸をして、体を伸ばすと、誰かが、やって来る足音がした。

「ちい、折角のリラックスタイムを・・・。」

一瞬、気配を無かった事にしようかと思ったが、学校で無闇に力を使う訳にもいかない。何が原因で厄介フラグが立つか分からないからだ。

やるなら、始業前に限る。奴らは授業に行くから。

そう思い、部室塔の影に隠れる。『聖杯ファイト!』と書かれた旗を横目で見ながら、訪れた者の顔を見る。

数は3人。女2人男1人、歳は、俺と同じだ。何故わかるって? 2人は隣(3組)の奴らだし、1人は俺のクラスメートだからだ。つと言っより時田さんだったからだ。

と、言う訳で俺は。

「失礼。」

介入することにした。

「ん？誰かと思えば、2組の暗い君じゃないか。そいつ継ぐグズが何の用だ？」

「あ、友達にしたくないランキング上位の人だ！何？正義の味方気取り？ウケるんですけど。」

俺、そう思われてたんだ？へえ！知らない事が多かったんだな。案外。と言うか、そのランキング、誰が集計してんの？

「一夜・・・君・・・。」

時田さんが、暗い表情で俺を見ている。俺は、軽く笑うと元気を出すように言った。

「安心しろ。日野さんの約束は、守る。」

「ハア？何言ってるの？バカじゃね？」

「ヴザイ♪」

俺は、振り向きざまにチョコキでヴザ男の眼にフレンチキスをプレゼント。

「ギャアア！！」

ウザ男絶叫。ウザ……。

「ちょ……大丈夫——。」

続いて、素敵（笑）な彼女にも同様のプレゼント。

「キャアア！！！」

眼を押さえて転げ回る2人が面白い事。アッハハハ！！

「ついでにもう一つ」

視力を無かった事にしてあげましょう。イツツ”大嘘憑き”！

「め、眼が見えないよ」。

「い、嫌あ！！！」

「大丈夫！きつとこの先も上手くやって、行けるさ。」

昼休み終了まで、そのままでもいいからおうか？

「俺の仲間に次、手を出したら、殺すから？いや、半殺しだから、注意せよ！」

今だに泣きじゃくる2人に背を向け時田さんの手を引いて体育館裏から脱出する。

「……あの人達大丈夫なの？」

時田さんがオズオズと聞いてくる。まあ、なんと優しい。

「心配無用。後遺症すら残らんよ。所で、なんで、1人？日野さんは？」

「うん・・・パンを買いに行ってくれて・・・。」

ああ、納得。そう言えば、朝の拉致の時、弁当を作らなかったんだ。・・・日野さん・・・なんて、バカな事を・・・。

「時田さん。」

「・・・何？」

「学校に来なかった方が良かった？」

「・・・うん。」

「・・・。」

「でもね・・・楽しい。」

「は？」

意味が分からないが？因みに俺のアナザーマインドは、学校＝地獄
と言う認識なので、更に解からない。

「・・・これから守ってくれる？」

だが、僅かに笑うこの表情は、解る。そして、このセリフの真意も。つまり、条件付きか。それなら。

「自己防衛程度にならね。」

こう答えるのがベストだろう。

第15話 一夜のイジメ撃退法（後書き）

闇 : ふむ。どんな所にもいるものだな。

星光 : 人とは、そんなモノですよ。

日野 : でもさ、なんで助けたの？力を使ったらバレるかもじゃないか
ったけ？

南 : いやーあまりにも、” 南 一夜 ” だった時の記憶が反応した
もんで……。

日野 : ナニソレ？……まあ、良いか。じゃあ、次で会いましょう。

第16話 下校時間の対策（前書き）

短い話

続けて投下。

第16話 下校時間の対策

「だから、悪かったって言うてるでしょう？」

「・・・へえー。」

「・・・私は、もう気にしてないよ？」

下校時間。そして、下校風景。大勢の生徒が帰りPTAのオジサンやオバサンが旗を持って笑顔で声をかけてくれる、いつもの風景を3人並んで歩いていた。まさか、俺が別の誰かと並んで帰るとは、夢にも思ってたなかった。

しかも、女の子となんて、絶対になかった。これが、アニメの中だけで実現していると言う伝説のシチュエーションか。まあ、嬉しくはないけどさ。

「がっ！」

拳が飛んできた。なんで！

「むかついたから。かっ！となつてつい。」

「そんな、少年犯罪的動機で殴られたの！」

「・・・大丈夫？」

時田さんに貰ったティッシュで、鼻を抑える。今度から”不慮の事故”を常時発動状態にしておこうか？

そんな、殺意を表していると、分かれ道がやって来た。

「じゃ、私こつちだから。また、明日ね！南？鈴音ちゃんは、縛つてでも連れてきなさいよ！」

「俺が？」

人に見られたら、大問題なんですけど？

「大丈夫よゝ多分。罪はアンタがかぶってくれるから。」

「何も大丈夫な要素が無いんだけど？」

「じゃ！」

シュタツと手を上げると、日野さんは、マンションの方角へ走って行った。・・・さて。

「時田さん？」

「・・・うん」

俺は、時田さんから、一枚の紙を受け取った。それには、朝見た絵と同じモノが描かれていた。

「やっぱ、そうか。これ以外は？」

「・・・ごめんなさい。分からなかった。」

時田さんは申し訳なさそうに頭を下げるが、これだけあれば十分である。

「ありがとう。これで、確信が得られた。」

「……でも、どうして？」

「それは、秘密と言う事で。まあ、一つ確かなのは。」

「……日野さんが危ないって事？」

「ああ。しかも今夜だ。」

俺は、もう一度絵を見る。その中で、日野さんは赤い肉塊と化していた。こうなるのに俺の予測だと5分もかからないだろう。

あの力ならば、尚更だ。しかも、あの力は、俺にとっては天敵と言っても良いだろう。

「まだ、転生者共と戦った方がマシだっただろうな。」

敵が異能だったら、右手で打ち消せる。チートなら”反射”や”不慮の事故”で対応出来る。だが、俺の予想が正しかったら。

相手が悪夢なら？

「勝てるのかね？俺の力で？」

なんで、こんな厄介な事に首を突っ込んだのかね？俺も。

「・・・絶対に生きて帰って来てね。」

そう言ってくれる、時田さんの言葉が重かった。その後、時田さんを家まで送り1人アパートへと戻る。

時間は、多少ある。取り合えず、寝とこうか？夜は長くなりそうだから。

第16話 下校時間の対策（後書き）

雷刃：みじかつ！

作者：だから、短いつて言ったでしょう？

星光：ならば、続けて書けば良かったのでは？

作者：前の話は、時田さんの話だったので・・・。

闇：成る程な。新キャラを目立たせたかったのだな？

作者：・・・。

日野：所でさ、アンタ、鈴音ちゃんに何を吹き込んだのよ？なんか確信を得たみた

いだったし。

南：直ぐに分かと思う。ヒント・・・時間。

雷刃：????・・・まあ良いか。じゃあ、今日はこの辺で！

第17話 グレーブヤードにゆづりそー！（前書き）

投下しますー！！

第17話 グレーブヤードによっこそ！

「ん、ん、ん、プハー！ああ、やっぱり風呂上がりは、牛乳よね。」

「ホホホ。左様でございますか。ですが、まだ就寝の時間は早いですぞ？」

「分かってるわよ。ジイ、宿題の準備をして頂戴。」

「ハイ。では、勉強部屋にて、用意させていただきます。」

ジイは、そう言つて風呂場を出て行つた。あのジジイいつか解雇してやる。そう心に誓つと私は身体に巻いていたタオルを取つて、服をきた。そして、メイドに夜食はいいと伝え勉強部屋のある階へと移動する。

「ハア。」

私は、エレベーターに貼つてあつた紙を見てため息をつく。またか。

「お嬢様。シュレッターです。」

「ジイ。ご苦労様。でもいいわ一応目を通すから。」

「左様でございますか。」

私はそう言つと、ジイと共にエレベーターへと乗り込み手紙を開く。内容は、まあ、予想通りだった。

「また、”バーニングス”の事ですか？」

「ええ。私を養子に取りたいそうよ。大事な娘の影武者にでもするつもりなのかしら？」

「でしょうな。または、下手な事をする前の人質か・・・どちらにしろ信用なりません。」

「全く。いつまで、家に2年前の誘拐事件の犯人疑惑が付き纏うのかしらね？」

「まあ。あの”バーニングス”と”月村”のご令嬢様が2人揃って誘拐されましたからね。内部犯疑いが強いでしょう。」

ジイの言葉に私はウンザリすると、勉強部屋の階へと到着した。

「はあ、じゃあ、今日の宿題を終わらせて来るわ。」

「家庭教師の宿題もお忘れなく。」

「分かってる。ジイも迷惑な電話やメールの処理をお願いね。」

「ハイ。では、お休みなさいませ。」

恐らくまた、2時間後辺りに背後から現れるのだらう。

「さーて、始めますか！」

腕をまくると私は、机に向かった。

二時間後。

「ふむ・・・サトルは、きっとハツコが憎かったのね。きっと、この後惨劇が起こるわ。」

国語の問題をとき終わり、一息付くと、私は、机に突っ伏した。もう今日は動きたくない。

時計を見ると、11時を刺していた。予定より少し遅く終わったらいい。

「フアアアゝねむ・・・。」

静かな室内を歩き近くの電話を取る。

「・・・もしもし、トメさん？部屋に毛布持ってきてくれる？なんか寒いわ。」

何故か、今日はどうしても冷えるわね。もうすぐ夏のはずなのに・・・息も白くなってるし。

そう、思っていると、違和感を覚えた。

「もしもし？トメさん？聞こえてる？トメさん！」

いくら、呼びかけてもトメさんの返事は、帰って来なかった。

「故障？」

いや、それは無い。ここのメンテナンスは週1でやってもらってるし。どうなってるの？

「ジイ！いないの？」

呼べばいつでもやって来るジイすら来ない。私は、怖くなって、部屋を出た。すると。

「なに・・・・・・・・ここ。」

目の前には、学校にグラウンドが広がっていた。・・・確か、勉強部屋はマンションの23階だったはず・・・。

「今晚わ〜。」

そんな、声でしたので上を向くと、一人の子供が、笑って木の枝に腰掛けていた。そして、私は見た。

「なんで・・・・・・・・どうして？」

冷たい空にはとっても透き通った星々と輝く黄金色の月が浮かんでいた。

月は、少しも欠けていない見事な満月だった。

そんな、私を見て子供は笑う。両手を広げ楽しそうに言う。

「ようこそ！墓地へ！グレイブヤードへ！アタシは、ここの管理人兼葬儀人。さて、お前もここで、人生を終了しましょう？」

すると、どれと同時に暗闇から、昨日の黒犬が2匹も現れた。

「ヒイ！」

私は、悲鳴を上げると、学校の中に逃げ込んだ。何なの？一体何だ
って言うのよ！

「逃げた？」

少女は、そう言って、首をかしげると直ぐに納得した顔になった。

「って、事は、もう一人の方だったか。・・・まあ、良いや。アタ
シの殺しの邪魔をしたのは変わりないしね。」

そう言って、残酷な表情を作った。さて、今回の獲物ちゃんは何分
もつかない？

そう小さく呟くと楽しそうに女の後を追った。

第17話 グレーブヤードによっこそ！（後書き）

闇：敵が出てきたな。しかも、厄介そうなのが。

雷刃：で？アイツの力って結局何なの？

？？：アタシの力は、“ナイトクラス”って言う小説の力よ。

作者：今までのヒントが分かり辛くて、ごめんなさい。

南：悪夢を操る力・・・果たして日野さん大丈夫だろうか？

日野：・・・どう言う意味よそれ？

南：では、次回で。

第18話 超能力者推参（前書き）

遂に主人公推参？

投下します。

第18話 超能力者推参

「そろそろか。」

俺は、日野さんのマンションの前で、その時を待っていた。

時田さん予言が正しければ、これから三分以内に何かが起こるだろう。

「。。。。」

時計を見ながらマンションを見上げると、心無しか肌寒くなってきた。

「来た！」

俺は、全力で走りマンションへと突撃した。

「ハアハア…………もう嫌だ。帰りたいよ。」

私は、教室の中の机の下に隠れてそう呟いた。そして

「ここは何処なのよ。」

この机の大きさは、どう考えても小学生のサイズじゃないのだ。つまり、ココは聖杯小学校じゃない。

いや、それ以前に現実かどうかも怪しい。なんで、今日が満月なの

よ！

「こんなことなら、鈴音ちゃんも南も家に泊まってもらってれば良かったわ。」

きつと、南だったら、いち早く気が付くに違いない。でも、所詮後の祭りなのだ。

ここには、自分の味方はいない。いるのは大きな黒犬と変な子供だけだ。

「いいや、きつと大丈夫よ。冷静になれ私！鈴音ちゃんの絵を思い出せ！」

あの絵には、満月の夜に八つ裂きにされる私が描いてあった。でも、その隣には大きな人影が、描いてあったのだ。
あの子供も犬もそれには該当しないはずである。つまり、この場はなんとかなるかもしれない！そうよ！なんとかなる！

「グルルルル………」

すると、私の教室に黒犬がゆっくりと入ってきた。私は息を潜める。鼻の良い犬にどれだけ使えるか解からないけれど……。

「……。」

「グルル………」

「……。」

「グルルル………」

頼むから、そのまま……………。

「……………」

「グルル……………」

私の祈りが通じたのか、黒犬の足音が遠ざかっていく。助かった……………。

「見つけた〜！」

助からなかった。行き成り子供がこつちをしゃがんで見ていたのだ。何？コレなんてホラー？

「きゃああああ〜！」

「アハハ〜待つてよ！」

子どもを突き飛ばし、また走る。

「アハハハ〜待て〜！」

しかし子供は、まるで私の居場所が分かっている様に先回りしては、追いかけて来るのだ。

そう。まるで、私の考えが詠めるのか、それとも瞬間移動でもしている様に。

「なんなのよ！あの子！」

そう叫びながら、走っていると前方からあの黒犬がゆっくりと歩いてきた。私は、直ぐに方向転換するが。

「グルル・・・。」

「って！こつちも。なら。」

また、別の方向を見るが、

「グルル・・・。」

「ガルル・・・。」

どうやら、全方位を囲まれていたらしい。詰んだ！
このか弱い美少女小学生に何とか出来る状況じゃない。

「アハハ〜もう終わり？残念だな〜もう終わっちゃうなんて。」

「嫌・・・何なの・・・アンタ・・・ココどこよ・・・。」

でも、子供は、そんなことを話す必要が無いとばかりに獰猛な笑みを浮かべた。

「グレイブヤード。かつて、雪の女王が行った、殺し合いの舞台。一年をとうして、まるで冬の様な気温。そして、この場所で最も恐ろしいのは、その世界の事柄は全て作り出した者が支配出来る事だ。」

その代わりに、今この場で最も聞きたい声が聞こえてきた。

「南！どこ？どこにいるの？」

辺りを見渡せど姿が見えない。

「こっちだ。こっち！」

と、声は、私の下から聞こえてきた。・・・下？

「おい！」

見ると、手の平サイズの南が手を振っていた。え？何コレ？

「ちつ、ヤッパ、こっちじゃこのサイズが限界か。」

「アレー誰かと思えば本物じゃん！ここにどうやって来たの？」

子供が、黒犬近付きながら南に聞いてくる。それに対し南は、笑う。

「なーに・・・俺は、南一夜。只の超能力者だよ。」

そして、何故か子供も笑った。

「アハハゝそうなんだ。アタシは余世夢。只の殺人鬼伴超能力者だよ。」

何？こいつも超能力者なの？しかも殺人鬼？

「落ち着け。こんな奴、現実じゃ敵じゃない。」

「現実？どういうこと？」

南が、何かを言おうとした時。余世が腕を振った。それと同時に4匹の黒犬が私に飛び掛って来た。

「わあああー！」

「日野さん！左腕を突き出せ！」

「え？」

そう言われ、私は、腕を突き出した。すると……。

「「キャン！！」」

偶然当たった、2匹が碎けて消え去った。

「な！」

「え？」

私はともかく余世まで驚いていた。これは予想外だったらしい。

「却本作り”夢の中だから充分じゃねえが。”幻想殺し”と”超電磁砲”が使用可能になってる。流石に”不慮の事故”と”大嘘憑き”は無理だったけどな。」

「夢って……こっつて夢の中なの？」

私の言葉に南は、コクリとうなづいた。そして、私を見る。

「日野さん。悪いけど俺は今、日野さんを抱えて逃げてる最中だから、加勢が出来ない。だから、アイツを日野さんが倒すんだ。」

「は？どう言う事？」

「”脚本作り”は、ちょっと発動条件がショッキングでな・・・只今ショットガンやらを持ったメイドさんや黒服のお兄さんに追われる正直キツイ。」

手の平サイズの南は、チョコチョコと走っているマネをして言った。ちよつと可愛いかも。

「のわ！掠った！！嘘・・・実弾！」

「当然でしょう？アンタ誰を誘拐してると思ってるの？因みに誰一人傷付けたらダメだからね？」

「難易度ハード?!」

まあ、こいつなら大丈夫でしょう。私は、そう考えると笑って余世の方を見た。余世は、先程までの笑顔ではなく、怖いくらい慎重な表情になっていた。

「ハアゝまさか、アタシの能力に干渉出来る奴がいたとはね・・・。良いわ、かかってきなさい。全力で潰してあげるから。」

「それは、こっちのセリフよ。超電磁砲少女イマジンナギサが成敗よー！」

「「ダサ!」」

よし、この超能力者共後でコロソウ。

第18話 超能力者推参（後書き）

南：よし！次回は、バトルだ！ガンバレ日野さん！

全員：………。

南：ん？どうしたんだ？

雷刃：ねえ……キミって主人公だよな？

南：ああ。一応。

日野：なんで、私が”殺人鬼”をと戦う流れなのよ？

南：え？そりゃー相手は夢の中だし……俺に何が出来る？

星光：それでは、アナタは何をするのですか？

南：今の所は、逃げる。正にタイトル”自己防衛”に徹する。

闇：……作者……。

作者：次回。日野さんと余世が激突する！お楽しみに。

日野：私が、戦う事は決定なんだ！

作者：では、次回で。

第19話 激突！殺人鬼VS超能力者（仮）（前書き）

主人公不在のバトルスタート！

投下デス！

第19話 激突！殺人鬼VS超能力者（仮）

学校の中を強烈な電光が駆け巡り、闇に包まれた校内を照らし出している。

いま、この場に対峙する2人の人間。

1人は、小学校低学年程の子供にして殺人鬼。”余世夢”

別名。夢の殺人鬼。敵を自分の夢の中へと引きずり込み仕留める。完全犯罪者である。

1人は、小学校4年生の同じく子供にして超能力者（仮）。”日野ナギサ”

別名。委員長。厄介事を人に押し付ける厄介なお人である。

「なに？なんか、すごく失礼な事を言われた様な気がするんだけど？」

「アハハゝ何余所見してんの？」

私が、油断している隙に余世は、次々と黒犬を召喚して私を襲わせろ。流石にこの数は右手じゃ捌ききれず辺りに紫電を放って、牽制する。実に不思議な事に能力の使い方が頭の中に流れ込んで来るのだ。

おかげで、次にどうすればいいのかよくわかる。

「ちい、アンタ！そんな遠くからじゃなくて、近くに来なさいよ！」

「嫌だよ？その力アタシの能力をあんまり寄せ付け無いんだもん。」

近付くだけ危険よ」

余世は、そう言うと、次は炎を繰り出した。なんでもアリですか？

「でも、その程度なら！コイツで十分！」超電磁砲”！」

「甘い！”不闘”！」

すると、どういう事が、余世の炎の勢いと威力が段違いに上がり、
”超電磁砲”を軽々と貫いた。

「嘘！クツ・・・！！！」

右手を突き出して炎を防ぐが、それが、駄目だった。

「アハハ！隙アリ！”呪われた双剣”！」

突然現れた、双振りの双剣が私の鎖骨から胸にかけて皮一枚を切り裂いた。

「痛っ！切られた！痛い！」

「アハハ！」

「・・・でも・・・。」

私は、素早く相手の腕を掴む。ただじゃやられないわ。

「最大電流！！！！！」

「えっ？・・・・・・・・アギヤアアアアアア！！！！」

直接電流を相手に流し込む。舐めんじやないわよ！

流石に、電流を直接流した影響で、余世の体が、プスプスと煙を上げて、焦げ臭くなる。

「ア”ア”ア”ア”・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

正に電気椅子。しかも正面から見ている。もう限界かも。

「てい！」

腕を放し余世を放り投げる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピクリとも動かない余世を見ると、何もここまでする必要があったのか？と思わなくもない。

てか、やりすぎたか？

「・・・・まあ、良いか。早く本の世界に帰してよね」

その時、ポンという音が聞こえ下を向くとミニ南が出現した。

「ハアハア・・・・あのジジイ・・・・だだもんじゃねえ・・・・。日野さん無事・・・・ヒデエ」

「何よ？文句あるの？私だって、見てよ！こんなにやられたのよ？」

私は、自分の傷を示す。コレ治るの？まあ、いざとなったら、南にやってもらえば良いか。

「・・・ユルサナイ・・・」

「「！！！」」

その時、完全に枯れ果てた、声が聞こえてきた。私もミニ南もそこらを見ると、そこにはプスプスと最早炭人間と化した余世がいた。

「キャアア！」

「ホラーだね。てか、アレやったのは日野さんなんだから。悲鳴はないと思うぞ？」

「いや！いや！嫌ア！！！」

「ア”・ア”・ア”・・・」

更に電撃をぶち込む。悪即滅。

「ひ、日野さん！それぐらいに・・・せめて原型を残さないと・・・」

「ハアハアハア・・・」

煙が、辺りに漂い炭臭い臭いが鼻を付く。殺った？そして、煙の中に一つのシュルエットが浮かび上がる。

「・・・ハ？」

「・・・来たな。日野さん勝負はこれからだ」

それは、2メートルは超える大男だった。片手に肉厚の肉切り包丁を持ち、濁った眼でこちらを見ていた。

「アカカカ・・・コロシテヤル・・・コロシテ・・・ヤル・・・」
「マッド・ブツチャー」アノ、オンナヲコロセ・・・」

「フシュ、、、」

大男は、ゆつくりとでもとても早く私に近づいてくる。なによ・・・この人？

「ま・・・マジかよ・・・」

すると、ミニ南は、見当違いの方向を向いて呟いていた。

「・・・テメエ・・・寄りにも寄って、こっちにエライもん召喚しやがったな」

「・・・どうしたのよ？」

「悪い。ちょっと不味そうだ。そいつが現実世界でも召喚出来る事を完全に忘れてたわ」

ミニ南の声は、本当に不味い事を知らせていた。本当に何があったのよ。

「アハアh・・・ミンナ・・・しんジャエ・・・」ヨトウン”ミンナゴロシテ・・・アハ」

狂気に満ちた、余世の声に背筋が凍り付そうになる。すると、ミニ南がとんでもない事を呟いた。

「日野さん。悪いけど、追っては一回殺しておくよ」

「は？」

南まで何を言ってるの？馬鹿になった？

「じゃないと、正直再生が出来ないくらいグチャグチャにされかねない」

ミニ南のちっこい体を握り潰さんばかりに握るが、反応一つしないと言う事は本当にヤバそうな奴がいるのだろう。

「・・・好きにしなさい。ただし・・・」

「分かってる。”無かった事”にするだけだから。とにかく」

「うん。分かってる。絶対に・・・」

「勝ってよね」

そう言つと、ミニ南はポンと消えた。
さて・・・

「フシュ……。、、」

「あんたの相手は私ね。叩き潰してあげる」

さあ、戦闘開始よ。

第19話 激突！殺人鬼VS超能力者（仮）（後書き）

闇：・・・コレ、別に南がいなくともやって行けるんじゃないか？

日野：”超電磁砲少女イマジンナギサ”で？確かにね。・・・殺っちゃう？

南：怖い事言うなよ！まあ、とにかく日野さんは、よくやったよ。・・・状況は、悪化したけどさ。

日野：一体何が起こったのよ？

南：それは、次回で・・・。

第20話 伝説の巨人” ヨトウン” (前書き)

少し時を遡ります。

どうぞ！

第20話 伝説の巨人”ヨトウン”

場所は、聖杯小学校。俺は、マシンガンメイドさんやハンドガンの黒服さん。そして・・・

「ホホホ。逃がしは致しませんよ？」

「・・・化物め・・・」

執事服を着込んだ、老人を相手に鬼ごっこをしていた。前者2名ならばまだ良かった。問題は、老人である。
この老人、全てに置いて厄介なのだ。まるで時田さんと同じ能力を持っているのでは無いか？と思えるほど先回りしてくるのである。

「お嬢様を帰して頂きますよ？」

「だから・・・無理だつて！さっきから言ってるんだろが！」

「いいえ。この歳で駆け落ちなどこのジイの目が青白いうちは、許しませんよ！」

「駆け落ちじゃねえ！つつか、何だよ！青白いつて」

「ホラ」

「本当だ！青白い！カラーコンタクトをしてるし」

この、ジジイこれをやるためにタネを仕込んでいたな。侮れん。

「執事流拳術5の型”残砂磁双”」

ジジイが投げた石に拳をぶつける。その瞬間、石は閃光に包まれ音速で飛んできた。

「つか、それ”超電磁砲”じゃね？・・・いや、石でやってるから、それより上かも・・・。しかも・・・。」

「のわ！」

これは、何故か”幻想殺し”が通用せず、一回腕が爆散した。なので、避けるしかない。

「ホホホ。避けるのだけは、達者ですな」

「どうも。それなら、止めてもらえませんか？お嬢様が死にますよ？」

この間も日野さんを抱えているので、下手に戦えば日野さんに被害が及ぶ。おかげで、さつきから日野さんのいる夢の世界に干渉出来ずにいるのだ。

「日野家の令嬢たるもの何時死んでも良い位の覚悟はございます。下手に生き、辱めを受ける位ならば死を選ぶ。それが、日野で御座います。まあ、お嬢様だけです」

「・・・クソ」

コレじゃ、日野さんを盾に出来ねえか。”大嘘憑き”を使えば楽なんだが・・・どうやら、”却本作り”の発動中は、能力が低下するらしく

相当不意をつかなくては”無かった”事にならない。このジジイならば尚更だ。

「隙アリ。執事流拳術1の型”背後取り”！」

「クッ・・・！！！」

まるで、瞬間移動の様に俺の背後に出現するジジイ。正に名の通り背後を取られた。不味い。

「さて、このまま、その首落とすのも軽いですが・・・如何したのか」

首筋に冷たい手刀の感触が伝わる。明確な死のイメージが頭を巡る。こいつ、・・・マジで俺を殺す気だ。

「む？」

「・・・」

俺は、精神力をフル活動させ”大嘘憑き”で自分の気配を”無かった事”にした。精神的にはかなりの負担がかかるが、この場合仕方が無いだろう。

「姿は見えるが気配が分ならず。奇っ怪な技ですね」

「・・・」

こいつ、俺の姿が見えるのかよ。”星光”すら気が付かなかった程の技なのに・・・このジジイ本当に人間なのか？

まあいい。行くか。

「ハアアアアア！」

「ム？」

一面を巡る電流の嵐を発生させジジイとの距離をとった。そして、手短な教室へと逃げ込む。

「ハアハア・・・ちくしょう・・・なんつう奴だよ。とにかく何とか早く終わらせて貰わねえと」

そんな、訳で教卓の下に潜り込み、”幻想殺し”で日野さんの頭に触れる。

奴の能力は、夢の中に相手を引きずり込み自分の有利なフィールドで戦う某殺人鬼的な力である。その間、対象の意識は、相手の精神世界に引き込まれており脱出は不可能なのである。ならば、どうするか？・・・簡単だ入れば良いのだ。

俺には、異能を打ち消す”幻想殺し”と、いかなる状況でも生きて行ける”ライフオジオ”がある。これらを利用し、更に日野さんに”却本作り”で道を繋げれば何とか入ることは可能になるのだ。

「よし！行くか」

そして、夢の世界へ・・・。

そこには、惨劇が広がっていた。

まあ、それはいい。それより不味い事になりつつあった。

「アカカカ・・・コロシタル・・・コロシテ・・・ヤル・・・」
「マッド・ブッチャー」アノ、オンナヲコロセ・・・」

「アハアハ・・・ミナ・・・しんジャエ・・・」ヨトウン”ミン
ナゴロシテ・・・アハ」

殺人鬼・余世月が言ったその言葉。そして、現れた”マッド・ブチ
ャー”。

そして、昨日現れたのは”ダークネス・ハウンド”それは、夢の世
界ではない現実に現れた。つまり・・・。

「オオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「！！！！」

突然の咆哮が、俺の意識の一部が聞いた。そして、少し意識を戻す
とそこには・・・。

「・・・テメエ・・・寄りにも寄って、こっちにエライもん召喚し
やがったな」

白い布をまとった、禿げ頭の巨人がそこにいた。その身長十メート
ルは下らず、ビル4階程の高さがあった。

表情は仁王像の様に凶悪で、腕や足に付いている筋肉は底知れない
パワーを感じさせる。

その昔、雪の女王が自らの血から創り出した、頑丈で怪力をもつ巨
人の一族。

伝説の巨人”ヨトウン”それが、俺の対戦相手となる。

第20話 伝説の巨人”ヨトウン”（後書き）

南：何だよ・・・何なんだよ！あのジジイ！

日野：？ジイは、昔からこんな感じだったわよ？

闇：人外がまた1人・・・。

雷刃：まあ、それよりなんか、大きいのが出てきたね。

星光：ビル4階って・・・最早”ロボット”とか”光の巨人”の出てくる

レベルなのでは？

雷刃：うわゝカッコイ！

作者：・・・残念ですが、出てきませんよ（”光の巨人”か・・・。）。

余世：ミンナ・・・ゴローズ・・・アカカカカ！！（約：それでは、次回で！）

第21話 燃え上がる火の（日野）意思（前書き）

夢の中の戦い。

決着。

第21話 燃え上がる火の（日野）意思

「うわあああ！死ねえ！！！」

「フシュ・・・」

私の地鉄剣を肉切り包丁で受け止める殺人鬼は、流れる電流もなんのその。遠慮もなく私を切りつけてきた。それを紙一重でかわし、再び切りつける。今度の狙いは、殺人鬼の上にいる余世だ。

「死ね！！！！」

「ケケケ・・・ムダ・・・」

しかし、殺人鬼は、巨体を動かしてかわす。見かけによらず俊敏なので気持ち悪い。

「ハアハア・・・チィ、ちゃんと当りなさいよ。悪は滅びるのよ？」

「フシュ・・・」

さつきからこのやり取りをずっと続けているものの、事態は全く進展していなかった。いや、長引けば、体力の減っているこっちが不利だ、それに外で戦っている南も負担が大きくなるだろう。なんとか、早く終わらせないと。

「ねえ、一つ良いかしら？アンタ、なんで人を殺したりしてんの？」

「ドウデモイイコト・・・」

「いや、気になるわね。そんな力が有れば、たくさんの人が助けられるんじゃないの？」

「・・・オマエ二八、ワカラナイ。・・・アタシノジンセイハ、最アクダッタ」

すると、余世は、ゆつくりと”マッド・ブッチャー”の上に立った。見た感じは完全に焦げ付いていて、不気味だったが、その目には、どうしようも無い憎悪が浮かんでいた。見た感じは、私より年下の子に一体どれだけの憎しみが渦巻いているのだろうか？
少なくとも私は、分からなかった。

「騙サレ、ステラレ、また、騙され。サイアクだった。死んだトキハ、ココロからヤスラゲた。ナノニ・・・また、人生が・・・シカモわけのワカラナイチカラをモラッテ・・・キモチ悪がられて・・・憎い・・・皆憎い！コロシテヤル・・・コース・・・あああああ
”！！！！！！！！”

一つ分かった事がある。超能力者って、ヤッパリ解からない。でもこの子の人生が最悪だった事は理解出来た。

この子は、未来の私の姿なのかも知れない。”日野”も”バニングス”から裏で大きな被害を受けてきた。分家と言う事で本家を守るために盾になり、他の家を攻撃する矛にもなってきた。その為”日野”は、多方面から怨みを買った様々な攻撃を受けてきた。

裏の”バニングス”家の事を知らない奴らから、悪の象徴として。まるで、身代わり人形の様に。

「コロシテヤル・・・コロシテヤル・・・コロシテヤル・・・ああ

ああああ”！！！！！！！！”

この子の人生もそうだったのかも知れない。他の人間の盾になって、利用価値が無くなれば捨てられる。

捨てた奴は、平然とした顔で生きて行く。最悪な世の中で生きてきたのかも知れない。そして、訳が解からないけど、また、やり直そうとした時に超能力に目覚め、周りから拒絶され完全に狂ったのかも知れない。

私も今は夢の中だとは言え、南の力の一部を使って戦っているけど、この力は、はつきり言っただけ怖い。人間をたった一回で丸焦げに出来る電流を出せるなんて、本当に恐ろしい。もし、南の事をよく知らず、この力の発動を見ていたら、恐らく絶対に避けていただろう。漫画などで、過ぎた力は人を孤独にする。と言う言葉があるけれど、まさにその通りである。

「ねえ、ちょっと良いかしら？アンタのその絶望の一旦には、その超能力が関わっているのよね」

「あああああ””！！！！！！！！”

「今、外で戦ってる奴。南って言うんだけどさ、アイツも超能力者なのよね。知ってる？アイツ今でこそ私や鈴音ちゃんと話してるけど聞いた話じゃ、転校してきて一年間ずっと、一人で誰とも関わらずにいたらしいのよ」

「ダカラ・・・ドウシタ？」

「・・・アンタと同じなんじゃないのかなと思ってさ。大きな力を持っているから孤独で誰とも関わらない。いや、怖いんだと思う。拒絶されるのが、奇異の目で見られるのが・・・。」

「アイツとワタシはチガウ。絶望シタモノがチガウ・・・」

でしょうね。でもさ、もしアイツがアンタと同じ理由で暴走でも起こしたら、最悪な事になるわ。全身から電流を流す奴にこの国の法律で対応したら一体どれだけの被害が出るんでしょうね。・・・だからさ、私は・・・。

「アンタ程度の奴に負ける程情けなくないし、絶対になんとかなるって思ってる。アンタは南の反面教師よ」

「ソウ。ナラドウスルノ？」

「アンタを倒して更生させる。超能力者だから、気持ち悪がれるって言う幻想をぶっ壊してあげるわ」

「アハハh・・・所詮はコドモのカンガエね・・・」

「笑うと良いわよ。でもね”日野”はね結構約束は守るのよ?」

私は、そう言うのと心の底から念じた。最強の奥の手を出せと。南ならそのくらいの武器ぐらい持っているだろうと念じて。

すると、何かが現れた。それは、一枚の鏡だった。そして、その中にあるのは1本の螺子。

”却本作り”その知識が脳内を駆け巡った。本来なら絶対に出せる訳もない物。何故出たのかは分からなかったけど。

「使わせてもらっわよ?」

「ナンデ・・・タイヨウノ・・・鏡が・・・あノコドモにアタシが

共感したとデモ・・・」

余世が、何かを言っているが、空気を読まない事に定評のある私です。

「フシュ・・・」

自らの主の危機に動いた”マッド・ブツチャ”の肉切り包丁を恐れずそのまま突っ込んだ。最初は、左腕が私から切り離された。

激痛が走ったけど関係無い。所詮は夢なのだ。次に、胴に包丁が食い込んだが構わず。進む。そして・・・。

「アアアアアアアア！！！」

「そんな・・・」

私が真つ二つになると同時に”脚本作り”の螺子が余世に食い込んだ。

「やった・・・」

薄れゆく意識の中で私は理解した。つまり今本体の方にはあの太さの螺子が突き刺さっている状態なのだろう。・・・

そりゃ、ジイも怒るわ……。そうして笑うと同時に今度こそ意識は消えて行った。

第21話 燃え上がる火の（日野）意思（後書き）

雷刃：遂に！決着ウ！

闇：ふむ。遂に”夢夜の殺人鬼編”終了か。

日野：そうね。皆！ありがとう！

南：いや！チヨイ待て！まだ、俺の活躍が残ってるぞ！

雷刃：あ、そうだったね。影が薄かったから、気づかなかったよ。

星光：そうですね。まさか、転生者の相手を一般人に押し付けると
いう

前代未聞な事をしでかしましたからね。

闇：正に”不慮の事故”だな。

南：うつっ・・・。

星光：しかも、思いきり誤解まで、されてますからね。

南：自分から1人になってただけなんだけどな。

闇：まあ、そう思われているのなら仕方が無いな。

日野：何の話？

全員：いいえ、なんでも。

作者：次回は、遂に南が活躍・・・する？ お楽しみに？

第22話 破壊と自己保身（前書き）

主人公。やっと活躍！

第22話 破壊と自己保身

さて、俺の目の前には、まるで、某光の巨人が出てくるべきクラスの敵が立っている。”ヨトウン”雪の女王の切り札にして、一般的な人間には手出しも出来ない、絶対的な力の塊である。

「さーて、日野さんには、強がったけど・・・どうするかな？コレ」
体の巨大さは元より俺の力は元々自己防衛第一。その上どうにか出来る有一の能力である”大嘘憑き”は、使用不可に等しく”不慮の事故”は・・・・・・・・とある理由により使用出来ない。

「せめて、日野さんを消せば・・・」

俺は、両腕で抱えている日野さんを見た。腹部には太い螺子が食い込んでおり、猟奇殺人の被害者の様な感じになっている。

まあ、そのおかげで、黒服や武装メイドさん、バケモノ爺さんに追いかけられた訳だが。

「オオオ！！！」

突然”ヨトウン”は、俺の体より太い腕を俺に向かい振り下ろしてきた。巨大だが、動きは決して緩慢ではなく、むしろ速い程だ。

「クッ・・・地鉄の盾！」

そう言った瞬間、黒い塊が盾の様に広がった。前回と違い今回は、砂場のある学校である。厚さは、昨日の比じゃない。
だが・・・それは甘い考えだった。

「オオオオオオオ！！！！」

”ヨトウン”は、すぐさまに反対側の腕で再び殴ってきた。そして、また殴る。

「オオオオオオオ！！！！（僕は、コレが壊れるまで殴るのを止めない！！）」

まるで、そんな声が聴こえる。幻聴か。

「”ヨトウン”って、ここまで、頭が良かったか？」

俺が知っている”ヨトウン”は、少なくともここまでじゃ無かったはずだ。つまりこの”ヨトウン”は、俺の能力と同じく強化されたモノと言う事か。厄介な。

「だが、所詮は、力押し第一主義の巨人だ。このままガードしていればチャンスは来る」

そう。いくら、殴るスピードが上がれば腕が何本に見える様になったとしてもだ。怖いよ。

「オオオオオオオ！！」

すると、”ヨトウン”は、突然殴るのを止めた。

「なんだ？ 知能が付いた分諦めが早くなったのか？」

だが、それは甘い考えだった。突然、地鉄の盾が何かに吸い寄せら

れる様に引つ張られた。そして、俺から完全に引き離されどこかへと飛んで行った。その先には黒い球体が浮かんでいた。って……。

「欲望”だと!”」

俺は、啞然としてその球体を見上げた。バカな！有り得ない！って、言うよりなんで”ヨトウン”がそんな能力を使うんだよ！

”欲望”その力は、ズバリ、相手の能力をコピーするモノである。しかもその方法は、あの球体に吸い込むだけと言うチートな力だ。と言う訳で、アイツは今から”超電磁砲”の力が使える訳なのである。アハハ……笑えねー。

「オオオオオオオオ！！！！！！！」

そして、”ヨトウン”は再び咆哮を上げると、空が消えた。その代わり見えるのは、大量の銃器。

「……ガンズウォール」

ガンズウォール。読んで字の如く、銃の壁が一斉に対象に向かい発砲すると言う荒技である。原作では、確かこれの100分の1位の規模で”ヨトウン”の頭を消し飛ばしてたっけ？

「……………」

しかも、”超電磁砲”の力を加算しているようで、銃口は皆青白い光を放っていた。単純計算にして”超電磁砲”×100000000位か。

アンナのをまともに食らったら、体すら消し飛ぶだろう。原型すら残るのか怪しい位だ。いや、無理だろうな。

「ホホホ・・・お困りのようですね」

絶望的な状態に浸っていると背後から聞きなれた声が聞こえてきた。ジジイである。

「うん。正直ピンチです」

「そうですか。それはそれは。流石のジイもあのクラスの巨人は骨が折れますぞ」

ジジイは、ホホホと笑うと巨人を見上げた。つつかアンタ、アレをどうにか出来るのか？

「無理ですな。被害ゼロと言うのは、不可能です。少なくともお嬢様が死んでしまうでしょう」

「そつだよな・・・まるで、被害さえ出せば、アレを倒せる様な言い方だけど・・・」

「ですが、アナタには、それが出来るのでは？」

「どうして、そう思うんだ？」

「勘で御座います。昔から言うでしょう？女と爺さんの勘は鋭いと。何か出来る事は御座いませんか？」

「その、とんちんかんな格言は放つとくとして、一つ頼みたいこと

「がある」

俺は、そう言うと、日野さんをジジイに渡した。ジジイは直ぐ様日野さんの脈を取ると安心した表情になった。

「生きておりおますな。この螺子は？」

「その螺子は絶対に外さないでくれよ。日野さんが死ぬかも知れないからな。日野さんを抱えて、出来るだけ遠くに逃げてくれ。良いか絶対に遠くだ。じゃないと即死するかも知れないからな」

「ほう。分かりました。では、ご武運を」

ジジイはそう言うと、明らかに人外のスピードで直ぐ様小学校から出て行った。本当にあの人は人間なのだろうか？・・・まあ良いか。今は、あの巨人が先決だ。

「さーて……チヨットばかり本気で行くから覚悟しろよ？」

どうやら、さっきの会話の時間でチャージが完了したらしく、空全体が、まるで朝の様に青く輝いていた。これだけの事が起こっているのに誰も来ないと言う事は、やはり結界の類が張つてあるのだらう。

「才才才才才才！……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

名付けるのなら、”超電磁砲包囲壁”と言った所だろう。まさに破壊の境地いや、消滅の形と言った所か。空が降って来る。そんな感じだ。

最早、触れた場所は破壊ではなく消滅してゆく。単純に力の破壊が

そこにあつた。・・・だが、俺の能力は自己保身の為にある力だ。

「墓穴を掘つたな。・・・学校が消滅してくれたおかげで、狙いが絞れたぜ。」

”大嘘憑き”に継ぐ俺の能力の中でも上位の力”不慮の事故”。実は、この力はまだ、コントロールが不十分だった。それ故、日野さんを近くに置いたまま発動すると、最悪の場合、日野さんは昨日の本棚の様に砕け散る可能性があつたのだ。まあ、それだけなら別に良かったのだが、今回日野さんは、夢の中で戦っていた。つまり本体が死ぬとどうなるのか分からなかったのだ。それ故戦闘中も日野さんを

”大嘘憑き”で消すことが出来なかった。どうやら、俺の力は、仲間がいると効果が半減する仕様らしい。

「だけどな、日野さんがいなくなった、おかげでやっと本気でやる。それにお前は、学校を消した。と言う事分かるか？」

光が俺に近づく。だが、これは俺の勝利の光だ。”不慮の事故”は対象を選べない。でも、対象が一つしか無かったら？簡単だ・・・。

「自分の力で消し飛べ！」不慮の事故輝めきバージョン”！！」

全てが終わった後には、その場には、一人の少年しか残らなかった。本当に。たった、一人しか。

そこにあつた建物は消え失せまるで、空き地の様な虚しさを醸しだしていた。

こうして、殺人鬼との戦いは、完全に終了した。

第22話 破壊と自己保身（後書き）

南：終わった・・・勝ったぞ!!!

星光：うるさいですね。・・・ですが、流石です。

南：・・・。サンキュー・・・。

雷刃：うわぁー入り辛い。

闇：・・・そうだな。・・・そういえば、この作品のヒロインって誰なんだ？

日野：私？

闇・雷：ナイナイ!!

日野：作者・・・？

作者：えー次回は、エピソードになります。

日野：作者？・・・

闇：不味い！ナギサを押さえ——（ドムッ）。

雷刃：闇イ!!

第22話 完全終焉（前書き）

夢夜の殺人鬼編

終了!!

「・・・」

そんな夢をプレゼントしてくれた張本人である余世は、大爆笑していた。

その後、日野さんの意識が戻りそれと同時に瀕死の余世が現れた。とは言え出現場所は、かなり遠くだったが。

恐るべきは日野さんの搜索網であつた。なんだろうね？個人衛星つて。

まあ、そんな事は別として、止めを刺すか迷っていた時に思いも寄らなかった、事を言われた。

『この子を助けてやって』

と、日野さんから頼まれたのだ。なんでも、余世はとんでもない人生を歩んできて、それ故に狂ってしまったそうなのだ。

『アンタにだって、分かるハズよね。その気持ちが・・・』

日野さんの目が何故か俺のことを同情的に見ていた。一体俺に何があつたと思っているのだろうか？

まあ、断る理由もなかったので、色々な条件を付ける事で、復活させた。

1・記憶の消去。

文字通り、記憶を書き変えたのである。とは言え、流石は転生者であるだけあり、完全消去は、不可能だった。

いくら”大嘘憑き”とは言え、色々工夫しなくては、ならなかったので、時間がかかってしまったのだ。

因みにコレ。完全に洗脳である。

2・能力の制限。

初めは、消してしまおうと思っていたのだが、やっぱり不可能だった。原理は分からないが恐らく”禍負荷”と同じだからだと思う。生まれつきの力は、完全には”無かった事”には出来なかった。

だが、何とか以前の10分1位には出来た。誰か褒めてほしい。

3・余世の面倒。

日野さんの調べによると、彼女の両親は既に……。

なので、日野家に引き取ってもらった事になった。

お幸せに。

等の理由により俺は、学校を1週間位休む事になってしまった訳である。皆勤賞が・・・まあ、良いか。

「・・・・・・・・」

「十二?一夜?」

今、余世は、俺の目の前にいる訳だ。偽りの記憶を持った、偽物の人生に俺はした……。果たしてこれで良かったのだろうか?時々・・・と言うよりここ毎日悩んだ。今の余世は、言わば1年前の俺と同じだ。目覚めたら・・・別人・・・。

「ゴメンな」

「??」

俺は、余世の頭に手を置いて言った。俺は、これからこの罪を背負って生きていくのだろう。こんな俺を見て”アイツ”はどう思うのだろうか?・・・下手したら、焼き殺されるかもな・・・でもまあ、一応は。

完全決着だよな。

第22話 完全終焉（後書き）

闇：ふう。何とか無事に終わったな。

作者：はい。何とか・・・。

雷刃：どうしたの？元氣ないじゃん？

作者：はあ、実は、リアルの方が大変な事になってて、しばらく更新を

ストップする事になりました・・・。

闇：・・・戻って来るんだろうな？

作者：はい！必ず！

日野：なんか、向こうは、大変そうね。

時田：そうだね。・・・所でさ、夢ちゃんの事なんだけど・・・
アレで良かったの？

日野：洗脳？・・・そうね・・・今は、これしか無かったから。でも、いつか。

南：夢！止め・・・

余世：アハハハハ！！

南：うわああ！

時田：・・・南くんも苦勞が増えるね。

日野：じゃ！また、会いましょう！

番外編 とある悪意のナイトメア（前）（前書き）

久しぶりに投下しますが・・・。
この話は、結構ダークです。

番外編 とある悪意のナイトメア（前）

「おや？珍しいですな。ジイの部屋に客が来るとは」

「ん？迷った？そうですか。では、出口までご案内いたしましょう」

「おや、その本は？」

「拾った？この部屋で？ホッホッホ・・・そうですか」

「では、お読みになるとよろしいですよ。なに・・・時間はたっぷりございます」

「え？なんの物語かって？」

「ホッホ・・・なに、とある“殺人者”にまつわる物語ですよ・・・」

「

夜の裏路地を女は、走っていた。

既に靴も脱げており、足の裏がボロボロになりながらも。

「はっはっは・・・嫌あ・・・」

夏の暑さも酷くなる8月の中盤。そんな中でも俺達警察は、休みもせずに働く。

ブルーシートに覆われたテントの中に入るとそこには無惨に殺された死体があった。

「うへー酷いですね。また、これですか？」

「今月で8件目か・・・」

新入りを押しのけ害者を観察する。

「まるで、デケエ犬にでも食い殺されたみたいな傷だな・・・」

「ですね。一応、保健所や役所に該当する犬を調べて貰ってますけど」

「それで、見つければ苦労はしねえよ」

俺は、ため息をつくとも鑑識に後を任せテントを出る。外に大勢いる野次馬を押しわけ車に乗った。そして、手帳を開く。その中には、これまでの被害者の名前が書き込まれている。

「・・・これで、69件目・・・どうなってやがるんだよ」

そもそも、この事件の起こりは、約1年前だった。

最初の被害者は、40代男性だった。死因は、出血死。大型の犬ら

しきものに噛まれた様な後があり、血塗れの状態で裏路地に倒れていた所を発見された。

警察は、何処かの犬が脱走し被害者を喰い殺したと言う方向で捜査を開始したのだが、それから僅か、2日後、今度は、20代女性が同じ状態で死体で発見された。

そして、その後もそれが続きこれを連続殺人と断定し捜査が開始された。

だが、1年経っても今だに犯人への手がかりすら掴めていないのが実状だが。

俺は、手帳を閉じると新入りに指示をだす。

「新入り。ここへいけ」

「へ？病院？先輩のご友人でもいらしゃるんですか？」

「そつえば、お前には、言ってなかったか？実はな、この事件にはな生き残りがいるんだよ」

「・・・生き残りですか？聞いたことがないですけど」

「だろうよ。生きている事が分ければ、犯人から狙われかねんならな」

俺は、ため息をついて懷から一枚の写真を取り出す。そこには、一組の家族が写っていた。

この事件の6件の事件の被害者である家族。

「余世一家の一人娘。夢ちゃんだ」

全ての事件の鍵は、彼女が握っているに違いない。
新入りに車を操作させながら俺は、窓の外を眺めた。

病院の受け付けで面会希望の書類を提出しコーヒーでも飲みながら
待つこと20分。

うんざりした顔の看護師が近付いてきた。

「加藤さん。また、貴方ですか？」

「はは、江頭さんは相変わらず綺麗なお肌で・・・」

「どうも・・・いい加減にして貰えますか？夢ちゃんは、ただでさえ精神的に厳しい状態になっているんですよ？もう、そっとしてあげてください」

「・・・私は、事件の真相を知りたいだけです。案内お願いします」

「・・・・・・」

まるで、汚物を見るように俺をもう一度見るが、残念ながら帰る気などさらさらない。

「・・・先輩・・・嫌われてますね・・・」

「うつせい」

エレベーターに乗り込み、江頭さんが8階のボタンを押す。上へと上がる起動音を聴きながら、売店で買ったお菓子の袋を見る。

「一応分かっているとは、思いますけど、夢ちゃんにお菓子を上げる事は出来ませんからね」

「ち、なら、江頭さんから渡して下さいよ」

そうこうしている内に、8階につき、フロアに出る。そして1つの個室の前に案内された。部屋の前のプレートを確認すると、”余世夢”との文字があった。

「・・・」

「邪魔するよ」

病室のベットの上に一人の女の子が座っていた。そして、こちらを睨みつけている。

「やあ、久しぶりだね。元気だった？覚えてるかな？」

夢ちゃんは、首を少し縦に振った。どうやら覚えてくれていたらしい。

「3日に1回は来れば、嫌でも覚えるわよ・・・」

今の江頭さんのセリフは、無視の方向で。

「えつとな・・・今日は、ちょっと話を聞きに来んだけど・・・いいよね？」

「・・・やってない・・・」

「ん？」

「アタシは、やってない！どうして、誰も信じてくれないのよ！」

突然夢ちゃんは叫びだした。俺達は、直ぐに部屋を出ることになった。

「アタシじゃない・・・アタシじゃないのよ！」

そんな、叫びが、俺の耳に残っていた。

あの日から、夢ちゃんの病室は、出入り禁止となった。聞いた話によると、再び状態がおかしくなったそうだ。

「畜生・・・いまの手掛かりは、あの子しかいねえんだぞ！」

あの日以来未だに犠牲者が増え続けているのだ。この1週間だけで

も、既に3人殺されていた。このままでは、犠牲者ばかりが増えてしまう。

「とにかく何か手掛かりでも掴まねえと……。何か……」

俺は、パソコンと向かい合い画像ファイルを開く。映し出されるのは、この事件の被害者達。全員無惨に引き裂かれこと切れている。

「……………」

つい目を逸したくなるような写真を食い入る様に見つめる。

これまでの被害者は、全員共通点など無かった。つまりこれは、無差別殺人の可能性が高い。犯人は、犬を使い被害者を追い回し、そして、犬に食い殺させる。今分かっている事はそれぐらいしかない。

「だとすると……犯人は、愉快犯なのか？……いや……だつたら……」

あそこまで、無惨に殺すのか？この事件の6件目の被害者である余世夫婦の死体は、無惨にも原型を止めていない程ズスタにされていた。夢ちゃんは、その中に埋まっている形で発見された。一体誰が彼女を埋めたのか、それは未だに分かっていない。

「そういえば、この事件は、他と違っていたな……」

他の事件は、外で行われていたが、この事件だけは、家の中で行われていた。

「ふむ……」

この事件には、何かとんでもない“悪意”が感じられる。

「とにかく、この事件の鍵は、確実に夢ちゃんにある。何とかしなくちな」

“悪意”に先を越される前に。その時俺の携帯電話が無機質に鳴った。

「ん？」

俺は、それを取る。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「それは、本当か？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

電話の相手は、ある事を言つとさつさと電話を切った。

警察署から病院までは、車で約1時間程かかる。俺は、クーラーをガンガンかけながら熱い夜の町に車を走らせる。

「流石にこの時間は、不味いかな・・・でも良いか」

そう独り言を言いながら車を走らせる。目指すべき病院を目指して。

番外編 とある悪意のナイトメア（前）（後書き）

闇 : 復活！

作者 : いや、まだ復活出来て無いから。

星光 : リアルが地獄ですもんね。

雷刃 : よく投下出来たね。

闇 : ウム久々に出番があつて嬉しいぞ！

南 : キヤラが、ぶれてる？

日野 : 所で、今回の番外編って、夢ちゃんの過去ってわけ？

作者 : あ、はい。余世夢の過去話ですね。

余世 : ？

南 : こっちの話。向こうで、遊ぶか？

星光 : 私も行きましょう。

余世 : うん！

日野 : 行つたわね・・・。

闇 : そうだな。今の夢に過去の話は分かんたろうからな。

雷刃 : 過去なんて・・・知らなくても良い事だらけだよ・・・。

闇・日 : 雷刃がシリアスだ！

作者 : そんな訳で次回もよろしくお願いします！

番外編 とある悪意のナイトメア（後）（前書き）

後編投下！

番外編 とある悪意のナイトメア（後）

「『世の中にはさ、2種類の人間しかいないんだとボクは、思うんだよ』」

そいつは、そう言う私の両親を踏みつけた。既にグチャグチャになっていた両親は、軽い水音しか出さなかったが。

「『さて、じゃ問題だ。キミは、どっち側かな？』」

「『ボクと同じかな？それとも違うのかな？』」

「『まあ、良いや。』」

「『答えは、今度聞くからさ』」

俺が、病院に到着すると、院内は、真っ赤に染まっていた。一体何があったなんて分かる訳もない。

「なんだ、こりゃ……。」

俺は、拳銃を抜き中に入る。既に入口の自動ドアは、開きはなしになっており、まるで化物の口の中に入っていく感覚がした。

「・・・・・・・・。」

2日に1回は、お世話になっている受け付けカウンターに進むとそこも真っ赤に染まっていた。そして、その近くには、何かの塊が転がっている。

「・・・・・・・・。」

俺の中の感覚がそれが何かを伝えた。

「死体か・・・」

殆ど人間としての原型を止めていなかったが、香る内臓の臭いと刑事としての感覚からそう判断した。被害者は、女性。死因は、何かに食い殺された用だ。

「ッ！・・・・・・・・・・夢ちゃん！」

俺は、急いで、エレベーターに向かうその間にも同じような死体が、転がっていた。間違いない。犯人が、ここに来ているんだ。エレベーターに到着しボタンを連打するが・・・。

「クソ！」

配線が切られているのか、全く反応しなかった。

「階段を・・・」

俺は、急いで非常用の階段を目指す。真っ赤な水溜まりを踏みながら非常階段の前にやって来ると少し笑いたくなる光景がそこには、

あった。

「グルグル・・・」

「ガア！」

テレビでしか見たことの無いような巨大な黒い犬が、何匹もそこにはいた。口からは、真っ赤な何かを滴らせ何かを貪っている。

「うつ！！！」

その何かを見て一気に吐き気がこみ上げて来た。

『また、アナタですか！いい加減にしてください！』

『全く最近の刑事さんは・・・』

そんな言葉を毎回かけて来た江頭さんは、物言わぬ肉塊に成り果てていた。彼女の近くでは、小さな肉塊が転がっていることから恐らく最後まで子供を守っていたのだろう。全く彼女らしい最期だ。

「畜生！くたばれ！！！！」

犬に向け5発の銃弾を浴びせる。

「キャン・・・」

「ガ・・・」

犬は、頭を碎かれ動かなくなった。俺は、死んでいる事を確認する

と新しく銃に弾を込め階段を駆け上がった。

結果的に言うところの犬は、まだまだいた。あの銃の音に感付いたのか集まってきた犬を8階に到着するまでに7匹も仕留めた。全く間に合わなかったらどうするんだ？

「待つてろよ。」

俺は、ゆっくりとした足取りで夢ちゃんの病室を目指す。拳銃の中の弾は、後1発しか無いからだ。

「ゲームじゃあるめえし・・・まったく・・・」

残念ながら、現実にはそこら辺の箱に弾は入っていない。

8階も真っ赤に染まっておりナースステーションや病室には、食い殺された亡骸が転がっていた。恐らく犯人は、この病院の配線を切り外部との連絡手段を断ち切り出入口を封鎖した後大量の犬を送り込んだのだろう。

「どんな手際のよさだよ」

外部に一切気付かれずそんな無茶苦茶な事が出来る。

「ん？」

そんな事を考えていると、夢ちゃんの病室の前にたどり着いた。俺

は、拳銃を構えゆつくりドアを開いた。

「ッ!!」

「夢ちゃん！良かった無事だった」

病室の中のベッドに隠れる様にしていた夢ちゃんを見つけた。俺は、安心するように声をかけようと近付く。

「大丈夫だよ・・・もう安心していい」

「駄目・・・来ちゃ駄目・・・」

しかし夢ちゃんは、何かに怯える様にそう言った。

「？」

そんな時だった。突然背中が熱が走ったのは。

「ガッ・・・何だ？」

身体に力が入らず、逆に抜けてゆく。そして、振り向くと・・・。

「まさか・・・お前が・・・」

犯人は、ニタリと笑うと言った。

「そうですよ“先輩”」

新入りは、そう言うつと更に銃弾を打ち込んだ。どうやらサイレンサ

笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い
笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い
笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い
笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い笑い
狂った様な笑い声が響く。

「と言う事は、これまでの事件も……。」

「さあ？これからエサになる動物に話すことなんてないですよ。」

新入りは、そう言つて何かを吹いた。すると周りにいた犬たちは、一斉に俺へと群がつて来た。

「う……うわあああ！！！」

肉を食い千ぎられる感覚を感じながら“俺”は死んだ。

きっかけは、とある占い師に出会ったことだった。

その占い師は、出会った瞬間俺を虜とした。

絶対的何かがそこには、あった。

「『好きな事をすれば良いよ。』
君は、人間なんだから、悪意に
逆らうなんて無理だよ。』」

人は人を殺す事をよく考えるが、実際に行くものは少ない。人を喰う事を考える事は少ないが、緊急時には、喰らう。そこに悪

子供は、アリを殺す。虫を殺す。そこに罪悪感など無い。只の興味だけがある。

大人は、害虫を殺す。動物を殺す。そこに罪悪感など無い。目的だけがある。

僕は、人を殺す。罪悪感なんて無い。あるのは満足感だけだ。

「そう・・・。」

「一応は、最初は、吐いたよ？同格だと思っていた同類を食わせたからね。でももう慣れた。所詮は死んだら只の肉でしか無いからね。その先輩みたいだね。」

未だに喰われている人間に目を向ける。相当旨いのか犬たちはまだ離れない。

「さて、無駄話もここまでにしようかな。一応僕は、逃げるからね。」

「逃げられるの・・・？」

「アハハ！！！逃げるさ。証拠は、残していないよ。一応は僕は用心深いからね。」

後は、ワンちゃんに夢ちゃんを食わせるだけだ。

「さて、フィナーレと行こうか？君を食べる為に死んでいった人達と仲良くな。」

「．．．ヒトじゃない．．．そうだね．．．ワタシは．．．アタシは．．．」

何か言っているが、僕は、彼女を食わせる為に犬笛を吹く。

「グルル・・・。」

「グルル・・・。」

その音に反応して、2匹の犬がやって来た。他の犬はまだ先輩を喰っている。全くしょうがない奴らだ。

「さあ、食べてもいいよ。」

「
「
グルガア！！！！
」
」

犬は、同時に飛び掛った。

僕に。

⌈
^
?
⌋

肉が食い千ぎられる。痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！

「アハハ・・・最高じゃない・・・復讐してやる・・・こんな人生にした。アイツを・・・幸せそうな奴らを・・・。」

と、ここで迷いが生まれた。果たして自分にこれから人を殺せる覚悟があるのか？

「このゲスは、殺されるべき相手だった・・・。」

果たして、私は、何も罪のない人を・・・。

「『へえー。』『キミって殺す相手を罪の重さで決めるんだ？』『」

「！！」

そんな時だった。そんな声が私の耳に届いてきた。

「『いやあー見てたけどさ、結構グロイ殺し方だね』『頭を噛み砕くなんてさ』『」

声の主は、大量の犬の中から現れた。

「なに・・・これ・・・」

その人物の体の肉は、削げ落ち骨が露出しており首は有り得ない方向へ曲がっていた。いや・・・皮一枚で繋がっていると言った方が正しい。

「『うん。』『人を食べる犬って美味しいね』『」

『答えは、今度聞くからさ』

「『あ、思い出した？久し振りだね。で、結局キミは、どっちなのかな？』 『ボクが思うにキミは・・・』」

「『うわああ！！！ “マッド・ブッチャー” “ダークネスハウンド”
！！！！』」

アタシの今持てる全ての悪夢をぶつけてやる！！

「『まだ、補習かな？』」

「『全く。酷いよね』 『行き成り襲い掛かってくるんだからさ』」

「『だからさ、今キミがそんなになっているのは、ボクのせいじゃ無いよ』」

「『だから・・・』 『ボクは、悪くない！』」

「『ボクは紙より弱いんだよ？』」

「『だと、思うのなら、少しは、自重して下さい』」

血塗の病院の談話室にて、2人の人物が話していた。両方ともまだ、10にも満たない子供だった。

「全く。今回は、長い遊びでしたね。殺人鬼まで作り上げて遊ぶなんて……」

「『アハハ』『良いじゃん』楽しかったしね」

「こちらは、大変でしたよ。あの男を見つけたり、刑事を分らない様に葬ったり」

「『情報を操作したり』『病院の監視カメラや警報システムを止めたり?』『流石の手際だと思ったよ』」

血塗の子供の笑いに無表情な子供は、ため息をつくと立ち上がった。

「さて、もう行きましようか?この町にアナタの望む“悪意”は、有りませんから」

「『そうだね』『行こうか!』」

血塗の子供は、嬉しそうに窓に駆け寄る。そして、そのままガラスへと走る。

「『アハハ!』」

ガラスが、砕ける音が辺りに響く。ここは8階である。

「……全く……アナタも厄介な方に目を付けられましたね?」

無表情の少女は、部屋の隅に転がっていた肉塊に声をかける。その肉塊は何かの音を発しながら少しずつ動いていた。

「全身を串刺しにされても回復する・・・私も悪夢を使いますが、アナタ程ではないですね・・・。」

少女は、肉塊にカーテンをかけた。

「余世さんでしたか？ “悪意” が有る限りまたお会い出来る機会があるでしょう。その時は、アナタの “悪意” がどの程度成長しているのか楽しみです。」

そして、少女も窓へと向かう・・・ハズもなく普通にドアから出て行く。

「“悪意” と “罪” は、無限に成長します。 “無かった事” には、なりませんよ？ どんな “転生者” の力でもね」

ゆっくりと音を立ててドアが閉められた。その音は、悪夢の少女の未来を閉ざす音のようだった。

「許さない・・・コロシテヤル・・・ミナナ・・・。」

アタシは、余世夢。只の殺人鬼。

これから、何人でもコロシテヤル・・・そして必ず“アイツ”に合う。

この事件より1年と少し後。殺人鬼は、他の転生者とぶつかり“自己”を書き換えられる事となる。それと同時にこの事件の真相は一時封印される。“悪意”この意味を理解するのは、いつの事になるのかそれは、誰も知らない。

「おや？もういいのですかな？」

「ホッホ・・・そうでございますか。では、出口は、そちらで御座います」

「ん？また、来ても良いかと？ホッホホ。私めも部屋に再び入って来れたらよいですよ。では、またいつか。」

番外編 とある悪意のナイトメア（後）（後書き）

闇 : また・・・厄介そうな者が出てきたな。

日野 : うん。なんか、怖いわ。

雷刃 : “悪意”・・・一体なんだろうね？それに夢ちゃんやられてたし。

作者 : 一応彼等も後から登場予定です。何時登場するのは、お楽しみ。

時田 : ...コレ・・・南くんに対処出来るのかな？

余世 : うわー早い！早い！

南 : そうか！じゃあスピードアップ！

余世 : ワーイ！

星光 : フフ。

全員 : （心配だ・・・。）

雷刃 : ま・・・まあ・・・そんな訳で、9月頃には再開すると思うからよろしくね！

どうでもいい話（前書き）

何とか復活できそうです。
どうぞ。

どうでもいい話

「クッククックク・・・遂に完成した・・・」

薄暗い部屋の中その人物は呟いた。

「苦節8年と6ヶ月・・・遂に！遂に！完成した！」

周りには多くの薬品が転がっており、怪しげな煙と異臭を放っていたが、この人物は、一切気にしない。

「これで、僕の長年の夢が現実になるわけだ・・・。本当に良かった」

人物は、何かに思いを馳せる様に上を見上げた。そして気付く。

「・・・ヤベ。」

薬品が上げていた煙に火災装置が反応し天上から豪雨の如くスプリンクラーが作動した。

「冷たっ！・・・おっと！」

人物が声を上げた瞬間、この研究所のセキュリティが作動し侵入者を知らせるブザーが鳴り響いた。

「しまった！こりゃあ逃げなきゃ！」

人物は、慌ててドアに向かうが、そこには、何時からいたのか、武

装したお兄さん方が沢山いた。まさに絶体絶命の大ピンチである。

「動くな！」

お兄さんの一人が手に持ったガトリングガンを構えながら言った。それに対し人物は、冷や汗を流していた。

「なんで、そんなもん持てるんだよ！人間か？本当に？」

お兄さん方が持っていたガトリングガンは、ゆうに30キロはつきり言って、武装ヘリに装着する物である。たまに映画などで、撃っているシーンもあるが、現実に出来る可能性は0だ。反動で脱球確定である。なので、人物の突っ込みは正しかったりする。

「掃射！」

「早っ！なんで！」

人物の言葉など、なんのその。数千発の弾が撃ち込まれる。

「止め！」

普通の人間なら、跡形もなく消し飛ばされるだろう。・・・しかし。

「危な・・・何すんのさ！」

人物は、無事だった。なぜかって？そりや・・・そう言う事だからさ。

「ふう。」

人物がそう言つて、息を付いたのは、あれから15分後の事だった。その後ろには、赤黒い何かが山を作っていた。

「分れよ？お前らが悪いんだぜ」

実際は不法侵入した、アナタが悪いが、そんな事は気にせず、人物は、立ち上がった。そして時計を見る。

「・・・ヤバ！早く帰らねえと“ロリタマ”の時間に間に合わない！」

そして、赤黒い山をみる。

「・・・仕方がないか。オプションサービスだ。」

そして、自分の武器をクルクル回し呪文を唱える。

「ぴるぴるぴるぴるぴー」

瞬間、研究所内は、光に包まれた。

とある研究所にて侵入者があつた。そこで戦闘が行われたが、死者数は、0だったそうだ。また、侵入者は、研究室にて、何かを作っていた形跡があつたが、それが何なのかは、不明であつた。

「さーてと、これをどこで試すか？」

人物は、薬品の入ったビンを見ながらカレンダーを見る。

「よし！決めた。ここでいいつか。」

カレンダーには、赤丸でとある文字が書き込まれていた。

「海鳴」と。

どうでもいい話（後書き）

闇：復活！・・・でいいのだろうか？

作者：恐らくは・・・。

南：えらく弱気だな・・・。

作者：色々ありまして・・・。とにかく何とか次の章のプロローグが投下できました！

星光：今回の敵（？）の能力って・・・前回と比べると分かりやすいですね。

雷刃：分かる人には、分かるね！まあ、とにかく頑張つて。

作者：はい。頑張ります！っと言っわけで、これからもよろしくお願ひします！

全員：よろしく！

第23話 銀色の襲来者（前書き）

新章開始！

第23話 銀色の襲来者

「部活に行くわよ!」

「は?」

朝の悪夢を振り払う為に惰眠を貪っていた所、放課後突然MS日野が、そんな事を言った。

「何言つての?俺は、部活になんて入ってねえぞ?」

「アンタねえ、随分前に先生が言っていた事忘れたの?」

先生が・・・?

「夜の課外授業?」

「・・・4年生になったら、一時的に部活に入らなくちゃいけない。って言ってたでしょうが」

ああ、そう言えば、そんな事も言ってたっけ?すっかり忘れてたわ。

「取り合えず、皆アンタが休みの間に部活を決めちゃったわよ?」

「……………誰の所為だ。」

「夢ちゃんよ!」

「少しは誤魔化せよ!」

駄目だ、この人は本当に駄目だ。きつと敵も多いぞ。

「と、言う訳でアンタは、本日より我が文芸部に所属よ!」

「はいはい・・・って!なんでもう決まってるんだよ!」

「部員は、今の所6人なのよね。」

駄目だ、もう話が先に進んでる。この人には、最早何を言っても無駄だろう。自信がある。チヨイマテ・・・

「・・・我が部?」

「ん?ああ、文芸部には、部員が一人もいなかったのよ。だから、私が乗っ取ったって訳」

学校側!何故早く潰さなかった!悪魔に乗っ取られてるぞ?日野さんに任せたらどうなるのか分かってるのか?
そう心で叫ぶが、言葉にする勇氣は無かった。

「よし、早速シュパーツ!」

ズルズルと引きずられながら、俺は考えた。早く辞める方法を。

日野さんに連れられてやって来る事約6分。場所は、学校の3階にある図書室の隣の小さな空き室。そこが、文芸部の部室だった。

何のための教室なのかと思っていたが、まさか部室だったとはな。

「まあ、とは言え今日来てるのは、一人なんだけどね。」

「一人？時田さんか？」

「うん、鈴音ちゃんは、先に帰ったわよ？」

「は？」

こいつは、前回の教訓を生かしていないのだろうか？

「なんでも、この間何かあったらしくてね。苛めていた主犯格2人が、鈴音ちゃんに土下座して許しを来いて来たのよ。それから嘘の様に周りの見る目が変わったわ。」

「……………」

ああ、あの時のバカップルか。どうやらあの時割り込んでいて正解だったみたいだ。……1組にはバレてねえだろうな？

「じゃあ、誰だ？こんな物好きな部活に入る命知らずは？」

「ほう……………」

「このような、素敵な部活動に入った、聡明な方はどのようなお人で御座いましょうか？」

すると、日野さんはニタリと不気味に笑った。

「フフフ……よくぞ聞いてくれたわね……………」

「部長。失礼しました。コレ安物ですが。」

俺は、売店のチョコレート（１０円）を渡し去りゆく。

「待ちなさい。この部活は、アンタの為でもあるのよ?。」

どう言う事だろうか？俺がそう聞く前に日野さんは、語り出した。

「夢ちゃんの事で、超能力者が、どれだけ孤独だったかが、分かった。あの子だって、友達さえいれば、ああはならなかったんじゃないかって。アンタも友達がいなくてしょう?だから、偽善と思われるても仕方が無いけど、せめて友達の一人や二人作って欲しいのよ。」

日野さんは、俺の目を真っ直ぐ見つめてきた。どうやら俺と余世の人生を似たようなものだと思っているらしい。

「えっと・・・。」

無茶苦茶違うが・・・気持ちにはチョット嬉しい。この１年間俺はずっと、「高町なのは」を避けるために目立たず、友達も作らなかった。お陰で、学校のグループ作りでは、いつも余る存在だ・・・もう１年経った・・・もう良いのではないか？友達を・・・仲間を作ったって・・・。

「日野さん。」

「なによ?。」

「ありがとう。」

「・・・うん。でも作れるのかはアンタ次第よ？安心しなさい。この中にいるのは、アンタが休みの間に入ってきた、転校生だから。ハンディは無いはずよ。」

「転校生？いたっけ？」

「アンタは、今日は寝てたからね。気付かなかったのよ。」

そうだったな。そう言えば、机が増えていた気がする。俺は、そう思うと気分一転。文芸部の部室のドアを開いた。

「失礼しマース！」

第一印象が大事だ。そう思い笑顔で入ったのだが、その瞬間全身がフリーズした。

部室には、一人の女の子がいた。

髪は、透き通る様な銀色。よく学校が許したものだ。

カワイイと言うより大人びている美人と言う部類だろう。

「やあ！リンちゃん、お待たせ！南、この子が転校生の”八神・リインフォース”ちゃん！1組の八神兄妹の親戚で・・・。」

最早、日野さんの言葉は、耳には入って来なかった。

「・・」
「・・・・・・・・」

お互い、どうやら何をするのか分かっているようだ。話が早い。

「南？どうしたの？あ、まさか！リンちゃんに見とれ——」

瞬間、無数の螺子と幾つものバリアのような壁が発生した。

こうして、俺は、あの時の原作キャラと再開を果たしたのだった。

第23話 銀色の襲来者（後書き）

闇 …… 原作キャラとエンカウトしたな。

南 …… そうだな。

日野：なんでアンタらそんなに暗いのよ？

南：日野さんにはわからんよ。

日野：？まあ良いわ。…所で作者？

作者：はい？

日野：なんで前回私が出なかったのかしら？

作者：忘れてました！テへ…（メキッ…）

闇 …… 作者！

日野：悪は、滅びたわね…次回もヨロシク！

第24話 魔導師登場！（前書き）

原作キャラ襲来！

第24話 魔導師登場！

「『やあ！キミがリンちゃんダネ！』　『ボクは、南一夜。って言うんだ。ヨロシクネ！』」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何やってんのよ！このバカが！！！」

「ガッツ！」

原作キャラ似の女の子を磔にして挨拶をしていたら、日野さんに殴られた。

でも仕方ないじゃないか！俺の体は、考えるより先に動くんだから。

「リンちゃん大丈夫？ああもう！どうして、こんなに深く刺すのよ！」

太い螺子が、身体に刺さっている時点で大丈夫じゃないと思うけど？・・・まあ、日野さんにツツコムだけ無駄か。

「日野さん。そいつに近付いちゃ駄目だ。色々問題になる」

「・・・アンタのこの行動が問題よ」

「ごもつともで。」

「とにかく、この部屋を元に戻して、リンちゃんを開放しなさい」

「へいへい・・・そいつは後回しなのか？」

「早く！」

やはり、この娘分らない。

「では、改めて。私は、八神リインフォースだ」

「俺は、南一夜だ」

「・・・なんで、南はともかく、リンちゃんまで普通に会話してんの・・・」

「ナギサから、部員の名を聞いた時から、こうなるのではないかと
は予想していたからな」

「成る程。だから、あの光の壁が出てきたのか」

「ああ。だが、無駄だった様だな」

「当然」

まあ、俺には”幻想殺し”があるしな。

取り合いず、元に戻した部室の椅子にかけて、置いてあつた菓子を
摘む。すると、日野さんが、言った。

「そうよ！それ！さっきも思ったけど、アレは何なの？もしかして

「アンタも超能力者？」

「あ・・・それは・・・」

原作キャラ。リインフォース。略してリンは、困った様な表情になった。どうやら、どう説明するか悩んでいるらしい。

アレか？一般人には、話せないとかか？・・・しゃあない。

「ソイツは、超能力者じゃないぞ。魔法使いと言う奴だ」

「正確には、魔導師だな」

良いのか？そこ補正しても？

「魔導師？なにそれ？」

「自分の固有のチカラを自分で使えるのが、”超能力者”」

「ならば、それを道具で補い強力なチカラを使うのが、”魔導師”
と言ったところだ」

どうやら、このリンと言う魔導師は、自分を追い込むのが好きなようだ。すると、日野さんが興味津々な目を向けてきた。
ヤバイ、下手に動けなくなった。

「へえー超能力者以外にもそんなのがいるのね。この世界は不思議
が一杯ね」

”超能力者”も”魔導師”もそんなもの扱いですか。流石です。日
野様。

「ところで、アンタらどういう関係？なんで、南が先制攻撃を加えてんの？」

随分軽口風だが、言葉の節々に色々と探る様な雰囲気を感じる。恐らく余世の事もあり日野さんなりに心配してくれているのだろう。有り難い。・・・しかし、どうしたものか。どういう関係？うん・・・別に特には・・・強いて言うなら、一度殺そうとしただけだな・・・。

初恋の子を殺されただけだし・・・ふむ。

「・・・・・・・・ゴメン・・・答えにくいなら別に良いわよ？」

いかん！ここで、言わなければ、恐らくあのジジイが動くだろう。となれば、不要な秘密まで日の目を見る気がする。

「あ！別にたいした関係じゃねえぞ？ただ、初恋だった子が、ソイツに殺されて、俺がソイツを餐肉にしかけただけだから！な！リン！」

「ああ、その通りだ。本当に大した関係ではない」

「イヤイヤ！なんかスゴイことさわりと言わなかった？殺された？餐肉？どう考えてもまともな関係とは思えないんですけど！」

うん。自分で言うのもなんだが・・・その通りです。

「・・・でもまあ、夢ちゃんの事もあるし・・・気にするだけ無駄ね」

本当にこの人の器は桁違いだ。ホレ見ろ、リンも啞然としていらしやる。

「でもまあ、仲良くな。これからは同じ部のメンバーなんだから。それに喧嘩しない！部屋がそのたびに壊れるなんて、冗談じゃないわ。良いわね？南！」

「ハイ！」

「良いわね？リンちゃん！」

「あ、ああ」

”超能力者” ”魔導師”。異端者2人をも黙らせ従わせる日野さんが、実は一番の異端なんじゃないかと思う今日この頃である。

「ほら、握手！握手！仲直りしなさい」

互いの手を取り、日野さんは強引に握らせる。俺は、どうしようか頭を悩ませる。このままだと原作キャラと同じ部活になっちまう。俺の回避生活は？この2年間は？・・・いや待て、まだ手はある。

「日野さん、俺やつぱり」

「はい！却下！じゃあ、この部の説明を始めるわよ？」

俺は、原作キャラ以上に厄介な人物に見つかった事を今更ながら後悔した。

第24話 魔導師登場！（後書き）

闇 ……おい作者。

作者 ……なんでしょう？

闇 ……原作キャラが普通に部活に入っているのだが……。
作者 ……。

闇 ……！消えた！相変わらず逃げ足だけは速い！

南 ……ん？何か落ちてるぞ。なにに？「実は最初から原作キャラを巻き込むつもりでした」？はい？

闇 ……あの塵芥が！原作回避は、どうした！

南 ……イヤイヤ。まだ、巻き込まれてねえから……。

闇 ……頑張れ。

南 ……何故そんなに優しい目をしてんだよ！

闇 ……では、次回も会おう！

南 ……おい！

番外編 学校に吹く幸福の風（前書き）

番外編始まります。

番外編 学校に吹く幸福の風

「ズリー私も学校に行きてえ！」

主はやてが、小学校に通う事が決まった日ヴィータが突然そんな事を言い出した。

「私も、はやてや翼兄ちゃんと同じ学校に行く！」

まあ、気持ちは分からなくもないが、それは無理だろう。

「ヴィータ。あまり翼達を困らせるな。我々はこれまで通り陰から主を守護していれば良いではないか。」

「ああ。そうだぞ。」

私にシグナムも賛同してくれてヴィータを諦めさせようとするが。

「それ、面白そうやな！」

「へ？」

主はやては、ポンと手を打って悪そうな顔をした。

「兄ちゃん。何とかならんかな？」

その問いに、主はやての兄であり私達の恩人の一人である八神翼は腕を組んで言う。

「うーん・・・寿也に頼めば何とかなるとはおもつけど・・・。」

「じゃあ、さそつく電話や！ヴィータ。受話器を持ってきて。」

「おう！」

眼をキラキラさせて、ヴィータは受話器を取りに行った。

「じゃあ、早速3人分用意せな。」

「主。1人分の間違いでは？」

「うん。3人分やで。ヴィータにシグナムにリーン。」

「はい？」

「シャマルとザフィーラは今まで通りでとして、皆で行こう！」

「しかし、ヴィータならともかく我々では、見た目かが問題なのでは？」

「フフフ・・・その点は寿也君に頼めば問題無い。ダメなら、兄ちゃんも居るし晴樹君も居る。」

「しかし・・・。」

「ああ、楽しみやな・・・学校。」

こうして、我々の説得は主に届く事無く消えて行った。

あれから、しばらく。私達は、主と同じ聖杯小学校へ通うことになった。体のプログラムを少々書き換え、主と年代の外見になる。これで大丈夫のはずだが・・・大丈夫だよな？

「ウガーなんで、はやて達と同じクラスじゃねえんだよ！」

私の隣では、調節の心配無用な騎士の一人がそう愚痴をこぼしていた。

「ヴィータ。仕方無い、主のクラスは、テストロッサや主の編入が決まっていたのだ。我々が入れる可能性は低かったのだ。」

「うう・・・でも・・・。」

「シグナムが同じクラスになったのだ、我々の目的は達成出来ると言うものだ。」

目的。それは、主はやてに何かあったとき、直ぐに駆けつけると言うものだ。私とシグナムは、これで無理矢理納得したものだ。そう、しみじみ思っていると、大人1人と子供1人が、やって来た。

「えっと、八神ヴィータさんと八神リインフォースさん？」

「はい。」

「俺は、2組の担任の甲田哲二だ。で、この子は、今日一緒にクラスに入る後藤君だ。」

「後藤聖一だ。気軽にゴツチャンとでも呼んでくれ。」

後藤は、そう言つと手を差出してきた。

「よろしく。」

「・・・・・・・・フフ・・・・・・・・。」

後藤は、何が可笑しいのか、小さく笑つた。

「じゃあ、教室に案内するから付いてきて。」

私達は、甲田先生の後を付いて行つた。

「「おおおおお！！」」

2組の隣の1組から大歓声が上がつていた。何があつたのだろうか？そう思いながら、先生の合図で教室に入る。

教室の中には約40名近くの人がいた。ここまで、多くに注目されたのは初めてなので、少々緊張する。

「えー前々から言つていたと思うが、今日からこのクラスの仲間になる。じゃあ、挨拶を。」

先生に促されるまま私は言う。

「えつと・・・八神リインフォースです。よろしくお願いします。」

こんな所だろうか？その後も同じような挨拶が続き、最後に先生が、

私達の偽造情報を口にする。主と私達が親戚と言つものである。しかし、そんな中、後藤と言つ少年は。

「僕は、後藤聖一と言います！好きなものは、幼女！！よろしくな！」

と我々以上に目立っていた。目が限りなく本気を物語っており皆ドンビキだった。

「え・・・個性豊かな子達だが、皆仲良くな。」

後藤と同格なのか？私達は。

「「はい！」」

主に私とヴィータに向けて、クラスの声が集まっていた。

噂には聴いていたが、転校生の質問攻めは厄介だった。ヴィータも随分苦労していた様で、昼休みは走って、主達との待ち合わせの場所である屋上へ行った。私も後を追うとすると。

「ちょっと、八神さんだっけ？良いかしら。」

突然知らない子供から話しかけられた。

「あ、ごめん。私は、日野渚。」

「あ、ああ。なんだ？」

しまった。主からは、もう少し子供の様に振舞えと言われていたのに……いつもの喋り方で話してしまった。

「えつと……何かな？」

「あ、良いわよ？素で喋っても。私は別に気にしてないし。」

「……そうか。」

「えつとね。大した要件じゃ無いんだけどね。先生が、八神さん達の入る部活の既望を聞いてきてくれて頼まれたからさ。」

部活？……ああ、そういえば、主も何か言っていたな。

「済まない。まだ、決めていないのだ。」

「そつか、まあ来たばかりだしね。色々クラスの人に聞くと良いわよ。因みに私は、文芸部。」

我々の入る部活は、主はやてと同じになると思うが、一応聞いておく。下手にあしらえば、主に余波が及ぶかも知れないからだ。

「今の所。部員は、私と時田さん。あと、南だけね。」

「へ？南？」

今、一瞬かつて、私の目を醒さしてくれた、超能力者の事を思い出した。

「南一夜。色々あつて、今は休んでるわ。来週くらいには、登校すると思うけど。知り合い？」

「あ……いや……。」

名前まで、同じ……偶然か？闇のカケラに恋をして、それを私によつて碎かれた。哀しい少年。そして、カケラの死後も願いを聞き届けた、律儀な者。……確かに歳は主達と同じ位だった。

「そいつは……。」

不思議な力を使うのか？とバカな事を聞こうとした時。

「文芸部！僕も入れてくれ！」

後藤が、割り込んできた。しかも、頭から。

「却下。」

瞬殺！？

「何故！」

「だってね……。」

「頼むつて、運動系の部活は全て断られたんだ！ただ、幼女が動いているのを見て愛でたいと言っただけなのに！」

世の中には、変態と言うカテゴリーがあると言うが、この男がその

見本なのだろう。ある意味初めて見た。

「アンタを入れたら、身の危険を感じるわ。」

「安心しろ。俺が好きなのは、汚れなき純粹な幼女だけだ。アンタや転校生その１の様な歳離れをした奴には興味がないから。」

何だろうか？今、一瞬イラつときた。

「・・・OK入れてやるわ・・・・・・・・。」

何だうか？今、猛烈に寒い。

「お！本当か！」

「・・・この一撃に耐えたらねえ！！！！！！！！」

日野の振り向き様の右ストレートとそれとほぼ同時に放たれた、キツクの一撃を受け後藤は・・・飛んだ。

「・・・・・・・・！？」

・・・何だ？今の違和感は何？

「イチチ・・・耐え切ったぜ？」

「チイ・・・OKようこそ文芸部へ。問題起こしたら、消すからね。」

「ああ。」

・・・気の・・・せいか？

「八神さん・・・あーもう！メンドイ！」

と、突然日野が、叫んだ。

「同じ苗字が5人って、面倒よ！今度から、リインフォース・・・長い。リンちゃんの良いかしら？」

「あ、ああ問題無い。」

主からもそう呼ばれるし・・・それにたまに『なんで、こんな長い名前にしたんやろ？』と言っていたからな。

「そう。じゃあ、リンちゃん。気が向いたら文芸部に来てね。」

「ああ。そうする。」

「ヴィータちゃんも連れてきてね？」

「黙りなさい。変出者。」

「ロリコンと呼んでほしい。」

「黙れ！」

明らかにオーバーキルなダメージを後藤に与え、日野は、死体を引きずってどこかへ行った。

「・・・文芸部・・・それに・・・南一夜か・・・。」

興味が無いと言えは嘘になる。・・・行つて見るか・・・文芸部へ
少なくとも、”南一夜”の真相を確かめるために。

こうして、闇の化身は、自らの意思で初めて動く。この先の事など
考えずに。ただ、一つの真相を確かめる為に。

番外編 学校に吹く幸福の風（後書き）

日野：と、言う訳でリンちゃんが文芸部へ入った話でした。

闇：・・・相変わらず、容赦がないな・・・。

日野：変態に情けは無用よ。

後藤：ロリコンと呼んでくれ！

闇：・・・確かにな。

日野：ね？・・・それじゃ！次回で！

第25話 人外集団（前書き）

部活始動！

「ったくよ・・・なんで、私がここにいなくちゃならねんだ」

私は、文芸部の部室にて、そう呟いた。

「前にも言った通り、主の所に行けば良かったのではないか？」

「テメエを一人にする訳にはいかねえだろうが」

全ての元凶である”元闇の書の管理人格リインフォース”がそう言ったので、私はそう返した。

「ハア・・・」

私の主である”八神はやて”とその兄貴”八神翼”。そして、その他の仲間たちは、別の部活にまとめて入っていた。私もはやてと同じ部活に入るつもりだったのだが、リインフォースがこの部活に興味を持ち入ってみたいと言い出したのだ。それが、問題だった。リインフォースは、私たち闇の騎士（現・蒼天の騎士）の中では、管理人格だっただけはある、トップクラスの知識を持つのだが、あくまで知識だけであり時々とんでもない事をやって退ける事があるのだ。そんな、奴を一人で歩かせるなど問題を起こして下さいと言っているようなものだ。誰かが、近くにいて、見張らなければならなかった。そして、それが出来るのは、まだ、部活の届けを出していなかった私だけ・・・そんな訳で、私はここにいる。

「フムフム・・・なるほどな・・・ウヒヒ・・・」

「スヤスヤ・・・ZZZ」

そして、今この部屋には、リインフォースの他にも2人いた。一人は、同じ日に転校してきた、後藤聖一と言う男だ。あの日以来クラスメイト全員から、真性の変態と言われる奴になっていた。幼女好き。幼稚園を覗いていたり、低学年の教室を覗きに行ったりして、私の知っているだけで、8回は、職員室に呼びされていた。そんな、後藤は、カバーの付いた本をニヤニヤして読んでいた。時々カバーの隙間から、”神体幼女”やら”18”やらの文字が見えていた。なんとなくコイツには近づかないようにしようと思心に決めた。

もう一人は、時田鈴音と言う女の子だ。基本的に寝ている事が多い奴だ。とは言え授業は、ちゃんと聞いている様で、質問されたら、答えると言う器用さも持っている。そんな、鈴音は、やっぱりスヤと寝息を立てていた。

「つつかよ、部長は、まだなのかよ」

「恐らく一夜を連れて来ているのだろう」

「お待たせ」

「ホラ来た」

すると、部室のドアから、この部の部長である、ナギサが、入っていた。・・・謎の肉塊を引きずって。

「遅かったな。ナギサ」

「いやーゴメンゴメン。コイツが駄々をこねてさ」

ナギサは、肉塊をベチャリと投げ捨てて言った。・・・コレ・・・人間か？

「フアア〜ん？あ、ナギサちゃん。おはよう」

とここで、鈴音が目を覚ました。

「いい匂いだね。お肉？」

「南よ。コンガリ焼いてみたの」

「へえ・・・」

なんだ？この風景は？これが、日常なのか？

「おい・・・リインフォー」

「さて、そろそろ始めよう」

リインフォーは、肉塊を椅子に乘せながら言った。その光景を後藤は、少し困惑気味に見ていた。

すると、ナギサは、頷いて言った。

「さあ、ようやく全員集まったわね。ようこそ文芸部へ。私が、部長の日野渚よ。そんじゃ、知らない奴もいると思うから、南から自己紹介宜しく！」

「人を気絶させた上に焼却炉に放り込んで置いてよくそんな口が聞けるな・・・」

「!!!!」

私は、その声が、聞こえた、方向に目を向けると、そこは、肉塊では無く一人の少年がいた。

「俺は、南一夜。ただの超能力者だ。よろしく」

南はそう言つと椅子に座つた。

「OK、じゃあ、次は、鈴音ちゃん!」

鈴音は、ゆつくりと立ち上がると

「時田鈴音です。只の未来が分かる未来人です。よろしくお願いします」

なんだ? 超能力者つて? 未来人つて? 名乗るのが流行つてんの?

「じゃあ、次は、リンちゃん!」

「ああ」

次は、リインフォースだ。皆からはリンと呼ばれている。私もそう呼ぶかな?

「八神リインフォースだ。私は、元管理人格をしていた時代がある。以上だ。よろしくな」

つて! おい! 良いのか? バラしても? 仮にも一応は、秘密事項なん

だぞ！

「・・・後藤は・・・良いとして」

「おい！無視するな！」

後藤は、勢い良く立ち上がり

「僕は、後藤聖一！好きなものは、美少女！な只の天使だ。よろしく！」

こいつの脳内を一度見てみたい。

「天使って・・・ウエー・・・」

止める。私も吐きそうだから。

「じゃあ、最後にヴィータちゃん！」

ついに、私の番が回って来た。えっと・・・。

「八神ヴィータ。えっと・・・只の・・・騎士です・・・」

こんなもんで良いのかな？すると、ナギサが、髪を撫でて来た。何だろう？

「ヴィータちゃん。無理しなくても良いのよ」

「？」

そして、落胆した様に言った。

「何？この人外集団は！」

それは、私が聞きたい。

第25話 人外集団（後書き）

南よ。コンガリ焼いてみたの。

闇：この言葉に恐怖しているのは我だけか？

日野：アハハゝもしかしてやりすぎた？

星光：明らかなオーバーキルです。

南：全くだ！危うくショック死寸前だったんだぞ！

闇：生き返るけどな・・・。

南：そこ・・・黙れ・・・。

時田：・・・でも、一つ分かった事があるよ。

星光：それは、なんです？

時田：南くんは焼いたらいい匂いがする。

全員：・・・。

日野：まあ。それが分かっただけで南を焼いたかいたわね。

南：あるか！

闇：では、また次回で！

第26話 復讐者（前書き）

シリアス突入？

第26話 復讐者

父が死んだ。その時一緒に母も死んだ。
許さない。俺達は、決して許さない。
”闇の書” 必ず復讐してやる。

「よし！今日の部活終了！！」

「ハイ。」

「アイ。」

個性豊かなメンバーを新たに加え、1週間も経った。そろそろ順応してきている自分が怖い。

「って、いかんいかん！相手は、原作キャラだ。」

原作キャラと仲良くなるなんて、死亡フラグ以外の何者でもないかな。

取り合えず今の所は、完全に無視している。もちろん全員にだが。原作知識が無い以上どいつが敵なのか分かったもんじゃない。

「なぎさお姉ちゃん！迎えに来たよ！」

と、そんな声が、聞こえたので顔を向けると、１メートルはあろうかという大きな黒犬にまたがった、余世がいた。

彼女は、殆ど毎日、日野さんを迎えに来ていた。最早完全にボディガードの様な存在とかがしていた。

これが、元”殺人鬼”の末路だと思つたと泣けてくる。因みにこの町には、コレと同等の犬がいるらしく人並に驚いたのは、後藤だけだった。

「あ、夢ちゃん待つて、じゃ！南。鍵よろしくね！」

日野さんは、そう言つと素早く荷物をまとめ、余世と学校を出て行った。

「じゃあ、私達も帰るか。一夜。鈴音。また、明日。」

「じゃあな！」

「さいなら。」

リン、ヴィータ、後藤は、そう言つと教室を後にした。

「アイツら・・・そんなに鍵を返すのが面倒臭いのか？」

「・・・職員室まで行くのが、面倒なんだと思うよ。」

「そうかい。じゃあ、いつもどおり下駄箱の前で待つて。」

「うん。」

時田さんは、そう言うつと荷物をまとめた。

何故俺が、こんな事を言っているかと言うと、女の子を送っていくのが、男の常識！と言う日野さんの発言によって、家の近い者同士が、一緒に家に帰る事になったのだ。なので、家が近い俺と時田さん。後藤と八神×2。が一緒に帰っている訳だ。例外は、日野さんのみだが。

「ハア・・・でもまあ、原作に関わるよりましか。」

俺はため息を吐くと、鍵を返しに職員室に向かった。

「オーイ！急いでくれ2人共。早く帰らなければ、ロリタマを見逃してしまう！」

「ああ。分かってる。」

「ヘイヘイ。」

明らかに焦っている後藤を先頭に私達は、帰路についていた。ナギサの提案から1週間経ち最早日常の一部と化している。傍から見れば仲の良い小学生の下校風景だろう。

「フフ・・・。」

「ん？何が可笑しんだ？」

「いや・・・何でも無い。」

こんな風景に紛れ込めるなんて、前の私は、考えもしなかった。”
闇”と言う鎖に囚われ自由を忘れていた。いや、そもそも自由など
知らなかった。・・・本当に私は、幸せモノだ。

『ウエエン』

そんな時だった。そんな泣き声が聴こえてきたのは。

「む？この声は・・・。」

「知り合いか？」

「小学校低学年。身長は、前から数えた方が早い女の子の・・・幼
女のものだ！！」

後藤が、吼えた。相変わらずの言葉に私もヴィータも引いていた。

「アハハ〜ドーコーカーナー？」

後藤。パーティを離脱。あの動き恐らくテストロッサ以上だ。

「ヤベエ！女の子が危ねえぞ！」

「ああ。奴の底が知れない以上放っておくわけにはいかん。」

我が部活から犯罪者を出す訳にはいかん。

「アイゼン！今すぐ奴を探せ！」

『ハイ。』

「待て！ヴィータ。こっちの方が早い。」

私は、主から頂いた、ケータイと言う通信機器（＊ナギサ・カスタム）を取り出しパスワードを入力する。すると、画面に後藤の現在位置が表示された。

「・・・なんだ？それ。」

「ああ、ナギサの所有する個人衛生からの映像だそうだ。何でも赤外線や未知の技術が使用されていて、たとえ家の中にいたとしても何をしているのかが分かるらしい。」

「・・・プライバシーって知ってる？」

「急ぐぞ！奴め、もうすぐターゲットと遭遇しそうだ。」

私は、そう言うのと走った。ヴィータもため息を吐きながら呟いていた。

「なんで、まともな奴がいねえんだ・・・。」

それは、私も同感だ。まさか、ヴォルケンリッターより特殊な人間がいるとはな。

「ハアハア・・・オジヨウチャン・・・ダイジヨウブ？」

「ウエ・・・ヒイイ!!!」

着いた時には、犯罪一步手前な発言をする後藤を発見した。明らかに狂気に満ちた目をした男に怯える女の子がそこにいた。

「テメエ! その子から離れやがれ!!」

「ぐぎゃああ!!!」

しかし、後藤はヴィータによるドロップキックを喰らいゴロゴロと転がっていった。

「クハハ!! ここで滅びようともロリは不滅なりいゝ!」

かなり見苦しかった。私は、後藤を放って置いて、ヴィータの所に向かった。

「おい。ヴィ・・・。」

「リフォース! 来るな!」

「は?・・・わ!」

ヴィータに突き飛ばされ、私は、地面に手を着いた。すると、世界が歪んだ。

「バカな! これは!」

「クソ!」

「ん？なんじゃこりゃ！」

空の色が紫色に変色し辺りに見えない壁が張り巡らされる。

”結界”である。文字通り世界を隔離するもう一つの世界。しかも、かなり強固な物だ。

そして、もう一つ。ヴィータと後藤を捕獲していた、光の輪。”バインド”つまり・・・これは。

「”魔導師”！」

「正解だ。闇の騎士！」

すると、何もない空間から2人の男女が出現した。

「何者だ。」

私が、言つと男は、地面に足をつき、先程の少女の頭に手を置いた。

「コウ。危険な事をさせてしまったな。」

「うん。それよりもあの人達なの？」

コウと言われた少女は、不思議そうにこちらを見ている。すると、女の方が言った。

「ええ。こいつらこそ、私達の仇。”闇の書”の元凶だよ。父さんと母さんの仇。」

「・・・仇・・・だと？」

・・・これは、まさか・・・。

「そうさ。俺等は、復讐をしに来たのさ。安心しろ。主”には興味は無い。俺が殺したいのは”本体”だけだ。」

私には、その言葉が日常の崩壊音に聞こえた。

第26話 復讐者（後書き）

雷刃：うわゝ想像以上だね・・・後藤。

星光：・・・そうですね。声だけで普通分かるものなのでしょうか？

日野：分かるんじゃないの？後藤だし・・・。

雷刃：どういう事？

日野：転校してきて1週間でアイツの事がよくわかったわ・・・。

星光：大変でしたね・・・。

闇：おい・・・お前達・・・。

星光：なんですか？“闇”？

闇：何故、最後に出てきた奴らの事はスルーしているのだ？

全員：・・・。

闇：いや、話題に上げろ！明らかに私達（闇の書）関連の被害者だろうが！

日野：コウちゃんが無事で良かったわ。

闇：それだけ！！！！

星・雷：では、次回で！

闇：おい！

第27話 ザンコク 無双（前書き）

久々に投下します！

第27話 ザンコク 無双

『あ、もしもし？鈴音ちゃん』

「え？渚ちゃん、どうしたの？」

『今、南と一緒にいる？』

「うん。ちょっと、スーパーで買い物してるよ。お一人様1本の醤油と卵が欲しいんだって。2人で行ったらお得でしょう？」

『うん。自分で言いだしといて何だけど、随分適応してきたわね。
・っ！それは良いんだった！』

「どうしたの？」

『実は、さっきからリンちゃん達の反応が消えたのよ』

「？」

『とにかく南と代わって！なんか、嫌な予感がするわ』

「主には、興味が無いだと？」

「ああ」

「どう言う事だ？」

「ストライクゾーンを逸脱したからじゃない？」

「デメエは、黙ってる！」

ガシガシと後藤を踏みつけるヴィータを背に私は、男に問いた。

「簡単だ。お前らの主も俺等と同じ被害者だからだよ。調べたぜ」
八神はやて”。随分と不幸な星の下に生まれたもんだ。親と死別し、お前らに目を付けられ、危うく死にかけた上に氷漬けにされかけた。これを不幸以外の何って言うのさ？」

コイツ・・・主の事や”闇の書事件”の裏側まで、知っているのか。それも、こんな短期間で。

「成る程な。詰まりお前達は、私とヴィータを殺しに来た訳か」

「理解したか？」

「まあな。なら、場所を変えないか？ここで、戦っても余計な被害を生むだけだぞ？」

私は、ヴィータによってグリグリと踏まれている後藤を見据えた。
一応奴は、無関係だ。

「いいや、そつちの変態にも話がある」

「僕に？」

「目撃者の処理方法についてだ」

「・・・6時までには終わる？」

「終わるか！テメエは空気を読め！」

「ロリは、僕の嫁！」

再び激しい打撃音が辺りを包んだ。アレは別に手を下さなくても勝手に殺されるだろう。

しかし、本当に殺させる訳にはいかない。こうなったら・・・。

「おっと、”念話”は、この中じゃ使えないわよ？因みに”携帯”もね」

「仲間を呼ばれる訳には行かないからな」

やはり、先手を打たれていたか。

「・・・やるしかないか」

私は、臨戦体制に入る為に魔力を貯めるが・・・。

「は？・・・魔力が拡散してゆくだと！」

貯めた魔力がまるで、ストローに吸われる様に拡散してゆく。これでは、空すら飛べない。

「アッハッハッハーバーカ！ランクSに近いアンタ達相手に何も対策を立ててこないとも思ったの？残念ね。この結界内では、アン

「タ達力だけ無効になるのよ」

「何だと！何だその力は、聞いた事がないぞ！」

特定の人物のみに特化した結界ならば知っているが、特定の団体に特化した結界など聞いた事がない。
私の知らない未知の技術なのか？

「さてな、一体どんな原理なのか俺達も知らない。これは、情報を売ってくれた奴がくれた術式だからな。インスタントだが」

「インスタント？・・・そんな技術がか？」

「さて、無駄話もここまでだ。これで、お前達は只の子供も同じだ。安心しろ罠り殺しは、しない」

「時間をかけずに一気にコロシテヤル・・・」

2人から、凄まじい殺気が迸った。私は、思わず後ずさる。そして、何とかならないかと辺りを見渡す。

「クソ！」

ヴィータは、何とか”バインド”から脱出しようともがいていた。

「持ってて良かった、テレビ電話」

後藤は、携帯電話で、テレビを見ていた。

打開策は、無い・・・・・・って！

「アンタ！なんで、携帯なんて使ってるのよ！」

私のツツコミの前に女が突っ込んできた。そう。今コイツは思いっきりテレビを見ていた。”念話”も通信も通じないこの場所で。しかも”バインド”を外した状態でだ。

「は？ちよつと、静かにしてくれ！今、ロリタマの神OPなんだから！」

「何だと？」

「ちいーさくたつてーだーいじょうぶーニャーニャーーふんふんふんふん」

「コイツ・・・ナメやがつて！」

巫山戯た歌を熱唱している後藤に女は、切れたらしく、自分のデイベイスを構えた。

「おい！ラン！待て！」

男は、止めるが、女は止まらない。

「くたばれ！」

「ふーんふふふーんふーふふふふふふふふふんーヘイ！」

瞬間。赤い血飛沫が、辺りに散らばった。そして、首の無い死体が、重い音を立てて、地面に激突した。

「ラン！」

「ぴるぴるぴるぴるぴる」

男の悲鳴と後藤の妙な擬音が重なった。後藤は、女の頭の中身が、へばりついた、釘バットを降ると、男に向けた。

「分かれよ？悪いのは、お前だ」

気のせいか、その言葉にうすら寒いものを感じた。

『・・・それって、どう言う事？』

「そのまんまな意味だよ。もし俺の予感が正しければ・・・むしろ危ないのは、リン達を襲った方だ」

『それにしても・・・本当にいるの？・・・天使って』

「アイツが、そう言ったからな。とにかく・・・天使の怒りを買うと厄介だ。”皆”危ない」

第27話 ザンコク 無双（後書き）

星光：一夜。貴方は、いつから後藤が本物だって、気がついていたんですか？

南：いや・・・いつからと言われてもな・・・強いて言うなら、初めて合った時から・・・。

星光：はあ。

雷刃：そう言えば、リンも何か変な感じがした。って言ってたしね。
闇：ふむ。さて、後藤は敵か？味方か？どちらなのだろうな・・・。

雷刃：そうだね。（章タイトル参照？）

星光：では、今回は、この辺で。

第28話 残酷な天使（前書き）

ロリコン始動。

投下。

第28話 残酷な天使

「分かれよ？悪いのは、お前だ」

「ラン！」

男は、ランと呼んだ女の死体に向かって来る。後藤は、それに向かい釘バットをフルスイングした。

「危ねえ！」

ヴィータは、叫ぶと男はそれに気付き間一髪で難を逃れた。

「ヴィーたん。邪魔しないでよ」

「ヴィーたん言うな！いや、それよかテメエ今何しようとした？」

「ん？排除だけど？あと、八つ当たり」

後藤は、そう言うとニツコリと笑った。私は、先程と同じ寒気に襲われた。

「お姉ちゃん！」

すると、コウと呼ばれていた少女が姉に近づいてきた。後藤はニタリと笑う。

「どうぞ」

そして、あっさりと少女を通した。少女は、姉にすがりつき泣き始めた。

「お姉ちゃん！！」

しかし、頭の粉碎された姉は、何も言わなかった。当然だ死人は何も出来ない。

「ああ、やっぱり小さい女の子は心がキレイで素晴らしい！こんな汚れた世界の住人とは思えない！！」

後藤は、そう言う少女に抱きついた。

「キヤア！」

突然の事に私達は、何も反応出来なかった。しかし、兄は違った。

「コウから離れる！この変態が！」

「チツチ・・・ロリコンと呼んでくれ」

次の瞬間、男の身体に何かが巻き付いた。それは、有刺鉄線に見えた。そして、その先は、後藤の手の中。

「よっせと・・・」

まるで、軽い運動をするように有刺鉄線を引き寄せる後藤。そして、それに引き寄せられる男。

「な・・・・・・・・やめ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もう！恥ずかしがり屋さん！」

そして、凄まじい回転をする釘バット。

「ゴブ・・・ア”ア”ア”！！！！！！」

男の悲鳴が結界内をこだました。そして、肉を掻き乱す音も響渡る。グチャグチャ・・・ネチャネチャ・・・。思わず私もヴィータも顔を背けた。それだけ直視出来るものでは無かったのだ。

「いや・・・嫌！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「アハハハハ！！！！」

少女の悲鳴を嘲笑うかの様に未だにバットを掻き回す後藤に

「後藤！もうやめろ！」

「そうだ。もうやめてくれ。見るにたえない！」

「アハハハハ！！！！エイ♪」

「ゴバツ・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は、それだけ声を上げると動かなくなった。・・・つまり・・・

「お兄ちゃん？・・・お兄ちゃん！！」

コウと呼ばれていた少女が、兄に駆け寄り体を揺する。だが、兄は

動かない。

死んだのだ。誰が見ても完全に死んでいた。

「後藤・・・テムエ!!!!!!!!!!」

ヴィータが、怒りの声を上げる。そして、自分を拘束していた”バインド”が術者の死と共に解かれた。

「オラア！」

「わ！何すんの？」

ヴィータが後藤に殴りかかるが、後藤はそれをヒョイと避ける。

「なんで、殺した！殺す必要があったのかよ！」

「えゝ？だって、アイツら僕達を殺そうとしてたんだよ？正当防衛だと思う」

確かに後藤の言っている事は一見正しい。もしかしたら、今頃全員死んでいたのかもしれない・・・だが。

「だからって、こんな残酷に殺すのは酷過ぎる・・・」

過去。私達が”闇の書”と呼ばれていた、時代でも、このような殺し方は滅多になかった。

それに、殺せば多少の罪悪感があったが、この男は、まるで当たり前のように感情なく殺して退けたのだ。

子どもが虫を殺すように・・・ただ、無邪気に・・・。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんを返して!!」

ただ一人残された少女が後藤をポカポカと殴るが後藤は、それを楽しそうに見ていた。

「返してあげたら何かしてくれる？」

「なんでもする・・・何でもするから!!!!」

「本当?・・・ウヒヒ・・・」

もし私の電話が繋がったら即座に通報していた事だろう。・・・だが、返すなんて、出来る訳がない。二人は完全に死んでいるのだ。

しかし、後藤は、ニタリと笑うと持っていた、バッドを手の中でクルクルと回転させ・・・

「びるびるびるびるびるびる」

と、摩訶不思議な呪文を唱えた。

「!!!!」

突然だった。砕けた骨が、飛び散った肉が、元の持ち主の元に戻って行く。まるで時間を巻き戻している様に。

その光景を私も他の二人も啞然として見つめていた。何なんだ・・・これは。

「少なくとも・・・魔力は、使っていない・・・」

「じゃ・・・何だよ・・・翼兄ちゃんだって、こんなの魔力無しじ

「や無理だぞ」

確かに・・・この力は、どちらかと言えば、一夜に近いのかも知れない。

「う・・・え？」

「・・・なんで・・・？」

そう考えている内に死んだ二人は生き返って来ていた。そして、一通り辺りを見た後、後藤を見て後ずさった。

「なんなんだよ！お前は！」

男が、自分の妹達を抱き寄せて後藤に言った。その瞳には最早怯えしか見えなかった。

それに対し後藤は、相変わらずの笑顔で言う。

「俺は、後藤聖一。只の天使だよ」

これは、とある天使の夢のある物語の始まり。

第28話 残酷な天使（後書き）

闇：死者を生き返らせる力か・・・恐ろしいな。

星光：珍しくシリ阿斯ですね。

闇：何だ？その我が普段は何も考えていないと言った言葉は？

雷刃：アハハ・・・。

闇：？

星光：それにしてもやはり後藤は・・・変態でしたね。余計な能力を持っている分厄介そうですね。

雷刃：そうだね。でも魔力が使えない場所でどうやって行きかえらせたのかな？普通いるよね？

闇：そのへんは恐らく・・・後藤の能力の出典に関係している。

雷刃：またメタな発言を・・・。

星光：では、この辺で・・・（それにしても一夜は、いつまでもに出てくるのでしょうか？）

闇：ウム！

第29話 永遠の少女を求める天使（前書き）

後藤のターンは続く。
投下！

第29話 永遠の少女を求める天使

「南は、まだなの!」

『ごめん・・・道が分からなくなちゃって・・・』

「・・・今、何が見える?」

『えっと・・・翠屋って店が・・・』

「逆方向じゃ無いの!ああ!もう!」

『・・・え?ねえ、今どこにいるの?南くんが、もし消えた地点にいるなら、夢ちゃんだったらどうにかなるって言ってるんだけど?』

「夢ちゃん?」

「?」

誰も逃げられない結界の中に三人の兄妹と一人の変態がいた。

「さあ、お兄ちゃん達を生き返らせてあげたよ・・・言う事を聞いてくれるね?」

「コウに近付くんじゃねえ!」

「お前には、聞いてねえよ」

「なっ！」

男の身体に再び有刺鉄線が巻き付いていた。後藤は、それを興味なさそうに無視し目当ての少女に迫る。

「っ！」

が、ここで、少女の姉が、立ちふさがる。一度自分の頭蓋を砕いた相手に恐怖しながら妹を守るために立ちふさがる。

「邪魔・・・」

後藤は、持っていた刺バットを振り上げ再び顔面を抉る為に振り下ろす。・・・が。

「止めやがれ！」

「ゴバッ！」

それは、ヴィータの飛び蹴りにより阻止された。後藤は見事な曲線を描きながら文字通り吹き飛ばされた。

「リنفォース！」

「ああ。分かっている。”バインド”」

未だにピクピクと痙攣している後藤を光の輪っかで拘束した。いくら、魔力が拡散すると言ってもこれだけ時間があれば、この位は出

来る。

「取り合えずこれを解いて貰おうか。お前達もこのままじゃただ殺されるだけだぞ！」

「そうだ！早く解きやがれ！」

奴を抑えられるのは、もう1分もない。魔力も拡散のお陰でな。だが

「・・・出来ない。この結界は、後2時間はしないと外には出られない使用になっているからな」

「は？」

「・・・アンタ達を確実に殺る為よ。・・・まさか、墓穴を掘る事になるなんて」

「「んな！バカな！！！」」

じゃあ、私達は、後1時間以上もここにいないではならない訳なのか？しかも・・・。

「あーやつと外れたか」

見ると”バインド”を引き千切る後藤がいた。・・・千切る？

”バインド” 相手を拘束する為の強固な限定的結界。
人間の腕力で何とか出来る可能性は、 0

普通は、碎けるが正解。

なのに・・・千切る？一体どんな事をすれば、そんな事になるんだ？

「ヴィータ！とにかく奴からその娘を守れ！」

「おう！なんか、最初の目的と大きくズレたけど分かった！」

ヴィータはそう言うと、後藤の持っていたバッドに手をかけたそして・・・

「あれ？」

「どうした？」

「何だ・・・コレ・・・重い」

ヴィータは両手で刺バッドを持つが、バッドは、少しも浮かなかった。ヴィータは、体は小さくても立派の騎士である。しかも、デИБイスである”グラーフ・アイゼン”はそれなりの重さがあるのだ。そんな、ヴィータが持てない・・・？

「当然だ。・・・”エスカリボルグ”の重量はおよそ2t。常人が持ち上げられる代物じゃねえよ」

ユラリユラリと後藤は、ヴィータに近付いてきた。

「チツ・・・」

ヴィータは舌打ちすると、一旦後藤から距離をとり最近ザフィーラに習っている空手拳の構えを取った。

「後藤・・・お前その子をどうするつもりだ？」

「ん？愛でるだけだけど？愛でて愛でて愛でる！！それだけが、僕の幸せだ。・・・そう・・・この世界は、腐ってる。皆が綺麗な心を持っていれば、争いは、起こらない」

「・・・」

「・・・だが、大人は駄目だ・・・もう手遅れなんだ。心も身体も汚れてる。だから、僕はロリを愛す！愛でる！そして、見守る。世界が、幼女だけになるその日まで！！」

後藤は、まるで、子供の様にだが、明確な意思を持って、そう言った。それに私は、寒気を覚えた。気味が悪い訳ではない。その思いが、純粹だと分かるのだ。まるで・・・かつての”闇の書”の主達の様に歪んだ願いを感じる。

「ヴィーたん。この世の中変だとは思わないか？」

「変？・・・後、ヴィーたん言うな！」

「人は、どうせ死ぬんだ。なのにさ・・・人は、成長するにつれて、欲を持って行くんだ」

「それが、人つてもんだろっ」

「・・・確かに・・・でも」

後藤は、有刺鉄線に縛られている男の方に向かう。そして、何かの瓶を取り出した。

「・・・命が無限で、成長しなければ・・・欲なんて、生まれるのかな？」

そして、それを男の体に掛けた。

「う・・・うわああ！！！！」

瞬間男の体から煙が上がった。なんだ！

「あ”あ”あ”あ”・・・」

煙の中のシウルエツトがどんどん変形して行く。全体が縮んでゆき、声が、どんどん高くなってゆく。

「こ、これは・・・」

「嘘・・・だろう？」

煙が、完全に晴れた時そこには男はいなかった。その代わり小さな女の子がブカブカの男物の服を着て目をパチクリさせていた。

「え・・・なんだ？これは・・・」

「お兄ちゃん？・・・が、小っちゃくなっちゃった・・・」

困惑する一同をよそに後藤は高笑いを始めた。

「フハハハ！！成功だ！」

「何をした！」

”元”男が、服で体を隠しながら後藤につかる。

「分らないのか？これこそ全人類の夢！浴びるだけで、美幼女になる夢の薬！どんな、オッサンでもこれさえ浴びれば8歳の幼女になれる！そのプロトタイプさ。」

「プ、プロトタイプ？」

どう言う意味なのだろうか。それ以前にそんな薬があった時点で驚きだが。

「本物は、永遠の命を授ける。つまり不老不死になるのだ」

「『『『『『ハイ？』『』『』『』』』』」

不老不死？それは、なんと言うロストロギアだ？

「世界は、幼女だけになる。世界は、救われる・・・まさに、ヘブン」

後藤は、”エスカリボルグ”を拾うとクルクルと構えた。

「本当なら、もう少ししてから、始める計画だったんだが・・・まあいいか。それじゃあ、皆様・・・」

瞬間私達の体が、何かに拘束された。これは・・・濡れタオル？

「さいならー幼女の世界で再び会いましょう」

なんだ？このタオル・・・どんどん締まって・・・くっ・・・なんか、気持ち良くなってきた・・・。

その間にも後藤は、“エスカリボルグ”を構えてやって来る。全員ここで始末する気らしい。・・・不味い！

「おじゃましまーす！」

そんな時だった。とても場違いな声が、聞こえたのは。

「その声は、夢か？」

「うん！・・・何してるの？」

「話は、後だ。後藤を止めてくれ！」

とそこまで言った所で私は気付いた。何言っているんだ？夢は・・・一体何なんだ？ナギサをよく迎えに来る子。私が、知っているのは、それだけだ。

「OK！なんか、分らないけど良いよ！」ワンワン”！」

夢が、そう言つと獯猛な獣の唸り声が辺りから聞こえてきた。何だ？

「上手く入れたみたいね」

『そうか、流石”無効”の力だな』

「前、そんな力使ってたっけ？夢ちゃん」

『・・・恐らく使う以前にボロボロにされたからだと思うぞ？』

「う・・・。アハハ・・・ワスレロ」

『ハイ』

「とにかく、早く来なさい」

『はいはい』

第29話 永遠の少女を求める天使（後書き）

闇：・・・色々混ざってないか？

作者：まあ、そのへんは作中で突っ込んでもらいましょう。

星光：それにしても、後藤の執念は凄いですね。

雷刃：だね。永遠の幼女って・・・アレ？

闇：どうした？

雷刃：アハハゝなんでもないよ？ともかく次回は、夢ちゃんが活躍しそうだね！

星光：ええ。天使VS殺人鬼ってところでしょっか。

闇：どっちが勝ってもおかしくないな。

雷刃：まあそうだね。所で主人公は？

全員：・・・

星光：そ、それでは、次回で・・・。

第30話 ”元”殺人鬼 VS 撲殺天使（前書き）

前章ボス

VS

今回のボス

激突！

第30話 ”元”殺人鬼 VS 撲殺天使

「ねえ。南くん」

「ん？何」

「夢ちゃんって、超能力って、どの位使えるの？」

「んー・・・以前の1/4位かな。”墓地”の力を封殺した分、自分の有利な領域は作成出来ないからな」

「・・・大丈夫かな・・・一人で入らせちゃって・・・」

「まあ、・・・相手によるな。”ヨトウン”を召喚出来なくなった分、”ダークネスハウンド”今は、”ワンワン”だったか？そいつが、4匹は出て来るからな。並の相手には、大丈夫だろう。・・・少し急ぐか」

「”ワンワン”！後藤ちゃんを取り押さえて！」

「ゴチャンと呼んでくれ」

4匹の黒犬が後藤に襲いかかるが、後藤は、それをバッドで打ち落として行く。

だが、黒犬は、恐るべき俊敏さでバッドをかわし更に襲いかかる。

「ムー早く捕まってよ！手加減つて、難しいんだよ！」

「く！幼女に本気が出せないなんて！」

どうやら、2人共今だ本気ではないらしい。異常な光景だった。普段見知っているハズの2人が、突然人外のような戦いを繰り広げるしかも、魔力が使えない結界内 ведь。

「な、何なんだよ・・・こいつらは・・・」

”元”男が、妹達を抱き寄せながら呟く。が、しかしその姿では、むしろ抱き付いているように見える。

「・・・分らない。・・・まさか、”一夜”の言っていた”超能力者”なのかもしれない」

「”超能力者”？ちよつと待て！」一夜”が言つてたつて・・・南もあんなのが使えるのか！」

「ああ。自己紹介を覚えているか？一応あれば、皆正直に話していた」

「・・・何だよ！！その人外集団は！じゃあ、何か？」超能力者”や”未来人”、果ては”天使”つか？それに加えて”プログラム騎士”と”管理人格”まともな奴が1人もいねえじゃねえか！」

「・・・いや、ナギサは、人間だ。頭が上がらないが・・・」

「ティマー！？」

・・・だが、言われて見れば、まともな人間が1人もいない部活の様な気がする。

「ねえ、お兄ちゃん。”超能力者”って、何？」

「・・・分らない。でも、少なくともマトモな連中じゃないだろうな」

いいえ、只の小学校の部活動です。そう心の中で呟いていると、どうやら何らかの動きがあつた様だ。

「うむむゝやるね・・・後藤ちゃん」

最後の黒犬の頭が砕かれ、夢は後藤にそう言った。それに後藤は、笑顔で答える。

「ふ・・・ロリを愛する者に不可能など皆無！」

「よく分からないけどすごい！」

「アハハ！そうだろうそうだろう！」

「ねえ、ロリって何？」

「コウは、まだ知らなくて良いよ」

「あの変態野郎が・・・来るなら来い！」

「その頭叩き潰してやる！」

「・・・なぜ、ヴィータは、敵と馴染んでいるんだ？」

となんだか、場が混沌として来た。

「で、結局夢ちゃんは何なんだ？俺は、”天使” 2つ名を付けるとすれば、”撲殺天使聖一くん” って、所か」

なんだ？”撲殺天使” って・・・。それに対し夢は笑顔で答える。

「えつとね・・・私は、”超能力者” かな？渚お姉ちゃんの”ばでいがーど” にして”元” 殺人鬼だって。一夜によると”夢夜の殺人鬼” って、言ってたよ」

「・・・”元” 殺人鬼だと・・・」

「どう言う事だよそれは」

突然の夢のカミングアウトに騒然とする私とヴィータ。しかし後藤は、軽く笑う。

「成る程な。道理で血の匂いがよくしていた訳だ・・・」

「匂うかな？私？」

「血塗れ少女・・・だが、良し！」

「？・・・まあ、良いや。じゃあ、”悪夢” を見せてあげるね！」

「？」

その時、辺りに獣の唸り声が聞こえてきた。

「なんなんだ・・・アレは」

ヴィータの視線の先を見て見ると・・・そこには確かに悪夢があった。

「黒犬が・・・起き上がった・・・だと？」

頭や胴体を砕かれたハズの黒犬が、いつの間にか復活していた。そして、その目には後藤への憎しみが湧き出していた。後藤は、それを見て苦笑いを浮かべる。

「えーと・・・何？その能力？」

「エヘヘ」ワンワン” ♪ 殺っちゃえ♪」

最早、どちらが悪役か分らない感じた。

「うりゃ！」

「ガウ！」

同時に飛びかかった黒犬をバッドで、一気に殲滅するが、ここからが悪夢の様な状態になった。

「無駄だよ？」

黒犬は、まるで粘土のようになったかと思うと一気に再生していた。

その時間1秒もかかっていない。”闇の書”の”再生プログラム”と良い勝負だ。

「行け行け行けー！！」

「クッ・・・厄介な能力だぜ。だが・・・弱点見つけた！”攻性有刺鉄線大葉刈之列”！」

先程、男を捕らえた有刺鉄線が現れ夢に襲いかかる。その数は空を覆い尽くす程の量だ。

「ふえ？」

空を見上げる夢は、ポカーンとしている。そして、その全ての有刺鉄線で、後藤は黒犬を捕らえていた。そして・・・

「夢ちゃんの弱点は、本体が無防備って所だ！」

「わ！バレちゃった！」

バッドを構え夢に向かい突撃する後藤。そして、焦った様に慌てる。

「覚悟！」

後藤のバッドが、夢の頭部を砕く為振り上げられる。・・・だが。

「なーんちゃって♪”放火魔”！」

夢の掌から灼熱の炎が噴き出した。

「のわ！」

炎が後藤の体を包み込む。

「オアチャー！！」

「アハハ〜！」

ゴロゴロと地面を転がる後藤を笑う夢。

「・・・なあ、一体私達は、何と戦ってたんだっけ？」

ヴィータの言葉が心に響く。しかし私も状況に着いて行けないのだ。

「さて、もう終わりにしようか？」

「ああ、こっちも本気で行くか」

夢と後藤は、そう言うとお互いに距離をとった。

「行くよ！」 呪われた双剣”！」

「受け立つ！」 エスカリボルグ”！」

そして、2人は激突する。”元”殺人鬼 VS ”天使” の対決征したの。

「アリ？」

自分の腕が飛んでいくのを夢は、見ていた。そして倒れる。

”天使”だった。

「恐らく夢は、負けるな。アイツが”殺人鬼”のままだったら能力的にも負ける要素は無かったが・・・」

「生け捕り？」

「ああ。手を抜く恐れがある」

「それって・・・」

「不味いな。嫌な予感しかしねえ・・・」

「あ！渚ちゃん！」

「遅いわよ！早く行って！」

「了解！」

第30話 ”元”殺人鬼 VS 撲殺天使（後書き）

闇 ：夢が・・・負けだだと！

雷刃：そうだね。流石に力が4分の1はきついよね。

作者：実を言うと、夢の能力は、文芸部の中では、ぶっち切りの1位なんですよ。本来なら能力制限で敗北するような娘では、ありません。

星光：まあ・・・あの負けフラグを立てましたからね・・・。

闇 ：星光・・・なんか嬉しそうだな・・・。

星光：何の事でしょう？

雷刃：南くんが、やっと参戦するからだよね！

星光：さて？

闇&mp;作：（果たして、そんなに上手くいくものかな？）

星光：では、次回で。

第31話 海鳴市民総ロリ計画（前書き）

主人公

VS

変態紳士

開戦！

第31話 海鳴市民総ロリ計画

「夢！リン！ヴィータ！バカ！無事か！」

”幻想殺し”により結界を砕き侵入すると、そこには、片腕を無くした夢が倒れていた。

「・・・遅かったか・・・」

「夢ちゃん！」

「・・・酷い・・・酷いよ・・・」

夢へ駆け寄り抱き上げる日野さんと時田さんを横目で見ながら俺は、後藤を見据える。

「後藤・・・お前」

「・・・結界が砕けた。つまりお前も何かの能力者か」

「見たところ、お前は”撲殺天使”って所か・・・これまたマイナ
ーな能力を・・・」

「何を言う！最新の力にして最強だろうが！」

”撲殺天使”が最新？何を言っているんだろうか？確かアレは、2000年代のアニメだったはず。

「・・・まあ良いか。どちらにしろ、僕の計画の邪魔はさせねえ」

「計画だと？」

「ああ、海鳴市民総ロリ計画のな！」

「な！海鳴市民総ロリ計画だと！……って何それ？」

意味が分らない。ロリ？……ん？”撲殺天使”……”サクラクン”……ロリコン……12歳……あ！！

「まさか！アレか！ロリコン薬！まさか存在したのか？」

「ああ。僕の知識と力があれば完成は容易いよ。僕は、それを改良して、12歳から8歳で年齢を固定する事に成功した！更に男に使うと美少女にしてしまう効果も付属させた！」

「ちょい待て！それって作品が違う！」

「フハハハ！ロリコンに不可能など無し！」

「クツ……確かに……」

作品すら超えた信念……まさに不可能を可能にしやがった。

「何感心してんの！どうでも良いから、早く後藤を捕まえて！」

「了解……って言いたい所だけど……」

俺は、後藤を見ながら一歩後ろへ下がった。

後藤の能力は”撲殺天使ドクロちゃん”の力だ。一説では、最強説

のあるハチャメチャな能力である。

何せ、元がキャグ小説なのだ。俺の知る限り”灼眼のシャナ”に出てくる能力といい勝負なのだ。

「クツ・・・」

なので、下手に動くわけにはいかない。何より戦ったとしても勝てる保障など無いのだ。

俺の力は”超電磁砲”を除きほぼ自己保身の力だ。つまり戦闘スタイルはカウンタータイプとなる。つまりは・・・相手が動かない事には、こちらも下手には動けないのだ。そんな理由で、戦闘に置いては、力が激減した夢の方が上と言う事になる。・・・かつて、

「落ち着け。こんな奴、現実じゃ敵じゃない」

と言ったが、そんな考えは、夢の力を調整する際に本当にバカだったと思いらされた。って、言うより勝った日野さんは、本当に化物だと思う・・・。

まあ、そんな訳で、お互い手を抜いていたとは言え夢を下した後藤には最大クラスの警戒をしておかなければならないのだ。

「・・・そもそもロリを愛する者とは、世界を敵に回す覚悟を持ったモノでありその際の覚悟は——」

こんな、アホな事を熱弁しているバカに最大クラスの警戒をしなくてはならないのだ。

「この世界の歴史を振り返れば人類は皆ロリコンだったと言う事が

」

「・・・」

我慢だ、俺……まずは、様子を見て……。

「さあ！ 恥ずかしがる事などない！ 共に叫ぼう！ ロリコンは世界を変える！ チェンジザロリ！ ハイルーロリ！ 幼女最高！」

「ウザイ!!!!!!!!!!!!!!」わあ!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!」

超電磁砲” 発射。我慢出来なかった。かっとなつてつい……

「うぎゃあああ！！！」

悲鳴が、辺りに轟く。殺ったか？爆散した場所に地鉄の剣を作成して駆け寄るとそこに人影は無かった。

「なんだと！」

「残念でした」

「ッ！！」

振り向くとそこには、笑顔の後藤がいた。バカな！

「枷操白昼夢 エルクスナウト …… てな訳で無駄だけど分かるかな？」

「枷操白昼夢 エルクスナウト だと！」

「撲殺天使ドクロちゃん」に登場するアイテムの一つ「枷操白昼夢」

エルクスナウト”は、確かミラーボール型で”微睡弄御 ヒルドスレイフ”の姉妹品。いわゆる洗脳アイテムだ。”微睡弄御 ヒルドスレイフ”が一人を完全に操れる代物なら”枷操白昼夢 エルクスナウト”は、大勢の人間を広く浅い催眠にかけ操るアイテムだ。・・・しまった！先手を打たれてたか。

「つまり今ここにいる全員が見ているお前は・・・」

「ご名答！偽物です」

その瞬間、俺の後頭部にとんでもない衝撃が走った。その直後何か脳のようなものが見えたかと思うと意識がとんだ。

「アハハ！！俺の勝ちだ！」

「南！！！」

ヴィータの悲鳴が響く。

「早く立ちなさい！」

日野さんの罵声が響く。この人本当に鬼だ。

「ヘイヘイ」

”大嘘憑き”により早めに復活を果たした俺は、直ぐ様後藤の位置を割り出した。

「オラ！」

「ぐべ！」

どうやら、洗脳アイテムは、一度死ぬと解除されるらしい。その証拠に皆見当違いの方向を見ていた。

「ほら！お前ら目を覚ませ！」

”大嘘憑き”を発動し”枷操白昼夢 エルクスナウト”の効果を”無かった”事にする。すると皆の目が覚めた。
何故分かるかって？皆の目がキラキラしていたからさ！

「なんで、後ろに？」

「洗脳アイテムだ。皆離れてろ！」

俺は、再び地鉄の剣を創作して後藤に向ける。

「生き返った・・・？何の能力だ・・・。それに・・・本体を破壊しないで、目覚めさせるなんて・・・ふむ」

「御託は良い！お前の絡繰りがわれた以上もう勝ち目はないぞ？」

確かに”撲殺天使”の能力は強力だが、所詮はアイテムの力が大きいのだ。本体に関しては”アレ”を使わせなければ大丈夫だろう。なら、やる事は一つだ、”アレ”を使わせる前に夢を再生して一気に潰す。・・・いや、夢を再生させた時点で勝負ありだ。

「勝ち目が無いね。どうかな？」

「なんだと？」

だが、後藤は、余裕の表情で笑う。・・・何だ？一体何を隠している。

「まさか・・・これを使うはめになるとはな・・・。まあ、偉大な功績には犠牲が付きものだからな」

そう言うと、ポケットの中から何か小さな箱を取り出した。まさか！”ルルネルグ”か！それとも”アルターボリア”か？色が違うが、どちらも厄介なアイテムだ。得に”アルターボリア”は、”アレ”の発動条件だ。

「させるか！」

俺は、後藤に向かい突貫する。普段なら有り得ないが、この場合は別だ。だが、後藤は箱の中から何かを取り出した。取り出したのは、何かの液体だった。なんだ？アレは？

「ほい」

そして、後藤はそれを俺に向かいかけてきた。

「アレは・・・南！かわせ！」

「へ？」

ヴィータのそんな言葉が俺の聞く最後の言葉になった。

第31話 海鳴市民総ロリ計画（後書き）

作者：と、言う訳で、主人公のスキルの一つ。“肝心な時は絶対に勝てない”が炸裂しました。

闇：・・・作者・・・キサマ主人公の定義を言ってみろ。

作者：面白ければなんでもいい！某編集長も言ってた！

雷刃：おかげで、戦力が激減したよね！いいの？それで！

作者：大丈夫でしょう。ほら、他にも転生者がいますし。

雷刃：“自己防衛”の主人公はどうなるのさ！完全に別物になるよ！

作者：えー次回から、魔法少女リリカルなのは“夢を紡ぐ者”をご期待下さい！

闇：タイトルまで、変わってるぞ！・・・って“星光”？

星光：なんででしょう？“スファイアー”

作者：ギヤアア！！！！！！！！

星光：まあ、一夜の力不足が原因なんですから“バスター！”仕方無いですね。

作者：・・・ガク・・・。

星光：集え明星“それでは、次回・・・会えたら会いましょう？”

闇・雷：ま、またね！！

雷刃：止めるよ！闇！

闇：ああ！

第32話 いっちゃんです！（前書き）

第3の能力者

投下！

第32話 いっちゃんです！

あの後、後藤は直ぐに何処かへと逃げて行った。一応直ぐにヴィー
タちゃんを追いかけたけど、結局見つからなかった。

私は、直ぐにジイに連絡し海鳴全域に監視網を張り巡らせた。これ
で、ネズミ一匹逃げる事が出来ない。

「・・・そう。まだ見つからないのね。」

『ええ。申し訳ありません。』

「いいわ。ジイの捜査能力は知ってるし・・・とにかく捜索を続け
て。」

『かしこまりました。』

電話を切りため息をついて皆の待っている24階へと向かう。

あの後皆（不審者3名も）を一旦私の家に保護する事にしたのだ。
一体”超能力者”や”魔導師”にどの程度意味があるのか分らない
けど、普通の家にいるよりは安全だろう。

「お待たせ。あの変態まだ、見つからないわ。」

「そうか・・・。」

リンちゃんが、少し残念そうに言った。

「でも、心配無いと思うわよ？南でもない限りたとえ”天使”だろ
うが、なんだろうが、絶対に発見されずに町を出る事なんて出来な

いわ。」

いや、たとえ南だったとしても、ジイのいる限り逃げられないわ。
・ ・ ・ 一体ジイってなんなのかしら？

「・ ・ ・ なあ、リン。やつぱり、この事を翼兄ちゃん達に報告した方がよくねえか？」

「・ ・ ・ いや、それは、無理だろう。考えてもみる、確かに被害の大きさでは、“闇の書”と良い勝負だろうが、今回は“ロリコン薬”なんだぞ？まともに取り合ってもらえるのか・ ・ ・ 。」

「“闇の書事件”は、あの変態の野望と同格なのかよ・ ・ ・ 。」

「それに、今回は我々の部活動の仲間の問題だ。下手に協力を上げば・ ・ ・ 。」

「・ ・ ・ 。」

何か、リンちゃんとヴィータちゃんがシリアスな雰囲気になっていた。なんだろうか？“闇の書”って？“ロリコン薬”と同格って事は・ ・ ・ エロ本？・ ・ ・ まあ、良いか。そんな事より今は、変態対策を練らなくちゃ。

「ヴィータちゃん。その“翼兄ちゃん”に相談するとして、その人達に何とか出来ると思うの？・ ・ ・ 南の能力は説明したわよね？その南ですら・ ・ ・ あんな事になったのよ？」

「うう・ ・ ・ 。」

ヴィータちゃんが、唸ると同時に鈴音ちゃんその他のメンバーが部屋へとやって来た。

「鈴音ちゃん。夢ちゃんの状態はどう？」

「うん。”治癒”の能力で何とかかなりそうだって。・・・でも、しばらくは動けないかも・・・。」

「そう・・・。」

南から聞いていた情報があつて、本当に良かったと思う。夢ちゃんの力の一つには、”治癒”の力があり人体の欠損位ならパーツさえあれば2〜3日で全快するそうだ。南曰く自分より何でも出来る能力らしい。

「大幅な戦力ダウンね。・・・南だって・・・。」

私は、窓際で外を見て目をキラキラさせている5歳位の女の子を見た。

「わー凄いよ！見て見て！さっきの部屋より高いよ！キレイだよ。」

そう言う女の子は、コウちゃんの手を引いてテーブルの上のお菓子を摘んで何処かへと走っていった。

「ああだし・・・ね。」

アレが、後藤によって薬をかけられた南の末路である。記憶が完全にとんでしまい、ここに来るまでとても不安な表情で泣きじゃくっ

ていた。

今は、リンちゃんやコウちゃん、鈴音ちゃんのおかげで落ち着き、元気に走り回っている。因みに何故か私には近づかない。

「大嘘憑き”があるから、直ぐに元に戻るって思ってたんだけどね……。変態の執念を甘く見てたわ。」

「無かった事”にする力が、働かなくなった以上下手に”男”を出せば、あなる可能性も高い。だからこそ”翼”達には、知らせない方が良い。」

「特別製とか言ってたしね。シュウちゃんがかけられた試作品とは別物みたいだけど。」

「シュウちゃんじゃない。・・・確かに俺は人格を保ったままだったが……。」

リンちゃん曰く”元”男のシュウちゃんが麦茶をコップに注ぎながらため息をついた。まあ、南と違って人格が残っている分、色々と辛い所もあるのだろう。

「まあ、殺されなかっただけマシだと思うがな。」

「1回位死んだらしいけどね。」

ランさんが、適当にお菓子を摘んで話す。聞いた話では、この2人は一度、後藤に殺されたらしい。そして、何らかの手段で生き返えらされた。

考えて見れば随分恐ろしい事だが・・・なんか、そう感じなくなりつつある自分が怖い。

「とにかく、後藤を見つけなくちゃね。下手をすれば、一週間後には、この町は、不老不死の少女だらけの町になるわよ。」

「・・・でもよ、どうやって、見つけるんだよ？一応操作網を張ってるんだろう？」

「・・・だな。手がかりが無い以上は、こちらからは・・・。」

文芸部2人は、不安そうな顔をしているが、実は問題は無かったりするのだ。

「フッフッフ・・・誰か忘れているようね。我が部の超能力者は、南だけじゃないのよ？」

「は？どういう事？」

「・・・」未来人”か・・・そういえば、鈴音がいたな。」

「？」

リンちゃんは、気付き、ヴィータちゃんは、未だに？マークを浮かべている。他の2人は、鈴音ちゃんを見ていた。

「・・・わ、私？」

「鈴音ちゃん。悪いけど今すぐ寝てくれないかしら？最早、この現場を打破出来るのは、鈴音ちゃんの”未来予知”しか無いのよ。”超能力者”も”殺人鬼”も行動不能になっている以上頼れるのは”未来人”だけ。お願い！あのバカが起こす事件は、絶対に大きな事

件になるわ」

「で、でも、必ず予知出来る訳じゃ……。」

鈴音ちゃんが、不安そうな顔になる。当然だ行き成り最後の希望にされたのだ、私だつて不安になる。

「あ、ナギサおばちゃんが鈴音お姉ちゃんをいじめてる!」

「だ、駄目だよ! いっちゃん! ナギサさんにそんな事言ったら。」

と、ここでチビ達が戻ってきた。……おばちゃんね……この南が……。

「鈴音ちゃん……お願いね。じゃないと……私この子を……八つ裂きにするかもしれない。」

「まで、ナギサ! 一夜の首を締めるな!」

は! いつの間にか、首を締めてたわ。習慣つて怖いわ。

「フエエン〜リンお姉ちゃん〜怖かったよ〜痛かったよお〜。」

南が、リンちゃんに抱きついて泣いていた。絶対に普段では有り得ない光景だ。

「よしよし……怖かったな。良いか? ナギサは絶対に怒らせてはいけないぞ?」

「うん……。いっちゃん気をつける……。」

「よし、良い子だ。」

「エヘヘ……。」

親子がお前ら……。そんな様子を皆が呆れて見ていた。

「ハア……。鈴音ちゃん。南を八つ裂きにしたいから早く予知してね。」

「……。うん。なんか……。私も身の危険を感じるから頑張るね。」

鈴音ちゃんは、何かに怯えるように部屋をさって行った。

これで、恐らく大丈夫のはず。後は……。戦力確認ね。

第32話 いっちゃんです！（後書き）

雷刃：いやあ、相談しようよ？リンちゃん！

闇：だが、間違つては、いないな。転生者にも有効と分かった以
上下手には動けまい。

雷刃：まあ、そうだろうけどさ・・・正直、今のメンバーで後藤に
勝てるのかな？

闇：ティマーがいるだろう。

雷刃：いや・・・そうなの？作者？

作者：・・・・・・・・・・・・・・・・

雷刃：あ、星光に消されたんだった。再生中か。

闇：それにしても、久々に鈴音の活躍がみれそうだな。

雷刃：そうだね。“超能力者”に“殺人鬼”、“人外”の中じゃ霞
むよね・・・。

闇：そして、南は、最強の敵を作ったな。

雷刃：・・・そうだね。次の章のタイトルが“VS日野篇”になら
ない事を祈るよ。

闇：だな・・・。

雷刃：じゃあ、次回で！

第33話 結成！対天使同盟（前書き）

とーきーおーこえー

投下

第33話 結成！対天使同盟

現状の戦力確認の為に自分がどの位の強さを紙に書いてもらった
所こんな結果になった。

ヴィータちゃん。

A Aランク

リンちゃん。

Sランク

シュウちゃん。

(元) Aランク

ランさん。

Aランク

コウちゃん。

不明

南。

戦闘不可

夢ちゃん。

治療中

鈴音ちゃん。

戦闘不可

との結果になった。・・・ランクってなに？

「つまり、このランクって言うのは魔導師の魔力量や強さを表すところ？」

「ああ。・・・だが、このランクも”天使”や”超能力者”相手では、気休め程度の意味しかないがな」

リンちゃんは、ため息をつき、紙を見ていた。

「お前ら、結構強いんだな」

「・・・努力を重ねて来たからな。・・・殺す為に」

「・・・・・・・・」

場にピリピリとした空気が流れる。

ヴィータちゃんとリンちゃんは、気まずそうに視線を逸らし、シュウちゃん達は、そんな2人を睨みつけている。

「大体！おま——」

「はい！ストップ！」

シュウちゃんがまた何かを言い出す前に私は、大声を上げて黙らせた。

「アンタ達。今の状況を理解してんの？」

「それは・・・」

「良い？今、この町は、いや、全ての人は後藤によって、未曾有の危機に晒されようとしてんのよ？それに、シュウちゃんだって、このままだったら、一生女の子のままなのよ？」

「・・・」

「それに、何とか出来たかも知れない南も夢ちゃんもリタイアしちゃったし、今、まともにあの変態に対応出来るのは、私達だけなのよ。もつと言うのなら、変態と戦う事の出来るのは、アンタ達だけつまり、私達は運命協団体みたいなものになってるの！今、仲間割れを起こしてどうするの？」

それに、聞いた話では、後藤を倒すのは、1人では、無理の様だ。更に、南の言い方じゃ、後藤は、まだ何らかの奥の手を隠し持っている可能性が高い。けして、個人戦で勝てる相手では、無いだろう。

「はつきり言つて、私には、アンタ達の関係なんて分からないわ。いいえ、知った事じゃないって言った方が良いわね。だって、私はアンタ達を全く知らないし、リンちゃん達の昔なんて分らない。私の今、分かる事は、このままだと、この町が小さな女の子しかいなくなってしまう事だけなんだから」

無茶苦茶かも知れないけど、今は、過去の因縁よりロリコンの野望の方が優先されるべきなのだ。・・・自分で言っ泣けてくるけど・・・。

ともかく、今は、ケンカしている場合じゃない。

「お願い。だから協力して？この町をロリコンの魔の手から守って！」

私は、深々と頭を下げた。悔しいけど、今の私には、夢ちゃんの時とは違って何の力も無い。只の女の子だ。色々と偉そうな事を言っているけれど、所詮はまだ、小学4年生なのだ。だから、こうやってお願いする他ない。すると、以外な方向から、返事が返された。

「ねえ、協力しょ？」

いつちゃんの手を引いたコウちゃんだった。

「コウ？」

「あのね。・・・ナギサさんの言う事は正しいと思うの。私、昔からお兄ちゃん達の事がちょっと怖かったの。お父さんとお母さんの仇って、言って、鬼みたいな表情で、訓練している姿が。」

「それは！」

「でも、それは、仕方がない事だもんね。・・・でもね、今は、ちょっと状況が違ふと思うの。今、あの人を止めないと、きっと私達と同じくらい不幸になる人が出てくる。そんな気がするんだ。」

コウちゃんの言葉にその場が静まりかえった。そして、シュウちゃんは、無言でリンちゃんに手を差し出した。

「え？」

「……。」

困惑するリンちゃんにシュウちゃんは、言う。

「……確かに、ナギサやコウの言う通りだ。……今だけ……
今だけ、過去の怨みや仇を忘れてやる。……だから、お前等も協
力しろ」

その言葉にリンちゃんは無言で手を取り握った。

「頼む！あの”ロリコン天使”を共に倒そう」

こうして、対天使同盟は誕生した。

1時間後。

主な対策を説明している時、鈴音ちゃんが部屋に入ってきた。

「渚ちゃん！分かったよ！」

鈴音ちゃんは開口一番にそう言うと、一枚の画用紙を机に置いた。
そこには、後藤と対峙する赤い女の子の絵があった。

「場所は、水が多い所で、時間は……。」

鈴音ちゃんは、していた腕時計を見た。鈴音ちゃんの力は夢を目的

前で見える事が出来る。その為身につけていたものと夢の中に入る
ので、時計を持参していれば、時間も確認出来る訳である。
因みにこの方法は、夢ちゃんの時も使用したそうだ。

「・・・時間は、今日の朝3時。」

「3時ね・・・」

時計を見ると、時刻は午前1時であった。つまり後2時間しか無い
事になる。

「・・・とにかく、探さなくちゃね。水の多くて暗い場所を」

「ああ、恐らく後藤は、そこに”ロリコン薬”をまくつもりなのだ
ろうな」

「でもさ、どうやって、町中にばらまくの？水に混ぜた位じゃごく
1部の地域位でしか影響が無いんじゃないの？」

そうだ、あいつは、海鳴をロリの町にする。とか言っていた。1日
で行うとは、言えないが、存在がバレている以上急ぐはずだ。
つまり、まくとすれば、最も効果的な場所・・・そう、たった、1
日で・・・全ての市民に効果を及ぼす事の出来る場所。

「お空から降って来るの？」

そんな時、いつちゃんがそんな事を言った。・・・空から降る？・・・
待てよ？

「ねえ、いつちゃん？」

「なに？」

「天使って、知ってる？」

「うん！　いつちゃん知ってるよ！　あのね．．．天使って――
――」

こうして、いつちゃんの口から恐るべき”天使”の力が語られた。
もしこれが本当だとするのなら．．．。

後藤は、”天使”にして”自然災害”の様なものと言つ事になる。

第33話 結成！対天使同盟（後書き）

闇：遂に結成されたな！対天使同盟が。

雷刃：そうだね。

闇：やはり、敵だった者同士が協力をする。うむ・・・燃えるな。

雷刃：そうだね。

闇：しかし、敵は、天使。そう簡単には、勝てまい。

雷刃：そうだね。

闇：が、しかし勝ってこそ！

雷刃：そうだね。

闇：しっー

雷刃：そうだね。

闇：では、また！

雷刃：・・・“闇”の奴最後までボクの人形に気付かなかったよ・・・

。っと、ネタを披露した所で、じゃあ、次回で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0113u/>

とある市民の自己防衛

2011年11月6日00時04分発行